
漫画家志望、そして死神。

AURU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漫画家志望、そして死神。

【コード】

N8905Q

【作者名】

AURU

【あらすじ】

いたって普通の漫画家志望の高校生、真砂 一守。

彼はひよんなことから死神になった。

はたして、彼は、

学業、死神業、夢。

この三つを並立させることができるのだろうか。

感想制限外してます。

主人公紹介とでも

ましろかずせり
真砂 一守

誕生日 3 / 18

身長 163 cm

体重 45 kg

好きなもの 大判焼き

嫌いなもの チョコレート

特技 絵を描くこと

趣味 漫画を描くこと

休日の過ごし方 漫画を描く

取材を兼ねての一人旅

文具、画材店めぐり

備考 漫画家志望。

絵を描くことが小さい頃から好きで、運動神経はあまり良くない方。

だが、夜な夜な漫画を描いているせいか、体力だけは無駄にある。

ペン先はオールゼブラで、

カラーは、こつこつ貯めた小遣いで買ったコピックチャオ。

ちなみに名前の意味は、「一つの物を守り通せるように。」

主人公紹介とでも（後書き）

こんにちわー！。

AURUです。

初投稿で駄文かも知れませんがよろしくお願いします。

いきなり化けモン

「ただいまあ」

一守はいつものように家へ帰る。

頭の中はストーリーで満たされていた。

だが漫画家志望としては、この良き状況を邪魔するものがいた。大事なことを考えてるっていうのに。

「おつかえり

っ!!!カ、ズ

ッ!!!」

いきなり前方から誰かが、頭から突っ込んできた。ものすごい音を立てて。

だが、一守はそれをあっけなく避ける。

「何回言えばいいんだ。俺が帰ってきたと同時に突っ込んでくるのやめろ。」

あきれたように一守は自分の父親に言うと、

溜息をつきながら自室へと向かった。

しかし、肝心な事をさっきの騒ぎで忘れてしまったようだ。

(さっき何考えてたっけ・・・?)

流石に十二時ともなれば、辺りは静かだった。

(こういつ時は相手の目を見て……)

後ろに、後ろに。

一守は徐々に下がっていった。

すると、手に、何かが当たった。幸い、音はしない。

だが、この状況下、一守はさらに焦り、混乱してしまった。

「わっ!」

思わず声を上げてしまった。

その声に反応し、虚が少し動く。

一守は、ふと、何が当たったのか、と手元を見た。

刀だ……。

驚いた。

なぜ、こんな物がここに……?と。

同時に、こんなことも思いついた。

……コレ、斬れたりするんじゃない??

そう思い、やってみる。

一守は、鞘から刀を抜くと左の人差し指をプツッとやる。

すると、鮮血が流れ出る。

斬れた、と一守は内心、飛び上がる。

コレなら、あの化け物を倒せるかもしれない。

その考えはすぐさま実行に移された。

……頭を狙って、突っ込んでとんぼ返り。

「らあっ！」

声を上げ、斬る。

すると、虚、もとい化け物は消えていった。

「ガアアアアアアツ……。」

一守は、またも驚いた。

頭を斬っただけで消えていったのだから。

ともかく、一件落着だ。

早く眠りにつくため、一守は家に戻ろうとした……。

いきなり化けモン（後書き）

いきなり虚出てきました。

何かこれから先、急な展開になりそうで怖い・・・。

下駄に帽子に基平（前書き）

一話目の直後です。

下駄に帽子に甚平

「えーつとー……。」

一守は目の前の物を見、戸惑った。

「なーんで……、こーんな所に俺が倒れてんの？」

それは、一守の肉体であった。

玄関のドアにもたれかかって倒れていた。

何がなんだか分からない。

とりあえず突っついたり、くすぐってみたりしてみる。

……変化なし。

そうこうしていると、一守は自身の異変にようやく気付いた。

(黒い……着物……?)

それは傍から見れば、死神のそれと変わらない物である。

カランッ

突然、一守が戸惑う中、よく響く音が聞こえた。

「わっ！」

一守は声を上げ、飛び上がった。

その後も音は響き、その度に一守を驚かす。

しかも、どうやらこちらに向かって来ているようなのだ。

しばらく経ち、音が止まる。

それも、一守のすぐ後ろで。

音が止まると同時に一守は勢い良く振り返った。

また、化け物なのか、と。

だが、そこにあっただのは人影であった。

「へ？」

一守の後ろにいた者は、かなり気の抜けた声を上げる。

「あ……なんかすいません……。」

一守はとっさに謝った。と同時に体の気も抜けた。

人でよかったと思ったし、下駄に帽子に甚平ってどうなんだ、とも思った。

「……あの……、体に戻らないんスか？」

下駄に帽子に甚平は少し気の抜けた感じの声で聞いた。

どうやら、普段からこの話し方のようなだと感づく。

だが、この質問が原因で、一守の質問ラッシュは始まった。

「へ？どういうことですか？俺、幽体離脱でもしてるんですか？

ってことは俺が見えてる貴方は霊感あるんですか？

っていかどうやって……。」

「ストップ！」

「え？」

一守の質問ラッシュは無事、遮られる。というか、流石にこのペースで一気に質問されては、一つ一つ丁寧に答えるのは無理だろう。それに、答えられたとしても、この量ではかなり時間がかかる。もう、春だといえ、いまだ夜は寒い。

「まあ、まず体に入ってください。話はそれからッス。」

「いや、だからどうやって入るんですかって。」

一守は自身の体を指差し、再び質問する。

「着ぐるみに入るノリで入っちゃってください。」

(ノリってなんだよ、ノリって……。)

一守は内心呟く。だが、とりあえずは言われた通りにやってみる。すると、案外すんなり入れた。だが、一守にしてみれば、少し動きづらい。

「さてー!」

下駄に帽子に甚平は、一守が体に入ったのを確認し、パシッ、っと手を叩いた。

「ようやく貴方も体に入れたことですし、話、始めましょ。」

「……ちゃんと聞いてくださいよ……?」

いきなり声のトーンを下げる。
当然、一守の肩は上がった。

「でないと、これから貴方は生きていけなくなる。」

そう言った下駄に帽子に甚平の眼は、全てを悟ったかのような、
そんな、眼だった。

下駄に帽子に甚平（後書き）

どうも。

一守の質問ラッシュは書いてて楽しかったです。

一応、死神の力は一話の時点で手に入れてるんですが、それらしい描写はしてない……；

下駄に帽子に甚平はそれとなく、
というか、分かったと思います。

いろんな意味で目立つ服装してますモンね……。

死神だ（前書き）

二話の直後からです。

死神だ

「は？」

一守は口をパツクリ開け、啞然とした。
当たり前だ。

いきなり現れた、下駄に帽子に甚平の男が、
これから生きていけなくなるだどうだ、訳の分からないことを言っ
ている。

一守にとって理解が追いつかない状況にあった。

下駄に帽子に甚平は、またも理解できないようなことを言った。

「まあ、貴方の今の状況説明しときましようか。
貴方は……」

死神だ。」

えっ、と一守は声を上げた。
と同時に、ある考えが思い浮かぶ。

（俺が、人を殺さないといけないのか？）

それは死神、という単語を聞いて真っ先に浮かんだイメージであっ
た。

だが、一守の考える暇もなく、下駄に帽子に甚平は話を進める。

「貴方がどのように死神になったかは分かりませんが・・・、生まれ持ったの物なのか、気付かないうちに覚醒していたのか・・・。」

もしかすると、コレまでにはない例かもしれませんが。ですが、最初の一つ以外、無いと考えてもいいくらいです。」

一守は眼を見開く。

ただ、刀を手に取った。

気付けばよく分からない黒い着物を着ていた。

最初から、死神だったなら、もう、とつくに気付いていたはずだ。目の前の男は、生まれ持ったの物なのかもしれない、と言う。だが、一守は、それは違う、と内心で繰り返していた。

きっと今までになかった話に違いない。

そう、思っていた。

「・・・調べてみないことには分かりません・・・。」

・・・そうっスねえ・・・話、長くなるでしょうし・・・、ウチ、来ます?」

下駄に帽子に甚平はとんでもないことを言った。

季節は春、とはいえ、まだ寒いから室内に入ろうと言うのは分かる。だが、初対面で名前も知らないやつの家に来い、と言うのはどうだろうか。

とにかく、一守は遠慮した。

「いや・・・、初対面だし・・・、こんな時間にお邪魔するのにもなんですし。」

しかし、効果は得られず。

「まあまあ、行きましょ。」「じじや冷えますよ。」

唆される。だが、再び。

「いいですよ……、」「じじで。」

これで、下駄に帽子に甚平は諦めた。

「……しょうがないっスねえ……。」

だが、何かしようとする。

一守は自然と身構えた。

「よっこいせつと。」

ひょいっと一守を担ぎ上げた。

コレにはかなり驚く。

「わあーっ！ちょっと！降ろしてくださいっ！」

一守は手やら足やらをジタバタさせて暴れる。

無理やり降りるために。

「暴れないでくださいな。」

……別に、平気っスけど。」

この、下駄に帽子に甚平の一言が一守をプチッと行かせる。

(それって……、俺がちっさいからか……?)

なぜか、一守の脳内でその一言が自身の悩みとリンクする。
さきほど、理解が追いつけなく、思考回路が訳の分からなくなった
せいだろうか。

次の瞬間、一守が下駄に帽子に甚平の背に蹴りを入れたのは言うま
でもない。

死神だ（後書き）

うっ……。

早く下駄に帽子に甚平の名前を出したい……。

次回、やっと名前出せそうなんですが；

では！

感想等お待ちしております。

自己紹介(前書き)

三話からしばらく経ったところです。

自己紹介

一守はもう、とつくに抵抗をやめていた。

無駄だと分かったし、夜遅くまでペン入れをやって、その後のこの騒動だ。

少し眠気がする。

下駄の音が辺りに響く。

慣れている者にとっては別にどうもしない音だが、慣れていない者からすれば、耳障りな音だ。

つまり、慣れていない一守は先ほどから耳が痛い。

「さーてと。」

耳障りな下駄の音が止まった。

「ここがアタシの家っス。」

そう言うと、下駄に帽子に甚平は、担いでいた一守を降ろす。

そして、一守はおもむろに顔を上げ、

下駄に帽子に甚平が、自分の家だと言つ建物を見た。

『浦原商店』

という看板が掲げてある。

「浦原・・・商店・・・？店？」

「・・・じゃあ、浦原さん？」

看板を見、一守は下駄に帽子に甚平に尋ねた。

両者とも互いの名を知らない。

「え？ああ・・・そういえば自己紹介、まだでしたね。」

下駄に帽子に甚平は今になって気付く。まあ、一守もなのだが。

「アタシは見ての通り、この店主。」

浦原 喜助っス。

今後ともよろしくお願いしますね。」

一守もそれに続き、自己紹介する。

「俺は真砂 一守。」

ついでに言っておきますが、漫画家志望です。

運動神経はあんまり良くないですよ。」

そして続ける。

「まあ、よろしく願います。」

自己紹介（後書き）

やっと浦原さんの名前が出せた・・・。

まあ、下駄に帽子に甚平でこのしゃべり方。

この人しかいないんですが；

そして、一守の敬語。

敬語になってもなぜか一人称が「俺」。

面接とか大丈夫だったんだろーか。（笑）

今回は割合短めでした。

では、感想お待ちしております。

刀の名？(前書き)

四話からしばらく経ったところでは。

刀の名？

「えっと・・・基本は・・・わかりましたか？」

浦原商店、店内。

浦原は一守に問いかけた。

「ハイ・・・どういう訳か、俺は死神になっちゃって、それで、その死神の仕事っていうのが、虚退治と、尸魂界に整を送ること。で、虚っていうのが悪霊、整が普通の霊。そして、放っておくといずれ虚になる・・・。コレが基本でしたよね・・・？」

「はい、そうっす。」

浦原は納得したように頷く。
そして続けた。

「今日教えたほかに、いろいろあるんすけど。それは後々教えていきますね。今日はもう遅いですし。まあ、どーでもいいような事とかたまにありますけど。・・・そういえば、体に入らなくていいんすか？」

一守は浦原に言われて気付く。
そういえばさつき義魂丸を貰い、飲んでからそのままだった。先ほど使ったのは魂を抜くだけの物だ。

つまり肉体はパツタリと倒れている。

その肉体を一守はおもむろに起こし、入ろうとする。が、

「ちょっと待つてください。」

と浦原に止められた。

入らないのか、と問われ、入ろうとしていたのに。

「斬魄刀の説明、手短にですが・・・しましたよね？」

浦原が問うたのは、死神が持つ、それであった。

「あ、はい。」

虚を斬る事で浄化し尸魂界に送り、整を魂葬することで、これもまた、尸魂界に送る。

で、解放もできて、始解と卍解・・・二段階解放ができる。でしたよね？」

一守は先ほど聞いたことをそのまま言った。

「真砂さん・・・貴方は今日気付いたら死神になっていた、と言っていましたか・・・、

その斬魄刀、始解どころか卍解まで行っちゃってますよ。

真砂さんの霊力を見る限りでは、っすけど。

隊長格はくらい余裕にありますモン。」

えー・・・つと一守は口を開ける。

尸魂界の組織、護廷十三隊の事は聞いた。

自分がその、護廷の隊長格に匹敵するなど、想像もできない。ましてや、卍解など・・・。

「あのー・・・、俺、刀の名前なんて知らないんですけど・・・？」

一守はおずおずと浦原に尋ねた。

今までそんなこと、聞いたこともなければ見たこともない。

「じゃ、精神世界行って、自分の斬魄刀に会って来てください。

そこで大方分かると思いますよ。」

「・・・はい。」

一守は言われるがままに精神世界へと入っていった。

刀の名？（後書き）

いきなり主人公、卍解使えちゃいました；
しかも隊長格に匹敵する霊力・・・；
コレにもちゃんと理由はあるんですが。
それは後々明かします。

では、感想等、お待ちしております。

精神世界の住人（前書き）

五話の直後です。

精神世界の住人

辺り一面に広がる荒地。

一守は気が付くとそこにいた。

草など全く生えていない。

空はとても青いの。

「ここが・・・精神世界か・・・。」

一守は呟いた。

その声は誰にも届くことはないだろう、と思ったが、
斬魄刀がそれを聞いていた。

「そつだ、よく来たな、我、主。」

その声が聞こえ、辺りは風に包まれる。

だが飛ばされそうなほどの風は、すぐに晴れていった。

目の前を見ると、白い毛で、目の色が左右で異なった獅子がいた。

左が深いブラウン、右が明るい黄色。

その獅子は雄々しく立ち尽くしたまま動こうとしない。

「よう、俺の斬魄刀だろ？」

「そのとおりだ。」

だが、名を忘れられるとはな・・・。悲しい物だ。」

獅子は悲しい物だ、と言っているにもかかわらず、
全くそういった素振りを見せなかった。

相変わらず、雄々しく立ち尽くしたままだ。

「忘れた、って事は、知ってた、って事だよな。
「そんなの、聞いた覚えないんだけど？」

一守は獅子に問い詰めた。

精神世界に来たのはこれが始めて。

このような獅子にあったこともない。

「・・・そうか、覚えていないか。

やはり、記憶は共有されないうだな・・・。

仕方あるまい、獅牙^{シガ}、出て来てくれ。」

目の前の獅子は意味有り気なことを言うと、誰かを呼んだ。
すると、獅子の前の空間にひびが入る。

バキバキと音を立てて、ひびは拡がっていった。

そして現れたのは

・・・、

一守に瓜二つの人物であった……。

「よっ、白獅子^{シロジツ}、久しぶりだな。」

その、ひびから出てきた人物、目の前の獅子、
……白獅子と呼ばれた斬魄刀が言った獅牙というヤツだろう。
一守に瓜二つとは言うものの、目の色は違った。
白獅子の右目に似た色をしている。

「は……？」

一守は啞然とした様子で声を上げた。
双子でもないと言っのに、瓜二つの人物が目の前にいたら、
そりゃあ誰だってビックリするだろう。

「お前が一守ってヤツか。
白獅子から聞いたけど、やっぱりそっくりなんだな……。」

獅牙は、感心したように一守を見た。
自分が自分を見るみたいで、なんか気色悪い。

「・・・獅牙、だったな。」

お前は俺のなんなんだ？ すごいそっくりさんじゃねえか。」

自分をジロジロ見てくる獅牙に対して、一守は言った。

「何、って？」

「・・・まあ、難しい話だけど、俺が死んだ後、お前に生まれ変わった。」

で、消滅したはずの俺の魂が、欠片となってお前の魂に残って、お前が死神として覚醒した影響で、っていうか、霊力と死神の力は俺の魂の欠片のモンだけだ。

お前が元々の霊力高かったからだろうな。

で、とにかく、お前が覚醒したから、俺の力と存在も引き出された。」

ってことだ。

つまり、死神の力は俺のモンで、霊力やらは、

俺とお前を足した分、って事だ。

白獅子は、大まかに言えばお前の斬魄刀だけど、

細かい事言っと、俺の斬魄刀・・・。

そういうことだ。」

確かに難しい。

つまりは獅牙は一守の前世であること。

その、消滅したはずである魂の、欠片が一守の魂に残ったこと。

そして、欠片が魂として復活し、その魂は死神の力を持っていた。

そういうことになる。

ということとは、一守自身はまだ死神の力など手にしていないのだ。

「・・・、って事は、俺の体には二つ、魂が宿ってるんだよな？」

じゃあ、なんで義魂丸飲んだとき、出て来なかったんだ？」

一守は理解し、逆に聞き返した。

「あー、それはだな。」

斬魄刀と似たようなモンだ。

俺はずっとお前の内側にいるって訳。」

一守は、へー、と適当に返した。

「じゃあ、俺みたいなヤツのことなんて言っただ？」

獅牙の目が点になった。

こんなこと聞かれるとは思わなかったのだろうか。

「……いや、しらねえ。」

適当になんか付けとけ。」

どうやら知らなかったらしい。

なんか付けとけて言われるくらいだから、このような例は他にないのだろう。

「……それじゃ、心継ぐ者、で、心継者。」
やしこけとんし

「ま、それでいいんじゃないの？」

どうせ、お前くらいしかいないだろうし。

と、獅牙は続けた。

だが、一守は適当につけた名の読みを聞いて、少し思うことがあっ

た。

(なんか・・・神経質な人みたいだ・・・)

精神世界の住人（後書き）

はい。

これが理由です；

一守が今もつてる死神の力は、一守のじゃなくて、獅牙のもの、つて事です。

つまり、一守自身の死神の力が覚醒しようってなら、一守は二本斬魄刀持てちゃいます；

さて、心継者、今は一守しかいないのですが、後々、二、三人は出すつもりです。

誰の心継者かはお楽しみに、というヤツです。

ちなみに獅牙、とある隊長さんとすごい関わりがあったりします。こちらの方は上の物より、大分早く出せると・・・；

それでは、感想等お待ちしております。

明日から一週間(前書き)

六話から少しだけ経った所です。

明日から一週間

一守は不意に目を開いた。
現実へと戻ったのだ。

「おっ、戻ってきましたか。」

目の前にいた浦原は気の抜けた声でそう言った。

「はい……、まあ、一応名は分かりました。
……白獅子、だそうです。」

そういった一守の表情はどこか複雑だ。

「……どうしたんスか？
そんな顔して。
精神世界で何かありましたか？」

浦原は問うた。

一守のどこか複雑な顔を見て。

「いや、なんでもありません……。
ただ、ちよつと不安で。」

一守はうつむいたまま答えた。
先ほどの出来事を思い返ししながら。

「……不安で？」

「この先の事ですか？」

「またも浦原は問う。」

「やはり、一守の表情は変わらない。」

「すると一守は何の理由もなく、先ほど、獅牙に聞いたことを切り出しました。」

「今、俺が手にしている死神の力は、俺のモンじゃないそうです。」

「はい？」

浦原は啞然とした。

「そんな訳があるか、と。」

「……俺の中には二つ、魂が宿っているらしいです。」

「俺の魂は、ただ霊力の高い魂魄。」

「もう一つ、獅牙、って名乗ったヤツが、」

「死神としての力を持っている。」

「だから、この斬魄刀は獅牙の斬魄刀だし、」

「この霊力は俺のと獅牙のとを足した数……。」

「一守が獅牙の名を出したとき、浦原の表情が一瞬曇ったように見えた。が、気にせずに一守は進めた。」

「獅牙曰く、俺は獅牙の生まれ変わりで、」

「消滅したはずの獅牙の魂の欠片が、俺の魂に宿り、」

「何かの弾みに覚醒したのだどの。」

「難しい話だからあんまり覚えてないんですが。」

一守は、小さくハハツと笑った。複雑な、顔で。

「それはつまり、貴方が死神の力を手に入れようものなら、貴方は斬魄刀を二本持つ羽目になる……。そうなってしまうですね。」

一守はうなずいた。
すると、その表情は変わった。

「だから、俺は、俺自身の死神としての力を手に入れたい。
……、浦原さん。
可能ですか？」

しばらく間が空き、浦原が口を開く。

「そうっスねえ……。
貴方が望むなら修行つけましょう。
ただ……。」

「ただ？」

一守が問う。

そしてまた間が空き、口を開いた。

「今回の修行の影響で、貴方の内側にいる獅牙さんがどうなるかは分かりません。」

「なんせ、こんな事、聞いたことも、見たこともないですからからね。」

「それでもやりますか？真砂さん。」

「はい。」

はつきりと、短く答えた。

長ったらしく答えては、返って不安に見える。

「じゃ、明日から一週間。

修行、やりましょう。

・・・真砂さん。」

7日間、アタシと殺し合い、やれますか？」

浦原の声のトーンがいつもより、ぐっと下がる。

そして一守は深くうなずいた。

「逆に俺がアンタを殺ってやろうか？」

あえて、敬語で言わなかった一守の眼には決意しかなかった。

明日から一週間（後書き）

いよいよ修行です。

元々考えていた中にはその要素は一切無かったのですが、流石に入れた方がいいだろうと思ひ。

なぜ一週間か、というと、

時間軸としては一護がルキアと出会う半月前なので、

まだ、一学期の初め。

それなのに十日だとイロイロ都合が悪いし、

一守は最初から霊力が高いので、

一週間でいいんじゃないか、と思った結果です。

では。

感想等お待ちしております。

一日目（前書き）

七話から一日経ったところです。
修行、一日目。

目目

「ぶっひゃ

！！」

「なんだこりゃ

っ！！？」

「この店の地下に、こんなバカでかい空洞があったなんて

！！」

浦原商店地下。

一守ではなく、浦原の声が響く。

「代弁しなくても……。」

それに、十分驚いてますし。」

一守がそういった後も浦原の声は響いていた。
それほどの広さなのだ、ここは。

「何を隠そうこの勉強よ。」

「いいですから、早く始めましょうよ……。」

一守は無理に浦原の言葉をさえぎった。
なにか、えらく長くなりそうで嫌だったからだ。

「へえ……、いい心がけっスねえ……。」

……それじゃ、早く体から出てくださいな。」

浦原は、一守に向かつて、ひょいっと義魂丸を投げた。そして、一守はそれを取り、飲み込む。すると勢いよく死神姿の一守が出てきた。義魂丸が魂を抜くだけのものだったから、肉体はそのまま動かない。

「慣れないな……、これ。」

死覇装の裾を引っ張りながら一守がいう。が、つかの間、一守は倒れこんだ。

激痛が、走る。

浦原は手を出そうとはしない。

何か、考えでもあるのだろうか……。

「レックスン1、真砂さんがそれにどこまで耐えられるか、それが鍵っス。

……早めに戻って来てくださいよ？」

浦原は、感情を押し殺した、いや、感情のないような眼で一守を見た。

「テメツ……！殺す気か……！」

痛みのせいか、一守は途切れ途切れに言う。

浦原を見上げるように睨みながら。

「……、俺がアンタを殺つてやるつか」って言ったのは貴方でしょくに。

そりゃアタシだって殺す気でやりますよ。」

そう言うと浦原は一守から離れていった。

「ど……」

どこ行く気だ、そう言おうとした時、一守の体から一気に力が抜け、そして、一守は意識を失った。

ドサツと倒れる音がし、一守がいた、その方向を浦原は見る。

「……すぐに帰って来れますかねえ……」

浦原が呟いた一言は、誰にも届くことなく消えていった。

一守の辿り着いたそこは、前に来た精神世界とは違っていた。
黄昏時の薄暗い空。

延々と続く、細く、暗い、森の道。

「なんか……不気味だな……」

出そうな気がしてならねーぞ、ここ。」

一守はそう呟き、辺りを見回す。

すると、一つ、大きな黒い影が目の前を横切った。

それを眼で追っていくと、その、大きな黒い影は、

一守の三歩ほど前で止まる。

見るとそれは、背の高い、痩せた男であった。

黒い外套を羽織っていたがゆえに、黒い影にしか見えなかったのだ。
さらに見ると、西洋の神話に出てくる死神のような大鎌を背負って

いた。

「よう、一守。」

俺見るん初めてか？」

目の前の死神のような男は、以外にも関西弁で話しかけてきた。

「誰だ？ テメエ。」

鋭い目付きで一守は問う。

「・・・なんや、そんな怖い顔すんなや。」

俺はお前の斬魄刀やってのに。」

男は確かにそう言った。

一日目（後書き）

一守の斬魄刀、出て来ました。
何で関西弁なんだか；

ちなみに、一守が倒れたのは、
義魂丸に細工がしてあったからです。
わかったとは思うんですが；

では、感想等お待ちしております。

続・一日目（前書き）

八話の直後からです。

続・一日目

「俺の・・・斬魄刀？」

一守は目の前の男に問うた。

ここに自分の斬魄刀がいるということは、前に来た精神世界は獅牙のものだったということだ。でなければ、白獅子は居ないであろう。

「せや。」

「なんや、ビックリしたんか？」

「ちよつと・・・な。」

「ふーん、そうか。」

二人の単調な会話が続いた。だがそれ以上は続きそうに無い。そんな時、一守が切り出す。

「・・・名、なんていうんだ？」

それは、斬魄刀と同調するに当たって、必要なことであった。男は微笑みながら言った。

「今の一守に聞こえるか分からんけど一応言っといたろ。俺ん名は、」

暗空アンクウや。」

一守は確かに聞き取った。
ハッキリと、その名を。

そして、鸚鵡返しのように言葉を返した。

「……暗空……。」

「せや。なんか遭ったときは俺ん名、呼びや。
いつでもワレの力んなったる。」

暗空はそう言うと、すうつと消えていった。

そして、柄の黒い刀だけが暗空の居た場所に残る。

一守は無造作に刀を手に取った。

「……振り返るなよ。」

そこにあるんは死だけや。」

手に取った瞬間にどこからか暗空の声が聞こえた。

「過去を見んな。前を向け、未来を見い。」

「呼び出せ、俺を。」

浦原商店地下、勉強部屋。

そこには、倒れた一守、浦原、さっきまで居なかった鉄裁がいた。
いつ精神世界から戻ってくるか分からない、

一守の体には、強力な縛道が鉄裁によって掛けられていた。

・・・縛道の九十九、禁。
そんな、とてつもない鬼道が掛けられている。

そんな状況下、急に鬼道が解けた。
九十番台という強力な鬼道が。

「な・・・っ！」

鉄裁は声を上げる。浦原も眼を見開いた。

乱雑に解かれた反動のせいで、土煙が立ち、よく見えないが、そこには人影があつた。

それも、平然と立っている。

その様子に、二人が啞然としてみると、土煙の向こうから、まさか、と思う声が聞こえた。

「黄昏に見舞え・・・」

解号だ。

それが聞こえると同時に、二人は反射的に身構える。

「暗空！！！！！」

どっ、と、おぞましく、青黒い霊圧に辺りは包まれた。

浦原は右、鉄裁は左に避ける。

と、同時に、二人がいた所へ青黒い霊圧が襲ってきた。

そして、青黒い霊圧は地面をえぐる。

二人は避けたから良い物の、まともに食らっていたら危ない所だった。

そうこうしているうちに、勉強部屋は徐々に青黒い霊圧に覆われ、

最終的には、全体を覆う。

土煙はもう、とうに晴れていた。

だが、青黒い霊圧に覆われたこの中。辺りは暗く、その姿は全く見えない。

「真砂さん……」

浦原は唐突に発生源になっているであろう者の名を呟いた。

その声が聞こえたのか否か、突然、ぱつ、と霊圧が晴れていく。

そして、その霊圧は、発生源へと戻っていった。

……発生源に眼をやると、先ほどまで鬼道で抑えられていたはずの一守が、

呆然と立ち尽くしていた。

恐らく、斬魄刀であろう大鎌を手にして。

まさか、ここまでになるとは思わなかったらしい。

「暗空……」

ポツリと一守は呟いた。

その後、じつと自身の斬魄刀、暗空を眺める。

すると、少し離れた所から、一守を呼ぶ声が聞こえた。

「真砂さん、大丈夫っスカー？」

「おー、大丈夫ー。」

っていうか、なんかスイマセン……。あんな風になって……。

一守はその問いに対する答えと、謝罪を返した。

「いえ、大丈夫ですよ。」

正直、あれほどまでとは思ってなかったんすけどねえ……。まさか、鉄裁の鬼道を破って見せるとは……。」

浦原は感嘆の声を上げる。

「いや、偶然ですよ。」

俺は暗空に力、借してもらっただけです。

自分でもあんな風になるとは思わなかったんですが。」

そういって一守は苦笑する。

と、浦原が問いかけてきた。

「暗空、って真砂さんの？」

「はい、俺の、斬魄刀。」

そういって一守は大鎌……。暗空を掲げて見せた。

続・一日目（後書き）

いやー、暗空、書きにくい！

まあ、これから先、

そんなに出てくることは無いでしょうが；

ちなみに、暗空。

フランスの神話に出てくる、アंकウがモデルです。

カタカナを漢字に変えただけ；

では、感想等お待ちしております。

二日目の午後（前書き）

九話から、少し経った所です。
修行、二日目。

二日目の午後

「はあー！何やるかあー！」

一守はそう言って伸びをする。

修行、二日目。

だが、一守は川原にいた。

昨日あそこまでした一守の次なるレッスンは、準備に時間がかかるらしい。

ゆえに、休日を得て、一守はここにいる。

しかし、急な話だった為に何も考えていない。

学校には一週間休むと言ってあるから、行くところにも行けないし、家族にだって、一週間、家を開けると言っている。

少ない小遣いは、持ってきてはいるが、今、買う物などない。

「やる事ねえなー……。」

一守はボソツと呟いた。

だが、やる事が無く、行くところも無い。

この状況は半ば一守が作った物だ。

一週間、休むだの、家開けるだの言ってしまったが為に起こったことである。

しょうがない、

そう思いながら一守はゆっくりと立ち上がった。

あれから、数十分。

一守はショッピングモールの中を歩いていた。別に買う物など、ありはしないのだが。

しかし、こういう所へは時々来る。

今の一守に用は無いというのに、家具屋に入ってみたり、雑貨屋に入って、面白い物が無いか見たり。

だが、最終的にはいつもフードコートへ足が向かった。

大方見終えた後、一守はいつものように、のらりくらりと、やはりフードコートへ向かう。

別に、ハンバーガ持って帰ろうとか、アイス食べて帰ろうとか、そんなわけじゃない。

少し奥の方へ行った所に、小さめの喫茶店がある。

一守は、なんだかんだいってこのマスターと仲が良かったりするのだ。

「よう、マスター、久しぶり。」

そう言っで一守は店内へと入っていく。

時間が時間なのか、店内には客、誰一人といない。

「あ、一守君。」

久しぶりだね。

・・・高校生、だったけ？」

一守がここへ来るのは半年ぶり。

その間に、受験を終え、卒業式を終え、入学式を終え。

高校に上がってから始めて来た。

「おう、高校上がった。第一高校。」

そう言つて一守はカウンターの目の前にある椅子を引いて、無造作に座つた。

「ふーん、第一高校か・・・。

たしか、変わった制服の所だったね。

そういえば、さっきまで二人、第一の子、いたよ？」

「・・・はあ・・・、よかつた・・・。

顔会わせてたらやばいことになつてたかもだ。」

一守はカウンターにバタツつと突つ伏した。

「なんで？」

・・・というか、それ以前に、一守君がその席に付くつてことは、何かあつたのかい？」

一守の顔が、ゲツ、つと言つたのよつに気まずいような感じになつた。

凶星だ。

一守が中一るとき、ここに始めて来てから、よく来てはいるが、相変わらずすごい人だと一守は思った。

鋭い洞察力と観察力。

だから、何も言わなくて済むのだろうか。

「いや、イロイロとな。

マスターに言つたつて分かりやしねーことだ。

説明しようにも時間がかかるし、

言ったところで信じてはくれないだろうし。」

一守は頼杖を付いて、そして溜息を付いた。

「そうかい。」

じゃあ、一守君が言いたくなるまで僕は待つているよ。言ったところで信じてくれないって思っているのなら、それは、言いにくいことでもあるんじゃないのかい？」

マスターはおもむろにコーヒーカップを手に取る。

「まあ、な。」

一守は短く返した。

「……言いたくないようなことを、無理に聞き出そうなんて、そんな真似はしないさ。」

むしろ、そんなこと、したくないしね。」

ハハッ、っとマスターは苦笑する。

すると、先ほど手に取ったコーヒーカップに、コーヒーを入れ始めた。

「今日の、何？」

一守はさっきまで付いていた頼杖を解く。

この店のコーヒーと紅茶は、日によって違うのだ。

まあ、マスターの気まぐれによって決められているのだが。

「今の一守君にぴったりなヤツ。」

・・・これを飲んで、頑張るといいよ。」

マスターはにこやかにコーヒークップを差し出した。

二日目の午後（後書き）

今回は休日でした。

マスター書いてるとき、藍染書いてるような錯覚に……；
流石、鏡花水月

この先、マスターの紹介するような場面、
無いと思うので、一応載せておきます。

ヒイヲキ ユウリ
柊 優里

身長 176cm

体重 62kg

一守曰く、見た所二十代後半。
本人は年齢を明かしていない。
髪型は黒髪にショート。

まあ、適当にさらっと……；

では、感想等お待ちしております。

三日月（前書き）

十話目の翌日です。
修行、三日月。

三目

「浦原さん、準備できましたかー？」

死神化した一守の声が地下の勉強部屋に響く。

昨日、浦原商店に帰ってから一晩経ったのだ。

流石に準備は調っているだろうと思い、

義魂丸を飲み、死神化して来た。

「はいー。準備できてますよー。」

今度は別の声が響いた。

どうやら、中心辺りにいるらしい。

一守は、その勉強部屋の中心辺りへと歩いていった。

しばらくすると、なにやら、大きな結界が張ってあった。

結界の中には人影がある。

恐らく浦原であろう。

しかし、結界が張ってあるために、内側へは入れそうに無い。

だが、内側にいるであろう浦原は声をかけようとはしなかった。

。。。何も言わないってことは、言う必要が無いってことだよな。。。

そんな考えが一守の頭の中をよぎった。

試しに手の平を結界に当ててみる。

すると、思いの外、すつ、つとすり抜けられた。
そして、すり抜けて内側に入ると、そこにはどこかのゲームで見た
ような、

ステージのような、フィールドのような、そんな感じの場所だった。
中心辺りには、白い、大きな人形を持った浦原が立っている。

「浦原さん……、これ、なんなんですか……？」

一守は下を指差して浦原に問う。

「真砂さんのために造ったバトルフィールド戦闘場っス。

一昨日、始解だけであそこまでやったっスからねえ……。
力を制御する細工をさせて頂きました。」

へえー、と言うように一守は、その、浦原お手製の戦闘場とやらを
眺めた。

しばらくすると、また、浦原に問う。

「……その白い人形はなんですか……？」

次は、浦原の持っていた白い人形を指差して問う。

「……これっスか？これは転心体っス。

後々使うんで、ついに出しときました。」

「何に使うんですか？」

また、一守は問うた。

「それは、使うときが来たら教えましょう。」

「……そういえば、レッスン2の内容、知らせてなかったっすねえ……。」

浦原は話を逸らした。

「というか、レッスン1のときは、何も言わなかったよな、と一守は思う。」

「今回は、この、戦闘場で、擬似戦闘を行ってもらいます。戦闘経験、無いに等しいでしょう？」

「一度、虚と戦ったつきり、後は戦っていないはずです。」

「まあ、そうですね……。」

浦原の言葉に、一守は同意した。

そして、続ける。

「でも……、誰と……？」

「……そうっすねえ、まずは白打でやりましょうか。」

隊長格ほどの霊力を持つてるんなら大丈夫でしょう。

戦闘への恐怖と、死神の魂魄での動き、

どうにかしないといけないっすからね。

「……やるにはこれが一番でしょう。」

「……始めますよ？真砂さん。」

そう言いながら、浦原は結界に、いつも手にしている杖を立てかけた。

「え。」

一守は啞然とする。
浦原が、相手だといふのだ。

三日目（後書き）

浦原さんがいきなり相手です。

しかも白打。

元二番隊三席だった浦原さんです。

蛆虫の巢のヤツらを素手で制止した浦原さんです。

一守はまともに相手できるんでしょうか・・・；

では、感想等お待ちしております。

続・三日目（前書き）

十一話の直後からです。

続・三回目

一守が考える暇も無く浦原は掛かって来た。

「おわっ！」

一守は声を上げ、飛んできた浦原の拳を、ほとんど反射的に、左へ避ける。そして、そのまま側転を繰り返した。

「ちょ！俺、こういうのやったことねえって！」

構えながら一守は叫ぶ。

「じゃ、さっきの側転はどうなんスか？」

真砂さん、自分で運動神経良くないって言ってたじゃないっスか。

「

確かにそうだ、それは否定できない。

何がなんだか分からなくなっって、気付いたら側転を繰り返していた。

「霊力とは霊なる者に働きかける力っス。

ゆえに、霊力が高まれば、霊体での動きは俊敏になり、

実の肉体以上の運動能力が発揮できる。

つまり、隊長格ほどの霊力がある真砂さんは、

かなりの戦闘力の持ち主となる訳です。」

「ってことは……。」

「考える時間はありませんよ。」

そう言つて浦原は瞬歩で一守の目の前に来る。

そして、一発。

一守は避けようとしたが、この距離では避けられない。

「くっそ！」

避けられないと分かつて、一守はとつさに防御の体勢へと入る。つかの間、浦原の蹴りを受け止めた。

そして、後ろへ引く。

浦原も同時に後ろへと引いていったが、また攻めてきた。

それを見て、一守も攻める。

だが、一守は、浦原を目の前にしたとき、とつさにしゃがんだ。

そして右足を伸ばす。

相手は攻めて来ていて、すぐには止まれない。

つまり、浦原は一守の足に引つかかつて、躓く。

そして、浦原はやはり躓いた。

しかし、バランスは崩した物のすぐに手を着き、体勢を立て直そうとする。

回転技でもするつもりなのだろう。

が、一守はそれを狙った。

浦原が体勢を立て直そうとした瞬間、一守は背後に回り込んだのだ。そして、そのまま背中の一撃入れる。

が、浦原は、それを避けようと体をそらす。

それにあわせて、拳の軌道をそらすか、

目標より少しそれてしまい、結局、背中ではなく脇腹に当たった。だが、その後浦原は体勢を瞬時に整えた。それにあわせて一守は後ろに引く。

「一発、喰らってしまいましたね……。」

ボソツと浦原が呟いた。

「俺のほうがまともに蹴り喰らってる。防いだけど。」

そう言った一守は、いつの間にか敬語ではなくなっていた。

「いや……。まさか、真砂さんがあんな風に戦うとは思ってなかったっすから。」

あんな風、というのは、恐らくいきなりしゃがんだことだろうと、一守は考えた。

「……人は見かけによらない、ってヤツだ。護身術で、合気道やってる。」

もう、かれこれ10年ちょっと。護身術も兼ねてるから、相手の力を使ってやるのも教わった。」

「そっつすか。」

じゃあ、そういう戦法を身に付けたほうがいいのかも知れませぬね……。

まあ、今は擬似戦闘です。後々やりましょう。

……それじゃ、もう一度、行きますよ?」

「おじ。」

そう一言言って、一守は構えた。

続・三日月（後書き）

一守が作中で言った、

「こづいづの」

っていうのは、喧嘩だとかそづいづのです。

戦闘描写、下手かもしれないですが、

その辺はすいません・・・；

では、感想等お待ちしております。

四日目の突然の思いつき（前書き）

十二話目の翌日です。

修行、四日目。

四日目の突然の思いつき

浦原商店 地下勉強部屋

「なあ、浦原さん。

ちよっと思いついたんだけど、いいか？」

一守は、唐突に浦原へ話しかけた。

突然の思いつき、というヤツを浦原に言うために。

修行、四日目。

ちなみに、ここまでぶっ通しだ。

「なんスか？」

浦原は短く返す。

「・・・白打に鬼道練りこんだらどうなる？」

くっ、と一守は手に力をいれ、霊力を固めると、逆の手の平に拳を当てる。

「それは・・・、いくらなんでも危険すぎます。

まあ、やるうと思えばやれるんスけど。

白打だけでいくと言うのならその道のプロを呼んでも構いませんが
「？」

「ふーん・・・。

危険、ねえ・・・。」

一守は、あからさまに霊圧を高め、刀を抜いた。

「じゃ、斬魄刀でやるのはどうなんだ？」

「・・・そうっすねえ・・・、それは誰もやったことは無い。

一回、試してみます？」

結界に立てかけてあった杖を手にとると、浦原はおもむろに杖から刀を抜き出した。

「仕込みって・・・、おい・・・。」

一守はそう呆れた様に呟いて、解号を唱える。

「黄昏に見舞え、暗空。」

刀は大鎌へと姿を変え、この間の比では無いが、青黒い霊圧が一守を取り巻く。

と、同時に、電気のように明るく、激しい光が垣間見た。

鬼道だ。

練りこんだ鬼道を斬魄刀に叩き込む。

それは、斬魄刀にとって、大きな負担に為りかねない。

つまり、どこかに叩き込むときの衝撃を逃がさなければならなくなる。

「耐える・・・！」

そう呟くと、一守は鬼道を叩き込みに入った。衝撃を逃がすことなど、全く考えてはいなかったが、自然と両腕から衝撃が逃げ、死覇装の袖が弾け飛んだ。と、同時に、青黒い霊圧が晴れる。

そこには、鬼道を纏った大鎌、暗空を手に、立ち尽くしている一守がいた。

「おお、やれた。」

一守は、しみじみと暗空を眺める。

「あの、短い間で……。」

「……まあ、一回やってみますか。」

浦原は、構える。

「起きろ、紅姫。」

仕込み杖は、鐔の無い、柄の曲がった直刀へと姿を変える。

「おお、すげ。」

「やっぱり死神だったのな。」

一守は感嘆の声を上げると、構え直した。

「……多分、加減できないと思うんだけど……。」

「その時はそんな時で。」

そう言って、一守は大きく振りかぶって、斬撃を放った。

青黒い斬撃の中には、やはり鬼道が垣間見る。

「啼け、紅姫！」

浦原もまた、斬撃を放つ。

一守のものとは違った、紅い、斬撃。

青黒い、一守の斬撃を相殺するつもりなのだろう。

だが、そうとはいかなかった。

一守の斬撃が、浦原の斬撃を飲み込んだのだ。

「血霞の、盾！」

浦原はとっさに盾を張る。

それと共に、大きな爆発のような土煙が起こった。
結界にも、ひびが入る。

しばらくすると土煙が晴れてきた。

「・・・これじゃ、せつかくの戦闘場が壊れそうじゃないっすか・・・」

「あ、悪い。」

「加減できない、って言ったんだけど？」

一守は構えを解くと、こちらに歩いて来ながら呟いた浦原に返事を返した。

「帽子も、どこかに飛んで行ってしまいましたし。」

「この結界の中にあることは確かだろ。

・・・って、浦原さん。

素顔は割とカッケーんだな、意外。」

帽子を被っていない、素顔の浦原を見るのは、一守はこれが初めてだ。

「でしょ?」

「自分で言っな。

ナルシストか、アンタは。」

そう言うと、一守は浦原に蹴りを入れた。

「痛いっ!」

声を上げる浦原を見て、一守は少しばかり呆れるのだった。

四日目の突然の思いつき（後書き）

どもです。

最近、更新できていなかったせいか、

なかなかうまく文が纏まっていないうような・・・；

一守の突然の思いつきですが、たぶん浦原さん、

なんだかんだ言って、少しビックリしたんじゃないかな、と。

では感想等お待ちしております。

五目目（前書き）

十三話目の翌日からです。

五目目

「浦原さん……、今、何時……？」

一守は、ぐったりとした様子で言った。

この、地下勉強部屋は、かなり時間が分かりにくい。

「……、多分、もう朝です……。」

浦原がそう言ったとたん、一守の頭上で、鶏が鳴いたように思えた。

「……、寝よう。」

そう一守が言うと、浦原も同意し、二人はそのまま倒れこむようにして眠りについた。

あれから、五時間。

眠る体力すら無いのか、と一守は思った。

予想以上に早く起きたからだ。

まだ、疲れが残っている。

「……あれ？」

寝起きの声で一守が呟く。

辺りを見ると浦原が居なかったからだ。

「……、よう。」

目え、覚めたか？」

「うおおっ！！！」

一守は驚き、瞬時に声の聞こえた後ろに振り向いた。

どこかに行ってしまった浦原でもなく、鉄裁でもない口調と声の持ち主は、

一日目に出会った、自身の斬魄刀であった。

「……、なんで暗空がここに？」

「なんで、って、一守がこっちに呼び出したんやろ。」

んなこと、俺が知つとる訳ないやんけ。」

「……俺が？」

一守は首を傾げた。

そのような記憶は毛頭ない。

「せや。」

俺、中から見とったけど、なんか浦原とかいうヤツが、

鞘から俺抜いて、変な得体の知れん、白いでっかい人形に刺してきてさ。

気付いたらこの有様や。

……、なんか、卍解がどうのこうの言ってたで。」

それを聞いて、一守は納得した。

浦原の持っていたあの白い人形は、強制的に刀を具象化する物で、つまりは、卍解を習得しろ、ということなのだろうと。

「じゃあ、俺が暗空を屈服するのみに
ってことか……。」

一守は頭を掻きながら白獅子を抜いた。

「手加減はせえへんで？」

暗空も、背負っていた大鎌を手取る。

「おう、俺もだ。」

結界の外に、浦原の姿があった。

浦原は、結界の中で始まった戦いをただ、ジッと眺めている。

「……あと、二日で完成するモンなんですかねえ……。」

浦原は、一人、呟いた。

自分もあの転神体を使って卍解を習得したが、正直、不安だ。
自分が使ったのはもうずいぶん昔のこと。

しかし、今の一守は、卍解を習得しなければならない状況だ。
内側に居る獅牙は、もうすでに卍解を習得している。
過去に、見せてもらったことさえあつたくらいだ。

始解だけの死神が、卍解をした死神から勝利を得るといふのは難しい。
い。

というより、霊力が違いすぎる。

それは、隊長と副隊長を比べても顕著に現れることだ。
霊力＝戦闘力であるがゆえの話でもある。

つまり、戦闘力の高い者が、低い者を倒すように、

このままでは、いずれ一守は自身より戦闘力の高い獅牙を抑えきれないかも知れないのだ。

だから、戦闘力を合わせるためにも、一守には正解を習得してもらう必要があった。

やはり、不安なのだが。

「予想だにできなかったことをやってくれた真砂さんっすからねえ・
。。。

きっと、やってくれるでしょう。。。。」

先ほどより、小さめの声で、浦原は呟いた。

五日目（後書き）

お久しぶりです。

最近、なかなか話が思いつかず・・・；

実は、密かに第二章を制作してたりします。

話が思いつかないゆえに、気分転換として；

全体の話の流れは纏まってきているので、うまいことやれてます；

ちなみに、恐らく、この「漫画家志望、そして死神」。

全三章ほどになるはずです。

完結するまで大分掛かると思いますが、

どうぞ、応援よろしくお願いします。

若干ネタバレかもですが、二章では、場面が尸魂界から現世、
現世から尸魂界、という具合にコロコロ変わります。

そして、ようやくこの間言った、一守以外の心継者が。

かなり先のことになると思いますが、

どうぞ、お楽しみに。

では、感想等お待ちしております。

六日目（前書き）

十四話目の翌日からです。

六日目

「……っ！」

「そんなくらい平気や!!」

立てえ!一守!

俺を殺るんちゃうかつたんか!!」

暗空に肩を斬られた一守は、声にならない声を上げた。

「っら!」

一守は、肩の痛みに耐えつつ、暗空に斬りかかる。だが、それも、大鎌で受け止められ、跳ね返された。それと同時に斬撃が飛んでくる。

一守は、それを自然と覚えた瞬歩で、左へかわす。そしてそのまま、暗空の背後を取ると、そこで一閃。当たりはしたが、傷は浅い。

刀を振りぬくと同時に、一守は後ろへと距離を取った。暗空は、そこで止まる。

「始解もせんとここまでか。

やるな、一守。」

「……っ、つか、てめーが、始解できなくしたんだろ。獅牙と白獅子に、関わらせないように。」

そう言った、一守の息は少し切れていた。

「まあ、そうやな。」

「・・・一守、気付いてないんか？」

左の脇腹の辺、見てみい。」

左の脇腹、つまり、刀を差している所だ。

一守の場合は、暗空と白獅子、二本差しているのだが。今、暗空は目の前に居る。

そのため、そこには差さっていない。

今、白獅子は手に持っている。

そのため、そこには差さっていない。

そう思っていたが、暗空は、綺麗にそこに納まっていた。

「・・・え？」

「今からそれ使って戦え。」

「始解もできる。」

そう、暗空が言うと、一守は頭上に？を浮かべながら、刀を抜いた。

「黄昏に見舞え、暗空。」

一守が解号を唱えると、暗空の言ったとおり、始解した。

「・・・やるで。」

第二ラウンド、スタートや。」

「あ、おう。」

一守はそう言うと、慌てて構えた。

夜。

それは不意に、そして突然だった。

戦闘場を覆うようにして張ってあった結界が、急に崩れたのだ。解かれるのではなく、建物が倒壊するように。

戦闘場の中心には、一守が立ち尽くしていた。

その姿は、これまでとは全く違う物だ。

柄から刀身まで、すべて漆黒となった二本の大鎌を持ち、黒い外套を纏っていた。

死覇装が変化したのだろうか。

フードは目元をやや隠している。

よく見ると、足元は死神のそれだった。

外套によってほとんど隠れているのだが。

一守のその姿に白という概念は一つも無かった。

どこも、すべて黒で埋め尽くされているのだ。

先ほどまで白だった足袋も、見えてはいない帯も、すべてが黒く染まっていた。

一守の前に倒れた転神体の白さ。

そして、一守自身のその黒さ。

その対照的な色は、まるで悪戯のようでもあった。

「漆黒の・・・死神・・・。」

浦原はその姿を見て、呟いた。
本当に、その通りなのだ。

浦原が呟いた、その瞬間、一守は転神体を左手に、二本の大鎌を右手に、

瞬歩で浦原の目の前へ現れた。

その速さは、卍解を習得する前とは比べ物にならず、霊力も、また。

「卍解、習得した。」

「つか、強制的に具象化した、ってことは、卍解を習得しろってことだろ。」

一守はそう言うと、転神体を浦原に手渡した。

「まあ、そうっすね。」

イロイロ事情があるんすけど、結構難しい話なんで話さないでおきます。」

「・・・そうか。」

「で、解いていいよな？卍解。」

「どっぞ?。」

そう言われると、一守は卍解を解き、元の状態へと戻った。
白の概念を持った物も、完全に元に戻る。

「後、一日、何するんだ?。」

「正解に慣れるくらいっすかね・・・。
今のままでは完成度が低いっすから。」

「その前に、休ませろ・・・。」

そう言いながら、一守は岩に腰掛けると、そのまま眠りに付いた。

六日目（後書き）

ようやく正解です。

そして、修行完成まで、あと一日。

もう少しで原作の主人公出てきます。
お楽しみに。

では、感想等お待ちしております。

七日目の終わりと出会い（前書き）

十五話目の翌日の夕方からです。

七日目の終わりと出会い

「これで、修行は終わりっす。

また何かあったときにはここへ来てください。」

「……、ありがとうございました。」

「はい。」

一守は、一言礼を言つと、商店を出て行った。

『一守……、やっと、終わったな。』

一守が、家へ向けて歩を進めると、内側から獅牙が語りかけてきた。

（ああ、久しぶりだな、家に帰るのも……。）

夕焼けの空の下。

一守は、獅牙と話しながら帰った。

もちろん、他の者には聞こえなどしないのだが。

「ただいまあー。」

一守は、いつものように戸を開いた。

「おっかえりー！！！！！！」

カ、ズー！！！！」

いつものように、父親も突っ込んでくる。だが、一週間ぶりだからなのだろうか。いつもより勢いが良い。

いつものように、かわしてやろうか、と思ったが、折角なので、とりあえず受け止めてやろう、と一守は思った。

「・・・なんだ、今日は避けないか。」

「ああ、そのかわり、受け止めてやったよ。

「・・・、左手で。」

そう言うと一守は故意に左の手に力を込めた。

「痛い痛いっ！」

父さんの顔が割れるっ！」

「勝手に割れとけっ！！！」

一守はそう言いながら、左手で顔面をつかんだまま、床に叩き付けた。

「・・・う・・・、腕を上げたな・・・。

一守・・・。」

そう言うと、気絶でもしたのか、体から力が一気に抜けていったのが見て分かった。

「あ、兄貴。

帰ってたんだ。」

リビングから、一守に似た人影が現れた。
身長は、一守のほうが残念ながら低い。

「ああ、寝てなくて大丈夫なのか？

守斗。

「まあな、今日は具合がいい。」

そうか、と、一守は二カツと笑って答えると、自室へと向かった。

弟である守斗は、昔から体が弱い。

そのおかげかどうか、一守は昔から守斗とは喧嘩をしたことが無いのだ。

喧嘩などすれば、守斗が倒れかねない、そう思って。

それゆえに、中一と、高一、少し離れてはいるが、この兄弟は仲が良い。

互いが、思いやり、気に掛けている。

隠し事も、一切無しだ。

だが、それまでそうしてやって来ていた物が、何か、崩れそうな、そんな不安を、一守は店を出たときから感じていた。

自身が、死神であること、心継者であること、この一週間何をしてきたかということ。

それをこれから先、ずっと隠し通さなくてはならないこと。

それは、これまで、隠し事無しでやってきたからゆえの不安だった。守斗が、自分を信じてくれなくなるかもしれない。

そんなことを考えながら、一守は部屋へと入った。

つい、ベッドの上でぼんやりしていた一守は、下から聞こえてきた、インターフォンの音に、ハッとさせられた。ドタバタと足音が聞こえる。恐らく、母親だろう。

「一守ー！クラスメイトの子ー！」

何か、届けにでも来たのか。

そう思いながら、のらりくらりと部屋を出て、階段を下りる。

一守は、階段を下りきると、不意に玄関の方を見た。

派手で、目立つオレンジの髪。
自分より、高い身長。

あの、ある意味で有名な黒崎 一護だ。

「……、なんで黒崎？」

一守は首を傾げて問うた。

「なんで……、って、家近いから、って訳で押し付けられて来た。」

「近所か？」

「まあ、五軒となりだ。」

あー・・・、と、一守は口を開いて思い出そうとする。しばらくすると、一守は手を叩いた。

「ああ！クロサキ医院！」

守斗がいつも世話になってんな。

・・・、って、お前、医者の子かよ。」

「なんだ、悪いか。」

「いや、別に？」

俺だって消防士の息子には見えねえだろうし。」

話したことも無いというのに、二人の会話はスルスルと進む。

「そう言やあ、名簿見たときにビックリしたんだけど、真砂って、一守って言うんだよな？」

どういう意味だ？」

え？というように、一守は一護を不思議そうな顔で見た。

「一つの物を守りとおせるように・・・。
だけど、それがどうした。」

今度は一護が驚いた。

「すげえな・・・。」

俺は、一護。

一等賞のーに、守護神の護。

「・・・意味はお前と同じだ！」

「・・・偶然だな、これ。」

親の感性にもよるけどさ。

まあ、宜しくな。

「・・・、一護でいいか？」

「守はそう言って、少し笑う。」

「ああ、じゃあ、一守で。」

「おう。」

こうして、同じ意味の名を持つ二人は出会った。

七日目の終わりと出会い（後書き）

そうです！

一守の父さんは消防士さんです！

人を助け、守る仕事ゆえに、息子達にも何かを託してるんだろっな

あ、

なんて思ってみたり；

というか、思ったより早く一護が出てきたような気がします。

ホントは次の話くらいで、って思ってたんですけど・・・。

では、感想等お待ちしております。

久しぶりの学校と愉快な？仲間達（前書き）

十六話目の翌日からです。

久しぶりの学校と愉快な？仲間達

「おーっす、おはよ、一護。」

「おう。」

一守は久しぶりに教室へ入ると、昨日知り合ったばかりの一護に声を掛けた。

「ええっ！お前らいつの間に関り合ってたんだ!？」

「ム……。」

ハイテンションな浅野、常に無口な茶渡。

全く違う彼らに、一守は少し笑みを浮かべた。

「昨日だ。」

一護が手紙届けてくれたときに。」

「あー……、そういえば、押し付けられてたね。」

「ム……。」

（……何か、こいつの周りは無駄に個性の強いヤツばかりだ……）

一守は、一人、内側に呟いた。

まあ、獅牙は返してこないのだけだ。

「ホントに……。」

一護が、いつも弟が世話になってる医者の子供だったっていうのはびびった。」

「……、へえー、真砂君、弟居たんだね。」

一護の家の近くなら、その辺で見かけてもよさそうなんだけど。」

「いや、アイツ、体弱いからさ。」

あと、別に一守でいい。」

一守は、苦笑しながら返した。

「そうなのか。」

それで、一護ん所に世話になってんのか？」

「……、話的にそうなるだろ。」

……ゴメン、ちょっと席外すな。」

何かを感じたのか、一守はおもむろに席を立ち上がった。

「どこ行くんだ？」

「石田ん所。」

そう言つと、一守は石田の席へ向かった。

「……、石田？」

「誰だろ、っていうか、一守って記憶力いいんだ。」

「一週間来てなかったのに、クラスメイトの顔と名前覚えてるって。」

「護とは真逆だね、と小島は頷いた。」

「よう、石田。」

「一守は、席についていた石田に後ろから声を掛けた。」

「……なんだい？」

「……死神が。」

「……気付いてたか。」

「そう言うと、一守は石田の前の席の椅子に勝手に座る。」

「この学校に入学したときから、君の霊力の高さには気付いていたよ。」

「もちろん、黒崎くんの霊力にも。」

「……君が死神の力を手に入れたのはこの一週間の間だろうか？」

「大正解。」

「……この間見た歴史書に載ってたけど、滅却師だろ、お前。」

「そうさ。」

「最後の、滅却師。」

「生き残りが居たんだな……。」

そう言って、一守は席を立った。

「尸魂界に見つかからないようにしろよ。
最後の滅却師さん。」

一守は口角を上げ、石田は眼鏡をクイツとやった。

久しぶりの学校と愉快な？仲間達（後書き）

さすがに一守なら石田に気付くかなー、
なんて思ったりして、ちょっと出してみました。

ちなみに歴史書は浦原さんから借りた物。

まあ、尸魂界の歴史ですし。

勉強しとけ見たいな感じで渡されたんじゃないでしょうか。

では、感想等お待ちしております。

死神になったアイツ（前書き）

十七話目から少し日が立った辺りです。
原作突入します。

死神になったアイツ

それは、突然だった。

虚の霊圧、見知らぬ死神の霊圧、そして、一護の霊圧。

一守は、その日、何が起きているのか、不安で仕方なくなって家を出た。

「……、一護か……？」

あの死神……。」

そこには、身の丈ほどの大刀を手にした、オレンジ色の頭の死神がいた。

近くには、白い着物を着た魂魄、いや、死神がいる。

『とりあえず、近くに行ってみたらどうだ？』

この距離じゃ、何が起きているのかはつきり分からねえ。』

内側から獅牙が語りかけた。

(ああ、分かってる)

一守はそう返すと、瞬歩で近くへ向かった。

近くへ来た頃には、一護はもう、虚の足を吹っ飛ばしていた。そして、叫ぶ。

「ウチの連中に手エ上げた罪を思い知れサカナ面!!」

振り下ろされた刀は、虚の頭を見事に両断した。

「……、すげえ……。な……。」

一守は、小さな声で呟いた。
だが、それと同時に一護が倒れる。

「一護!!」

倒れていった一護を見た一守は、とっさに一護の元へ向かう。

「……誰だ、貴様。」

隣の方から、不意に声がした。
見た所、力を失った死神だ。

「……、真砂 一守。

こいつの友達だ。

お前は？」

「朽木 ルキアだ。

半分だったつもりが、こやつに力のほとんどを奪われてしまった。
……。」

「……なんかよく分かんねえけど、とりあえず今は聞かねえ。」

そう言つと、一守は一護の傷の手当てをしようとした。

が、鬼道でできるとは聞いたものの、やり方など、全く教えてもらっていない。

(・・・獅牙、鬼道で手当てできるか?)

一守は、内側の獅牙に聞いてみた。

『できるけど。

つか、むしろ得意だ。

病的に。』

獅牙がそう言うと、一守は目を手で覆った。会話に慣れたせいか、すぐに入れ替わる。

「よし、ちよつとの間じつとしてるよ?」

獅牙は、傷がひどいルキアのほうを、先に手当てした。

『・・・、うめえな。

すぐ塞がったじゃねえか・・・。』

「・・・、すごい・・・。」

自身が言ったとおりに、獅牙はかなり上手かった。手を当てるだけで、すぐに塞がっていくのが分かる。

そして、数分もしない間に手当ては終わった。

『次、一護。』

（へいへい、分かりやしたよー。）

どこか命令口調で言った一守に、獅牙は面倒くさそうに返す。

「……、あのようすだったら、一分掛からないな……。」

「そんなに早く……?」

倒れた一護を見て、獅牙は呟いた。

その言葉にルキアは驚く。

「ああ、まあ、見てろ……。」

つて、なんだ? 傷がもう癒えてる……。」

おかしい。

先ほどまで、右の額に傷があつたはずなのに。

『獅牙ー、下駄ー。』

なぜだ、と獅牙が考えている最中だった。

内側にいるにもかかわらず、下駄の音に気付いた一守は獅牙に呼びかける。

……、下駄と言えば、あの男しか居ない。

「……、喜助か。」

なんで、ここに?」

「ありゃ、獅牙さんでしたか。」

手当てを?」

『ちよ、ちよっと待て。
お前ら知り合いか？』

(それは後々話す。)

獅牙は、そう流すと話を続けた。

「まあな、一守の知り合いが死神の力を、あの死神から受け取ったらしい。」

「……、それって……。」

「……お前ら、いや、アイツがやったことに比べりゃまだマシだ。」

「貴様ら、先ほどから何をしている？」

二人が小さめの声で喋っていると、後ろからルキアが話しかけてきた。

「ま、気にしないでください。」

「……この一家の記憶は、アタシがなんとかしときます。」

「とりあえず、貴女はウチに来てください。」

「今後どうするか話しましょう。」

「獅牙さんは黒崎さんを体に戻してから家に帰つていてください。」

浦原の冷静かつ、的確な判断は、納得のいく物だった。

「ああ、分かった。」

俺のことも、適当に教えてやっといてくれ。」

「はい、では行きましょうか。」

浦原がそう言つと、それぞれ、別の方向に歩を進めた。

死神になったアイツ（後書き）

ついに原作突入しました・・・。
ここまで長かったなー・・・。

これからイロイロやると、この話がどれだけ長いのか・・・。
分かってきて気が遠くなりつつある今日この頃

次の章に入るまで、まだかなり話数があると思います。

（頭の中じゃ、かれこれ二十とちよつと。

削らないと正直ヤバイです；）

では、感想等お待ちしております。

崩壊し行く日常への序章（前書き）

十八話の翌日からです。

崩壊し行く日常への序章

朝。

一守は制服に着替えながら、ぼんやりと昨晚あったことを思い返していた。

一護は無事なのか。

虚に開けられたあの穴はどうなっているのか。

あの力を失った死神はどうなったか。

疑問ばかりが頭をよぎった。

「兄貴ー？起きてる？」

延々と考えていたそのとき、扉の向こうから守斗の声がした。声の調子から、具合がいいことが分かる。

「おう。」

「なんだ？」

一守が短く返すと守斗は扉を開けて、部屋の中に入る。

「あ、着替えてたのか。」

「なんかゴメン。」

「いや、別に？」

「それよりなんだ？」

一守は、守斗に問う。

「あれ、そのクロサキ医院。

トラック突っ込んだらしい。

一家全員無事、掠り傷一つも無い奇跡だつて。」

あれの代用の記憶か・・・と、一守は半ば呆れ気味に思った。浦原さん、もうちょっとなんかあるだろ、と。

それと同時に一護も無事なのか、と思った。

「けど・・・、トラックなんか突っ込んだら、家壊れるだろ。」

「いや、今、先生が息子さんと修理してるつて。」

へー、と、一守は適当に流す。

先生が一護の父さんで、息子さんが一護か、と、それとなく分かった。

「じゃあ・・・、そうだな・・・。」

二人だけじゃ結構きついだらうから手伝いに行くか・・・。」

そう言つと、着替えをもう終えた一守は、カバンを持って立ち上がった。

「時間、大丈夫？」

「さあ？」

そう言つて、一守は部屋を出て行った。

二限後の休み時間。

一守と一護は学校に着いた。

二人とも、家の修理を手伝っていたのだ。

「トラックう！？じゃあ何？あいつケガしたの！？
それとも死ん」

「でねえよ。」

「ナイスヒット！」

見事に有沢の頭に、一護のカバンがヒットする。

「ウチに連中は全員無傷だ。
残念だったな。」

一護がそう言うと、一守はその場を去り、おもむろに席へ付いた。
一守の席は一護の席から割合離れているため、話が聞きづらいが何を
しているかは分かる。

「……、って、一護の隣……。
昨日の……。」

霊圧は感じにくい。

だが、それは昨晚、力を失った死神だった。

「……？どこ行く気だ……。」

恐らく一護から言ったのだろう。

二人は教室を出て行った。

だが、一守は気になって仕方ない。

(……、霊圧消して後追うか……。)

そう、一人内側に呟くと、一守は席を離れる。

不意に、滅却師である石田を見ると、やはり一護たちのことを気にしていた。

……、気付いたか。

そう思いながら、一守は教室を出て行った。

崩壊し行く日常への序章（後書き）

先を思うとかなり長くなりそうです・・・。
という訳で。

多分、原作の八巻まで削ると思います・・・；
削った所のリクエスト等ありましたら書くかもしれません。

にしても、一巻から八巻までは削りすぎかもしれないです・・・。
では、感想等お待ちしております。

第一歩と仲間（前書き）

十九話から少し経ったところです。
原作では五ページだけ進んだ所からです。

第一步と仲間

あー、抜かれたな、アイツ。

とか思いながら、一守は隠れて二人の様子を見ていた。もちろん、霊圧を消して。

「ついて来い！」

そうルキアが言ったのを一守は聞き取ると、ポケットに入れてある義魂丸を取り出す。

「……、まだ出てないけど……、たぶん指令だな。なんでこうも早すぎたり遅すぎたりなんだよ……。」

一守は、小声で呟くと、義魂丸を口に放り込み、飲み込んだ。

「……後は頼んだ。」

「うまいことやっつけよ？蒼。」

死神化した一守は、浦原に頼んで少し手を加えてもらった義魂丸、蒼にそう言った。

「おー、任しとけ。」

蒼がそう言つと、一守は静かに駆け出した。

「手伝わせてもらっぜ！！死神のシゴトってやつを！！」
そう言っで一護は手を差し出した。

「 ああ、よろしくな。」

一守は、ルキアがそう言うのを見て、立ち去ろうとする。
が、途中で踵を返した。

自分が死神であるのを、一護は知らないはずだ。
何せ、一護はあの日、そのまま倒れたのだから。

そう思ったためだった。

「・・・、よう、一護。」

一守は、その声を掛けて公園へ入っていった。

「一守・・・？」

「一守殿！」

一護が駆け寄るよりも速く、ルキアは一守の元へ駆け寄った。

「この間は世話になった、礼を言う。」

「・・・、あー・・・、あれか。」

「・・・別に、一守でもいい。」

「……、なんでお前がここに居るんだよ!」

いつの間にか、刀を納めた一護は一守に問う。

「見て……、分かんねえのか？」

死神だ、一護と同じ。」

一守は、袖を引っ張ろうとしたが、生憎、修行をしたときのままだ。袖は無く、ノースリーブになっている。

「……じゃあ、なんで……、死神になったんだよ。」

「それは……、まあ、難しい話だ。」

とりあえず俺の前世が死神だったって言っとく。」

そう言うと、一守は立ち去ろうと、二人に背を向けた。

「待てよ!一守!」

「……、待ってどうなるんだ。」

必要最低限のことはもう伝えた。

他に、聞くことがあるのか……?

そう思いながら一守は言い放った。

つい、冷淡になってしまった。

「……お前、これからどうする気だよ。」

「……?」

「どうするも何も、学校に帰って普通に授業受けるだけだけど？」

「そうじゃなくて！」

一護は叫んだ。

そして、続ける。

「俺らと行動するのকাশないのか、だ！」

「ああ、そういうこと。」

「……、まあ、俺は自分のペースで虚倒していく。
なんかあったら呼び出してくれていい。

「……付かず離れずってトコにしとく。」

そう言うと、一守は歩を進める。

そして最後に、一言言い残した。

「なんかあったときはお互い様だ。

仲間なのは変わりねえ。

「……、前言撤回って訳じゃないけど、ちょっと変える。

「なんかあったら絶対呼び出せ。」

途中で考えを僅かに改めた一守は、そう言い直して、瞬歩で去っていった。

「……、なあ、ルキア。

「今の瞬間移動みたいなものってなんだ……？」

「……ああ、あれは瞬歩といってな。

「高速戦闘移動法だ。」

「へえ……。」

新たな覚悟、共に戦う仲間、知識。

僅かな時間で手に入れたものは大きかった。

二人で公園を出、歩く一護の背には、イロイロな物が感じられた……。

第一歩と仲間（後書き）

はい。

何気に鈍感な一守でした。

ノースリーブ、っていうのは、檜佐木を想像していただければ。

では、感想等お待ちしております。

戦線離脱（前書き）

二十話から結構経ってます。

戦線離脱

「今回、真砂さんには戦線から抜けてもらいます。」

俺は、行った先でこんなことを言われるとは思ってなかった。

八月七日。

その日、一守は他の面子より一足早く来ていた。

午後、十二時。

普段なら、ちよつど原稿と格闘しているところだ。

「浦原さん。」

俺だー、真砂ー。」

一守は、店内に向かって声を上げる。

「地下へ行つててくださいー。」

気の抜けた、そんな感じの声の返事が店の奥から聞こえ、それと同時に店内の電気がついた。

そして、明るくなった店内から、勉強部屋へ一守は向かった。

はしごを下りきると、準備でもしていたのか、そこには浦原が居た。

「あ、真砂さん。
来ましたか。」

「一応。」

なんかあったときは絶対呼び出せって一護に言ったし。

・・・ルキア、助けに行くんだろ？」

「はい、ですが、問題が一つ。」

「問題？」

「守は鸚鵡返しのように浦原に問うた。」

「はい。」

真砂さんは、心継者であり、二刀斬魄刀を持っています。

そして、その両方が卍解に至っている・・・。

これは相当な戦力になるでしょう・・・。
ですが・・・。」

「なんだ？」

「運がいいのか悪いのか、真砂さんは獅牙さんと瓜二つつス。」

分かるでしょ、精神世界で会ってきたって行ってたんスから。」

「・・・それがどう・・・、あ。」

「守は言おうとして、何かに気付く。」

「そつつス。」

向こうには獅牙さんの知り合いや、身内なども居る訳です。」

まあ、アタシも獅牙さんとは結構仲良かったスし。」

「それに、身内となれば厄介なのが一人居るしの。」

その声は、足元からだった。

つい先日、知り合ったばかりの夜一だ。

「厄介なのって・・・？」

「まあ、喜助は知っておるじゃろう。」

二番隊長兼隠密機動総司令官及び同第一分隊刑軍統括軍団長。
碎蜂じゃ。」

「あー・・・、夜一さんの後釜か。」

って、んなすごい人が獅牙の身内・・・。」

「ああ、獅牙はそいつの兄貴じゃ。」

「すげえな、それ。」

「守は、感心したのか、呆れたのか分からない具合に頷いた。

「真砂さん・・・。」

隠密機動がどういう所なのか、分かってますよね？」

「おう・・・。」

そついうことが。」

「とついで・・・。」

浦原は、そこまで言うと、切羽詰る。言いにくいのだろうか。

「今回、真砂さんには戦線から抜けてもらいます。」

「……、分かった。」

そう言うと、一守はその場を去ろうとした。

「待つんじゃない。」

「……夜一さん。」

「喜助。」

一守はどこまでやれた？」

その問いに、一守と浦原は驚いた。

「え……、まあ、卍解は完成してますし……。アタシも、本気は出しませんが……。結構痛い目に遭わされました。」

「……、一守。」

お主、何か体術は習っておったか？」

「……まあ、合気道が十年ちょっと。」

「よし、それほどの実力があるのじゃ。」

行け、と言ってやりたいところじゃが……。なにせよ、相手が相手じゃ。」

「・・・、儂が修行をつけよう。」

夜一の発言に、また二人は驚かされた。

「斬と鬼に関しては恐らく、お主の方が上をいっておるじゃろつ。
じゃが、拳と走に関してはどうじゃ？」

「そりゃあ・・・、夜一さんのほうが・・・。」

「・・・、そういつことか。」

何かに気付いた一守は、呟いた。
そして続ける。

「相手は隠密機動、尚且つその長だ。
速さがあるから、それについていけた方がいっ・・・！」

突然。

一守は頭に手を当てた。
どうしたというのか・・・。

「おい、喜助！」

俺のこと忘れんじゃねえぞ！
仮にも俺はアイツの兄貴だぞ！」

「獅牙さん・・・。」

手を下ろした頃には、いつの間にか獅牙に入れ替わっていた。
恐らく、無理やりこちらに出てきたのだろつ。

「俺ならいける。」

俺はアイツより速い……！」

「……、貴方が碎蜂さんと顔をあわせること自体が問題なんスよ・

……。」

「それもそうじゃ。」

「……っ！」

じゃあ、なんで修行つけるなんて言った……？」

眼の色が、変わった。

「……もし向こうに行く気なのなら、力を付けなければならん。

そういつことじゃ。」

「……、俺、隊長格とくらいいけるって。」

「……そんな甘い考えじゃ、向こうで死ぬことになるんスよ。」

浦原の声が、明らかに低くなった。

戦線離脱（後書き）

今回、結構長めな気がします・・・。
かつ、どこかおかしい気が・・・；

では、感想等お待ちしております。

戦地へ赴く(前書き)

二十一話から少し経ったところですが、
一時間ほど。

戦地へ赴く

午後一時過ぎ。

一護たちは、すでに浦原商店に集まっていた。

一守はというと、先ほどから岩の上に座って、一人、獅牙と話している。

「なあ、浦原さん。

一守は向こうに行かねえのか？」

一護は、岩の上に居た一守をみて問うた。

「はい……。」

イロイロあるんすよ、真砂さんにも。」

「まさか、アイツから行かねえなんて言ったんじゃねえよ……」
「？」

「……真砂さんを行かせないというのは、アタシと夜一さんの判断っす。」

そうか、と、一護は言って、穿界門のほうへ向き直る。

「……用意はいいっすか？」

開くと同時に駆け込んでくださいな。」

そう言うと、浦原と鉄裁は穿界門を開きに掛かる。

「わかった。」

「……コン！……家の連中のごとよろしくたのむな。」

一護は、後ろで騒いでいるコンに声を掛けた。

「いきますー！」

「おうー！ー！」

そういうやり取りがあつて、穿界門は開かれ、眩い光が溢れた。

……この瞬間を、待っていた。

そう言わんばかりに、すでに獅牙へと入れ替わっていた一守は、とっさに瞬歩を繰り出して、門の中へと入った。

光で、二人とも気付いていない。

そして、獅牙の繰り出す高速の瞬歩はまず見えない。

いける。

一守と獅牙はそう思った。

……目的は、あくまでもルキアの奪還。

その妨げになるものは、誰であっても容赦はしない。

たとえ、それが獅牙の関係者であろうとも。

たとえ、それが隊長格であっても。

たとえ、それがさつき言われたヤツであっても。

容赦はしない。

かわすなら”斬らせない”
誰かを守るなら”死なせない”
攻撃するなら”斬る”

覚悟は、できてる。

浦原と獅牙に言われたことを再確認しながら、一守は、ただただ獅牙に身をゆだねていた。
内側から見ると、見たことの無い景色が広がっている。

・・・断界だ。

だが、そう確認したつかの間、明るい土地が開けてきた。
獅牙が、門を出たのだ。

門の出口は空中にあった。

足元を見ると江戸時代の街並みのような景色が続いている。
足場など、もちろん無い。

獅牙は霊子で足場を作る前にどこかへ消えていった。

戦地へ赴く(後書き)

気が早いのか、強引なのか・・・。
一守と獅牙、いきなり尸魂界です。

では、感想等お待ちしております。

戦場への隠し通路(前書き)

二十二話から少し経ったところです。

戦場への隠し通路

流魂界の町外れの森林。

一守、いや、獅牙はそこに居た。

人気の無い、ここで何をするのだろうか。

『なあ……、何する気だよ……。』

一守は、半ば呆れたように獅牙に問うた。

(ここに入り口があるはずなんだよ……)

双極の丘の地下にある、馬鹿でかい空洞への隠し通路だけ。

あつた、と獅牙が呟くと、何か蓋らしき鉄板を持ち上げた。

(多分、あんな辺鄙な場所だしな……)

俺と喜助たち以外は知らねえとは思っただけ……)

そう内側へ言うと、獅牙は鉄板を倒して、現れた穴の中に飛び込んだ。

しばらくの間割と広めに掘られた穴を歩いていると、なにやら装置のような物があった。

「まだ壊れてなかったのか、これ。」

そう、独り言を言つて、獅牙はまじまじとその小さな装置を眺める。

『・・・なんだ？これ。』

一守は、一向に動こうとしない獅牙に問いかけた。

（えーっと・・・、確か、喜助が小さいころ作ったヤツでさ。
遮魂膜を溶かしだす、ってヤツだったと思う。）

（この通路通つて流魂界へよく抜け出したもんだ。）

『つて、やっぱり知り合い・・・つてか、それどころじゃねえだろ。
言動からして明らかに幼馴染だろ。』

（だからそれは後々明かす。
勝手に予想しとけ。）

そう言つてから、一守は獅牙に何度か同じことを問うたが、全く聞
こつとしなかつた。

「・・・全く。」

死ぬ気ですか・・・、あの二人は・・・。」

浦原商店 地下勉強部屋。

鉄裁と浦原だけになつたとてつもなく広い空間で浦原は呟いた。

「位置からすると潤林安の辺り・・・。」

・・・、獅牙さんなら間違いなくあの通路を通って行くはずっス。
・・・。
壊れていなければ、っスけど。」

「・・・あの場所の？」

「ええ・・・。」

造ってからかなり経ってますが。

獅牙さんなら、直してまた起動させて、ってやりそうっスけど・・・。

アタシが知識を得たのも、獅牙さんに教わったからっスから。」

そう言っと、浦原は歩き出す。

こちらからでは難しいが、一守と獅牙が無事かを確認するために。

戦場への隠し通路（後書き）

この通路が昔、何のために使われたか……。それは、まあお察しくださいというヤツです。後々明かすかもですが。

では、感想等お待ちしております。

抜けた先（前書き）

二十三話から少し経った所からです。
通路を抜けた先は・・・。

抜けた先

『うわあ……、勉強部屋にそっくり……。』

(いや、絶対ここ真似て造ったろ、喜助。)

辺りはかなり静かだが、内側はというと、かなりイロイロやっている。

『なあ、どこからどう出るんだ？』

このクソ広い所から。』

(まあ……、どっかに出入り口が……、あった。上だ、上。)

『……、勉強部屋同様、地下にあるって……。』

(まあ気にすんなよ……。)

ここ出たら出たで、そりゃあすごいから。)

『どづいづ意味で……。』

(場所だよ、場所。)

そう、獅牙は言うと、瞬歩で出入り口へ向かった。

(さーっと)

(これからどうする?)

『そりゃあ、ルキア助けに。』

(ボケが)

(一人で相手ができるんでも?)

地下の馬鹿でかい空洞、・・・双極の丘の地下にあった空間からでてきた獅牙は、
旅禍騒ぎでざわめく瀨霊廷の中を、人ごみにまぎれ、歩いていた。

『まあ、それもそうだけどさ・・・。』

(一護たちが来るには時間が掛かると思う)

『なんせ、ほら、アイツ・・・、えーっと・・・。』

(三番隊隊長、市丸 ギン)

『そう、ソイツ。』

(に、やられたんだろ?)

霊圧はなんとなく内側からでも分かるから、生きてるのは確かだ
けど。

・・・で?

『アイツらが来るまで待つてるってのか?』

(まあな)

どっかで適当に合流できるだろ。

責めて、ルキアの居る感じのする所の近くに忍んでたほうがいい
かもしれない。)

『検討、付くか？』

(まあ・・・、懺罪宮だろうな。)

そう言うと、獅牙は瞬歩で姿を消した。

「さてと・・・。」

双極の丘が見える辺りか・・・？」

そう、小さく呟きながら、獅牙は駆ける。

元々、隠密機動なだけあって、潜入したりは得意分野だ。

誰かに見つかるうものなら、瞬歩で撒けばいい。

見つかることは、無いだろうが。

でも、アイツにあつたら危ない。

そんな調子で、懺罪宮に忍び込む。

中に入ると同時に、ルキアの霊圧を確認する。

が、殺気石でできた懺罪宮の中ではまるでそんなことは感じない。

・・・仕方ない。

獅牙はそう思うと、記憶を頼りに、双極の丘が見える牢へ向かった。

抜けた先（後書き）

お久しぶりです；

この辺からすごいことになるんで・・・。

なかなか思いつかず；

では、感想等お待ちしております。

久しく見ない顔（前書き）

二十四話から少し経った所です。
ついにあの人登場。

久しく見ない顔

(ここだと思っただけ・・・どっ！)

獅牙は内側にそう言いながら、割と重い戸を開く。

予想は的中だ。

そこには、呆然と立ち尽くしたルキアが居た。

「おーっす。

・・・久しぶり。」

「・・・一守ではないかつ・・・！」

・・・、一護たちは・・・?!」

「アイツらなら、そのうち来るだろ。

霊圧は消えてねえからな。」

その知らせを聞いて安心したのか否か、ルキアは胸を撫で下ろす。

「・・・で、まあ助けに来た。

・・・、さてと、ここからどっ出っ！」

独り言のように呟いていると、獅牙は突然、跳ね上がりそうな勢いで驚いた。

「どっした?」

「いや、ちよつとヤバイのが来てる。

・・・隊長格の霊圧だ。

かなり抑えてるみたいだけど・・・。」

ルキアの前ではそんなことを言ったが、獅牙は今この場から正直逃げ出したかった。

百年以上もの間、感じていなかったあの霊圧。それがすぐ近くまで来ているのだ。

獅牙は冷や汗を流しつつ、斬魄刀に手をかける。そして静かに眼を閉じた。

『おいっ！俺に押し付ける気かよ?!』

一守は内側で叫ぶ。

(そんな気はねえ・・・)

お前が表に出てたほうが都合いいからだ。

霊圧も、魄動も、若干だけど違う。(

『・・・、けど、それだと逆に怪しまれないか?』

(一里あるけど・・・)

俺じゃ、アイツとは話せねえ。

多分、自分を抑えられなくなる。(

『・・・所謂、暴走・・・的なの?』

逆に、大丈夫なのか、お前。

内側に居て。

内側で暴走？されたら、そりゃあもう困るぞ、俺。』

（・・・大丈夫だ。

一守が外からの情報を寸断しててくれれば。）

そう言っつて獅牙は一守と入れ替わる。

そのとき、もう霊圧はほんの数十mまで近づいていた。

刀に手を掛けたまま、少しの時間が経った。

実際にはほんの少ししか経っていないのに、一守にはもっと経っているように思えた。

それは内側に居る獅牙も同じことだろう。

霊圧は、あと、数mの所まで来ているようだった。

一定のペースで近づくその霊圧は、遅くも早くも感じられる。

『暗空、抜け。』

必要最低限のことを獅牙は言う。

暗空なのは、恐らく、獅牙のことを知られない為だろう。

一守は言われたとおりに暗空を抜いた。

静かに刀を抜くと、刀身は、反射した、蒼く冷たい光を放つ。

『閉じろ！行け！』

号令の如く、獅牙は言った。

「守はただそれに従って、外から内への情報を寸断しながら暗空を開放し、

相手の後ろへ回り込む。

そして、鎌を首へ突きつけた。

「問一、旅禍は何人でしょうか。」

至って冷静に、白い羽織を羽織った、自分よりも背が十cmは低い死神に問うた。

久しく見ない顔（後書き）

さて！出てきました。

実は、最初書いたときはこんな感じじゃなくて、
獅牙が喧嘩売る感じで始まったんです；
斬魄刀も、もろに白獅子を使っていました。

さて、兄貴は勝てるのか。

では、感想等お待ちしております。

死神と雀蜂と白い獅子と（前書き）

二十五話の直後からです。

死神と雀蜂と白い獅子と

「・・・五人と一匹だと聞いている。

死神が一人、滅却師が一人、人間が二人、霊力を持った魂魄が一人、猫が一匹。」

この状況だというのに、手を少し捻れば斬れるというのに、冷淡に目の前の死神は答える。

「へえ、よく知ってるな。

碎蜂さん。

・・・問二、死神の特徴は？」

さり気無く、一守は故意に名を出した。

だが、目の前の死神、碎蜂はビクともしない。

「・・・橙色の髪に身の丈ほどの大刀と聞いた。

名は、黒崎、一護。」

「アイツの名前まで・・・、って、そうか。

ルキアが言ったのか。

・・・でも、流石に俺の存在は知られてねえか・・・。」

「・・・、なんだ？」

誤報でもあったか？」

それを聞いて、一守は口角を上げる。

「その通りらしいな……。
訂正してやる。
正しくは七人と一匹だ。」

一守がそう言うと、碎蜂は瞬歩で消え、距離を取る。
そして、先ほどまで後ろに居て、全く見えなかった一守の顔を見て、
碎蜂は驚く。

「……貴様、何者だ。」

思わず、声が漏れる。

「聞かれたんなら名乗るけど？」

……、真砂 一守。

残りの旅禍の内の一人。」

そう言って、一守はあからさまに霊圧を上げる。

「さて、見つかったちゃあ仕方ねえ。」

場所変えてやりましょーかあ、碎蜂さん。」

「流石は、隠密機動、総司令官、速い、な……。」

一守は息を切らしながら、ようやく刀傷を付けられた碎蜂を見ながら言う。

右腕を深めに、抉る様に斬った傷は、
右手に斬魄刀を装着する形である碎蜂にとってはかなり痛手となっ

ているはずだ。

だが、動きそうにない右腕を、庇う様子もなく碎蜂は立っている。

（獅牙・・・、やべえ、ついていかねえ。

速さも、体力も。）

一守は助けを出してくれと言わんばかりに内側へ問いかけた。

『ボケが。』

俺を出そうもんならアイツに気付かれる。』

（眼の、色が、変わる、ただだろ・・・？

気付かれ、ない、だろ。）

『ボケ。』

性格、口調、戦い方。

長年の間に叩き込まれた俺のやり方を変えるのは難しい。

それをアイツは見抜くだろうし。

・・・一守、なんか薬つぱいの持つてるか？

見せ掛けに飲め。

体力回復的な感じで誤魔化せるかもしれねえぞ？』

獅牙に言われ、一守は懐を漁った。

そして、家を出る前に、何かの拍子に入ったのか、ラムネを見つけてる。

（あつた・・・。

運、良いのかも、な。）

『ほれ、さつさと食う。』

分かった、と、短く内側に返すと、一守は無造作にそれを飲み込んだ。

そして、その拍子に獅牙と入れ替わる。

獅牙は立ち上がると、使い慣れない暗空を戻し、白獅子を抜いた。勿論のこと、開放はしないが。

「さて、次、やりましょーかあ、碎蜂さん。」

使い慣れない、否、使ったことのない呼称を言うと、獅牙は口角を上げた。

死神と雀蜂と白い獅子と（後書き）

何故か何故かのラムネ。

・・・、これ位しか思いつかなかったんです・・・；

・・・まあ、始まりました。

兄妹の戦い。

実はこの話、やりたくて堪らなかった話なんです；

主人公が兄貴で、敵が妹。

考えてたら、そついや碎蜂って過去に死んだ兄貴が居たよなあ、と。

そんなこんなで書いていって、密かに制作していた第二章は話が逸れ。

第三章はグダグダになりつつあると・・・；

クソ長くなるかもしれませんが、今後とも宜しくお願いします。

では、感想等お待ちしております。

兄貴の情（前書き）

二十六話から少したった所です。
いよいよ、決着。

兄貴の情

「残念、読めてんだよ。」

あくまでも一守の口調を真似て、獅牙は碎蜂の後ろへ回り込み、そこで一閃。

そもそも、さほど口調は変わらないのだが。

獅牙の繰り出した一閃は避けられ、次に蹴りが入る。

左斜め後ろ上方の、微妙な角度からの蹴りだった。

その蹴りを難無くかわし、獅牙は着地した碎蜂に蹴りを入れた。だが、それもかわされる。

一守が獅牙に入れ替わってから、ずっと避けては一撃、避けられは、一撃入れられ。

それをかわしてまた一撃、それもまた避けられての繰り返しだった。

だが、戦いの中で、少し押しているのは獅牙のほうだった。

相手の戦法を知り尽くし、それに慣れていく分だろう。

碎蜂が、左手で一撃入れる。

避け切れなかった獅牙は、右手でそれを受け止めた。

そうだったところで、二人は距離を取る。

「・・・なんだ？貴様。」

先ほどからまるで人が変わったようではないか。」

戦法の変わりようや、体力の持続などを見られて気付かれたのだろ

う。

碎蜂が問うてきた。

「んなことは気にするな。」

「……、アンタを斬って、やらなきゃいけねえことだってあるんだし。」

そう言っつて、獅牙は碎蜂の後ろに瞬歩で回りこむ。

そして、最初に一守がやったように、刀を首に突きつけた。

「……、正直、人を斬りたくなんかねえんだ。」

獅牙は、あくまでも一守になりきり、そう言っつと刀を碎蜂の首により一層近付けた。

少しでも動かせば、すぐに切れる位置まで。

……冷や汗が伝う。

だが、そこまで来たというのに、獅牙は刀を下ろした。

「……、なんだ、殺すなら早く殺せ。」

そう、碎蜂が言ったのにも関わらず、獅牙は斬魄刀を鞘に収める。

「……お前は殺せねえ。」

自然と震えてしまう手を握り締めて。

何処か苦しそくに、獅牙は言った。

「……、どういう、意味だ？」

そう碎蜂が問うと、獅牙はそれに答える。

「どうもこうも、そのままだ。

・・・情ってヤツ。

・・・、白獅子。」

獅牙は、己の存在を知られるとして、ずっと開放していなかった白獅子を開放する。

両手に装着した爪の周りには風が渦巻く。

碎蜂はそれを見て唖然とした。

「その斬魄刀・・・、獅牙か・・・！」

「・・・大正解。

一守の内側に、魂だけが存在している状態だ。

・・・、一守は俺の生まれ変わりってヤツ。」

そして獅牙はそのまま続ける。

「・・・、まあ、その状態じゃ、始解した俺には敵わねえだろ。

・・・諦める、俺も諦める。

それから、久しぶり、立派になったな。」

兄貴の情（後書き）

更新、遅くなってきたてすいません……。
文才の無い中二では、それなりのガタが；

というか、和解しました。

ご兄妹のお二人。

・・・肩の荷が降りた・・・

では、感想等お待ちしております。

相性（前書き）

二十七話目から少し経った所です。

相性

(さーて、ヤバイことをやってのけた獅牙君。
これからどうするんでしょうかー?)

呆れたように、否、ふざけた様に、一守は内側から語りかける。

『五月蠅い。』

元々、変われって言ったのは一守のほうだろ?』

(馬鹿野郎。)

お前が碎蜂さんと顔会わせたのが、仕方なかったとはいえ、大・
問・題・)

『何が言いてえんだよ……。』

(……。おーい、誰か来てるよーん。)

ふざけた様子で一守は言った。

「……。面倒臭いの来た……。」

「……。碎蜂、どうにかならねえの?」

獅牙は目の前に居る刑軍の団員達を指差して、その長である妹に問
うた。

「……。どうにもならん、倒せ。」

「……、えーっ!!」

お前、コイツらの上に立ってるヤツじゃねえかよおっ!!」

「……、貴様、旅禍であろう。」

それを言われ、獅牙は肩を落とす。

「まあ、せいぜい殺されないようにな。

……死に損ない。

……、もう一度、死ぬか？」

「……、しゃあねえなーあ……。

拙い死に損ないけど、まあ、やるか。

……、まあ、次に死ぬのは一守が死んだときだ、ボケエ。」

そう溜息混じりに獅牙は言う、残像を残す速さで軍団員を蹴散らしていった。

「……、あーあー……。

やっちゃいましたよ。

獅牙さん……。」

モニターに浦原は突っ伏す。

……本当に、昔からとんでもないことをやらかす人だ。

そんなことを思いながら。

「けど……、和解って形を取れて、且つ、殺されなかっただけ良しとしますかね……。」

「……あの人がいたら斬りかかりそうなもんだって、びくびくしてましたし。」

「……意外……？」

一人しかいない自室で、誰にも聞かれることも無く、呟く。

「……まあ、思いがけない行動を取る割には、結構器用ですし……。」

おまけに、頭の切れる真砂さんもついている。

和解、という形は、一番難しい……。

それをやってのけるとは、相当相性いいんスカねえ……、あの二人。」

浦原は、大きく欠伸をすると、起き上がり、モニターを見た。

「さて、これからどうなりますかね……。」

相性（後書き）

ずいぶんとまあ更新して無いもんだな、なんて思って更新しに来た今日この頃。

・・・小説、案外難しいもんですね；
楽しいんですが；

では、感想等お待ちしております。

刀を握らない二人の会話（前書き）

二十八話目の二日後です。

刀を握らない二人の会話

「おや？君が旅禍かい？」

顔を会わせた瞬間、こりゃヤバイ、と一守と獅牙は思った。

「……、そうですよ。」

護廷の隊長さんなら知ってるはずですけど、二日前に碎蜂さんと戦ったヤツです。

始めまして、京楽さん。」

そう言うと、一守は京楽の前に座り、胡坐をかく。

「となると……、君が、真砂 一守ねえ……。」

「……いやあ、ホントに良く似てるよ。」

そう京楽が言ったとき、内側で獅牙が飛び上がったのが分かった。

「でしょうね。」

瓜二つだとホント不便ですよ……、ったく。」

「じゃあ、彼を知っているのかい？」

「ええ、知っていますよ？」

碎蜂には、獅牙の「兄の権限」とやらを使って口止めしているから、まあ、ばれてはいまい。

「……、京楽さん、戦う気、無いでしょう？」

ここで、一守が一気に話題を逸らす。

「……君は、どうなんだい？」

質問に、質問で返された。

「俺は戦いたくないですよ。」

訳も無く斬りあうのは嫌いですし。

……、まあ、碎蜂さんと戦ったのは、半ば訳ありなんですけど。」

「

「……、へえ……。」

じゃあ聞くけど、君たちはなんでここに来たんだい？」

「護廷の人……、知らないんですか？俺たちの目的。」

……まあ、朽木 ルキアの奪還ですかね。」

あの処刑はおかしいと思いませんか？」

少し、溜息をつきながら一守は言った。

そして続ける。

「死神能力譲渡の罪は確かに重罪です。」

……ですが、隊長格以外の双極の使用、そして、あの罪での極刑。」

……、誰かが裏から手を回してるんじゃないか、って思うくらいですよ？」

感心したように、京楽は一守を見た。

「君、瀟靈廷のこと、大分調べたんじゃないの？
そんな細かいことも知ってるなんて。」

「まあ、無駄に詳しい人に教わりましたから。
七人と一匹の中で、唯一地下から入って来ましたし。」

「ええ！地下から？！
遮魂膜が張ってあるから入れないはずなのに？」

「残念ながら、大昔にガキンチョが造った隠し通路があるんですよ。
そこに細工が施してあつたんです。
遮魂膜を溶かす様な仕組みらしいんですけど。」

二人の会話が、スルスルと進む。
敵同士だというのに。

「……で、上から入って来た五人と一匹……。
つてことは、君と……、あと一人はどこから入って来たんだい
？」

「まあ、矛盾するんですけど、俺と一緒に。」

「……まだ発見されていないみたいだけど……、どこにいるの
か分かるかい？」

「霊圧さえ分らないじゃないか。」

「正直、ばれるとヤバイですから。
過去に死んだはずの人がなんでここに、つて。」

そう言って、一守はおもむろに立ち上がった。

「じゃあ、そろそろ行きます。」

また何処かで会うことになるでしょうね。」

そう言い残して、一守は瞬歩で去ろうとする。
だが。

「ちょっと待ちなよ。」

「……なんですか？」

「……もし良かったらだけど、ウチで匿おうか？
今回来た旅禍の目的も分かったことだし。」

『匿ってもらつとけ、一守。』

味方につけといた方がいいぞ、この人は。』

途中で、獅牙が口を挟む。

「京楽さんが宜しければ、ですけど。」

「じゃ、ついておいで。」

そう言って、京楽が消えると、それに続いて一守も姿を消した。

刀を握らない二人の会話（後書き）

えー・・・。

この辺から、いきなり飛んだり、飛ばなかったり。

そんな風なのがあると思いますが、ご了承ください；

では、感想等お待ちしております。

牢での会話（前書き）

二十九話からしばらく経った所です。

牢での会話

「あーあ、ついに出ちゃったよ。」

斬魄刀の常時携帯及び戦時前面開放の許可。」

京楽から話を聞かされて、話が終わった後、真っ先に一守はそう言った。

詰まる所、護廷側は完全に旅禍を敵とみなした訳だ。

・・・まあ、十一番隊の三席、五席を倒し。

六番隊の副隊長を破り。

七番隊の四席の死神の力を完全に無くし。

十一番隊の隊員軍団を二分で片付けたらしい。

そこまでやったら、そりゃあ護廷も敵とみなすだろ。

そんなことを、一守は、寮の余った部屋で考えていた。

「ったく・・・、あんなに派手にやらなくてもさ・・・。」

・・・どっちから喧嘩売ったのかは分かんねえけど。」

溜息混じりに、一守は言う。

だが、よく考えてみれば、話してもどうにもならないであろう連中ばかりではないか。

・・・頗るついてねえな、アイツら。

そう思って、溜息を一つ付く。

『……、もう寝たらどうだ？』

明日、何が起こるかなんて分かりやしねえんだ。』

(……それもそうだな……。)

内側から語りかけてきた獅牙に、適当に答えると、傍に置いてあった布団を広げた。

「あのさあ、お二人さん。

いくら敵は敵でも、チャドはもうちょい話し合いだのした方がよかったですし、

石田は、幾ら恨みがあるって言ったってさ、その後に会った東仙さんとは、

頑張ったら話しつけられたんじゃないの？」

「……匿って貰っている身の君には言われたくないな……。」

「ム……。」

「……俺のこれは話し合った結果だぞ、おい。

お前ら、俺の何倍も頭回るんだからさあ……。」

牢の前に来た一守は、中に居る仲間二人と話していた。
……もう一人、知らない顔が居るのだが。

「……お？」

その死神、仲間か？」

「ああ、行くなつて言われて戦線から外されたのに、ここに来た馬鹿な、ね。」

さつき、言つただろ？」

「馬鹿つてなんだ、馬鹿つて……。」

知らない顔の、頭に布を巻いた、恐らく流魂界の住民であろう男の問に、石田は軽く返す。

「……、で、なんだ、コイツ。

流魂界のヤツ？」

「コイツたあなんだ、コイツたあ！

俺様の名は志波 岩鷲！

自称・西流魂界の」

「はいストップ、名前が聞けりやあそれでいい。」

ハイテンションな岩鷲をいとも容易くスルーする。

「なんだよ……、途中で止めやがって……。」

岩鷲がぼやくが、そんなことはまるで気にしない。

「……、仲間だつてんなら、今からすげえこと教えてやるけど……」

一守は話を逸らす。

「……心継者のことか。」

「おう、そうだ。」

「……話した？」

「粗方ね。」

「残念だったな、真砂。」

「NOー！」

「……叫ぶな。」

あっさりと、今度は自分が流される。

「……って、志波って……、ほら、旧五大貴族の。」

「そうだ、って、知ってるんだな、現世のヤツが。」

「そりゃあ、散々獅牙から聞かされたんだし……。」

昨夜、一守は精神世界の中で、獅牙の話を聞いていた。

それは、ずっと黙っていた過去の事で、ようやく浦原と獅牙の関係も分かり、

旧五大貴族の存在を知ったのだ。

「……獅牙？」

「……って、お前の内側か。」

「ああ、そうだ。」

「……えーっと……、岩鷲、姉さんから名前くらいは聞いてん
じゃねえの?」

「いや、ねえと思うんだけど……。」

それならまあいいかと、一守は呟いた。
と同時に、見張りの死神から声が掛かる。

「面会時間は終了です。」

「……何故、旅禍と?」

「……一応、見ときたかったからですよ。」

そう一守が言うと、見張りに促され、牢を去っていった。

「……アイツ、なんかム力つくな……。」

「雰囲気が。」

「……まあ、君から見たらそうだろうね。」

真砂は意外と洞察力や観察力が凄い。

普段はそんな所、欠片も見せないけどね……。

「……僕と茶渡君のことを、自分より何倍も頭が切れるって言っ
てたけど、

実際は僕ら以上だし……。」

「ム……。」

それを生かしきれていないが。」

牢での会話（後書き）

まあ、一守は一応文化系なので；
漫画は日本の誇れる文化ですよ！

岩鷲はそういう感じの人、あんまり好きじゃないと思ったので、
ああいう台詞を言わせて見ました。
それに、自己紹介の途中で強制的に止めさせたりしましたし。

えー・・・、話し変わって。

また、過去の話が出てきましたが、この辺は三章辺りでやると思いますが。

恐ろしく長い道なのですが、こんな駄文でよければ見てやってください。

では、感想等お待ちしております。

黒幕（前書き）

三十話から、ルキアの処刑を止めた所まで、一気に飛びます。

黒幕

はあ、と、一守は溜息をついた。

呆れでは無い、鬱陶しさでもない。
やっとだ、という物だった。

双極が破壊され、ルキアは救出されて。

だが、自分も、こうしていられないことに気付いた。

「……幾つかの霊圧が……？」

一守は、それを感じ取ると、呟いた。
方向は、獅牙曰く中央四十六室。

そこに、幾つかの大きな霊圧が在った。

「……なんか……、ヤバイ？」

そう呟き、一守は姿を消す。

「……寒いな……」

……、誰か斬魄刀でも使ったか？」

惨いことになっていた議場を抜け、禁踏区域に当たる所の手前まで

来る。

『・・・なんで禁踏区域に・・・、隊長格の霊圧が。』

獅牙が、疑問をそのまま呟く。

(知るかよ・・・。)

・・・、とにかく、行くか。)

そう内側に返し、一守は駆けた。

一守が来た先には、やはり幾人かの隊長格が居た。
そして、季節外れの、凍りついた床や壁。

「碎ける、鏡花水月。」

一人の死神が、解号を唱える。

一守には、終始、刀にしか見えなかったが。

「・・・僕の斬魄刀、鏡花水月。

有する能力は完全催眠だ。」

「完全・・・催眠・・・。

・・・だって、鏡花水月は、流水系の斬魄刀で、

霧と水流の乱反射で敵を攪乱し、同士討ちさせるって・・・、

藍染隊長、そう仰ってたじゃないですか！

・・・私たち副隊長を集めて、実際に目の前で見せてくださった

「じゃないですか！」

「・・・なんか、窮地、なの？これ。」

「叫ぶ死神を見、一守は考える。」

「・・・なるほど。」

「それこそが、催眠の儀式という訳ですか。」

「・・・えーっと、じゃあ、始解の条件って、始解したところを見せること？」

「・・・御名答。」

「・・・、完全催眠は、五感全てを支配し、一つの対象の姿、形、質量、感触、臭いに至るまで、全てを敵に誤認させることができる。」

「つまり蠅を龍に見せることも、沼地を花畑に見せることも可能だ。・・・そしてその発動条件は、敵に鏡花水月の開放の間を見せること。」

「・・・やっぱり。」

「一度でもそれを眼にしたものは、その瞬間から完全に催眠に落ち、以降、僕が鏡花水月を解放するたび、完全催眠の虜となる。」

「一度でも、眼に・・・？」

「・・・！」

「気付いたようだね。」

「・・・そう、一度でも眼にすれば、術に堕ちる、ということとは、」

眼の見えぬものは、術に堕ちないということだ。
・・・つまり、最初から東仙 要は僕の部下だ。」

そう、言い終えたところで、藍染の後ろについていた死神が、白く長い、布のような物を出す。

「最後に褒めておこうか。

検査のために、もっとも長く手を触れたからとはいえ、
完全催眠下にありながら、僕の死体に僅かでも違和感を感じたことは見事だった。

卯ノ花隊長。

・・・さようなら。

君たちとはもう会うことはあるまい。」

「待てっ！」

・・・やめなつて、敵わんから。

(獅牙、奥に重症の奴居るけど・・・。
行った方が・・・。)

『大丈夫だ。

・・・あの人は、四番隊隊長、卯ノ花 烈。

四番隊は救護、補給専門の部隊だ。

・・・安心しろ、俺より腕はずっと上だし。』

(・・・けど・・・、代われ！)

『ちよ！まっ！ええっ！』

一守は、強引に獅牙と入れ替わる。

(・・・?)

天挺空羅・・・?

ああ、一連の様子を。(

『いいから行けえっ!』

「どわっ!」

相当強引に内側から操られた獅牙は、よろめきながら中へ入る。

「誰ですか?」

奥で倒れていた死神の治療に当たる、卯ノ花に問われる。

「えーっと?

・・・旅禍ですが・・・?

・・・ほら、碎蜂さん倒した。」

妹だのどうのと言うと、話が長くなるので、獅牙は適当に流す。
正体も、もちろん明かさない。

「見てましたけど・・・。」

裏切り、ですか。」

「ええ・・・、何が目的なのかは分かりませんが。」

「・・・この騒乱の中、どさくさに紛れて、ですか。」

・・・、手伝いましょうか?

「相当な傷みたいですし。」

そう言って、返事も得ずに、獅牙は建物の中で倒れている死神の元へ向かう。

「……、うわあ……、凄いことなってるのな、これ。」

そう獅牙は呟くと、しゃがみ込む。

「……せーのおー！」

息を合わせるような掛け声。

刹那、光が溢れんばかりに瞬く。

「……、ざっと、こんなもんかなあ……。」

そう呟いたのは、光がもう見えなくなり、獅牙が死神を担いで出てきた頃だった。

「卯ノ花さーん、終わりましたよー。」

「はい……、で、あの術はなんだったのでしょうか。」

そりゃあ疑問に思うわな、と、獅牙は頭をかくと、ゆっくりと死神を降ろす。

「どこに秘伝として伝わっていたかは忘れたんですけど……。
……相当霊力使うんで……、滋養強壮剤ください……。」

そう言って、獅牙はパツタリと倒れた。

黒幕（後書き）

藍染の台詞は、全部アニメを見ながら、です。そりゃあもう、疲れましたよ・・・（ぐったり

実は、前の話とこの話の間に、もう一話挟んでいたんですが、あまりにも短すぎたので止めときました。

やらなくても話は成り立ちそうだったので

では、感想等お待ちしております。

病室の中で（前書き）

三十一話から、結構経ってると思います。

病室の中で

「あ、眼え覚めたのな。」

「……は？なんで一護。」

「同じ部屋だし。」

「旅禍は全員ここだよ。」

「ふーん。」

短い会話が続き、一守は体を起こす。

「そついやあ、俺の扱いは決まったみたいだけどさ……。」

「お前の扱いが一向に決まらないらしいぜ？」

「……どういうことだよ。」

「お前は死神代行だろ？」

「そつだ。」

「なんか、お前を正規の死神として認めるならば、心継者の……、
どうの言ってた。」

「心継者の枠を新たに設けないといけない、だ。」

「一護。」

「チャドのフォローに、一守は納得した。」

「設けたらいいのにさ……。
つて、言いたい所だけど。
俺一人しかいないんじゃないか……。
なんか寂しい……。」

そう言つて、一守は大きく欠伸をした。

「そついや、石田とか、井上とか居ないけど？」

「……ああ、石田なら、頼まれたらしくて、服作つてるらしい。」

「……井上は朽木の所だ。」

「……石田、裁縫巧いもんな……。」

また、大きく欠伸をする。

「なあ、外出の許可、出てんだろ？」

「一守はまだだ……。」

「……嘘おーん。」

「本当だ。」

さつき、やっと眼え覚めたようなヤツが外出してもいいと思つて
んのか。」

「いいじゃねえの。」

石田たち、部屋からで出るんだし。」

「……よくない。」

「……、卯ノ花さん、怒ると恐ろしく怖えから……。」

「……、分かった。」

「……我慢する。」

冷や汗を流しながら言つ「護を見、一守まで冷や汗を流す。」

「大人しく寝とく……。」

「……そうした方が無難だ。」

病室の中で（後書き）

今回は割合短めだったのかなあ、と。

・・・というか。

次話の話が何処か難しく、かなり困っている最中です。

という訳で。

しばらく御時間を頂くかもしれませんが、すいません・・・；

なんとかっ！

GW中にはっ！

と思っております。

では、感想等お待ちしております。

会話（前書き）

三十二話からしばらく経った所です。

矛盾してる所があるかもしれないのでご注意を。

会話

隊舎から出てしばらく。

一度止まり、一つ、伸びをすると、一守はまた歩き出した。

瀟霊廷の地理はよく分からないから、石田お手製の地図を見ながら歩く。

普通なら獅牙に聞けば済む話だが、なぜか今回はかりは気が向かなかったのだ。

「・・・あ、なんだ。

割と近い。」

地図と目の前を交互に見る一守の目の前には、改築に改築を重ねたという二番隊隊舎があった。

「・・・、あー・・・、えーっと。

死神代行の真砂 一守です。

・・・碎蜂さん、居ます?」

日常で、滅多にこんなことは無い為に、何処か戸惑ってしまう。

因みに、何故一守が、自身のことを死神代行と述べたかは、

一応人間として生きているんだし、との事で、心継者の扱いを死神代行のと同じにされたからだった。

「・・・待っている。」

冷徹に、それだけ言って門番は消えて、十秒もすればその門番は帰ってきた。

「通っても良いとのことだ。

・・・入れ。」

「ありがとうございます・・・。」

本当に、慣れない。

そう思いながら、一守は門をくぐった。

「失礼します。」

一守はそれだけ言って部屋へ入った。

全室、冷暖房、床暖房、自動ドア完備のこの隊舎では、戸を開くと
いう動作をしないで済む為だ。

「・・・真砂 一守のほうか。」

「眼の色を見てもらえれば分かりますよ。

俺が深い茶色、獅牙が明るい黄色、って所ですし。」

隊長格と話すのは、ここ数日で慣れてしまった為に、一守はそれほど緊張していなかった。

「霊圧では隊長格でさえ分かりにくいから・・・。

まあ、話し方で大方分かるが。」

「……心継者は心継者にしか分からないんじゃないですかね。獅牙の霊圧と俺の霊圧では随分違つと思つんですが。」

そう言い終えた時、扉が開かれた。

……自動で。

「隊長ー、書類……つて、誰だデメエ。」

入って来たのは、やけに大柄な男だった。

副官章をつけていることから、この隊の副隊長であることは確かだ。

「今回の旅禍の一人、真砂 一守です。

宜しく願います。」

「……なんだ旅禍かよ……。

用事済んだらさっさと出てけよ。」

そう言つて、男は書類の束を机に置くと、一言いつてから部屋を出た。

「……あ。

聞きそびれた……、すみません、あの人は？」

「私の部下だ。

別に名を教えるほどではない。」

そうですか、と、短く返すと、一守はソファアに腰掛けた。

「……傷の方は？」

「お前などにそのようなことを気にされる性質たちではない。」

「俺はそういうの気にする性質でして。」

「ああいうの嫌いですし。」

「ならば何故仕掛けた？」

「碎蜂さんが獅牙の妹さんだっけ分かってたからですよ。消す為ではなく、和解させる為に。」

余裕そうに、一守は言った。

「甘い考えだな。」

「甘くは無いですよ。」

「一番困難で、一番安全なやり方です。」

「安全をとるからだ。」

「そう言う碎蜂さんは、自らの力のみで和解へと導けるんですか？」

両者の間に、緊張した空気が流れる。

一守は一息つくくと、話を変えた。

「俺は、一護より先に死神の力を手にしました。」

「だから、知識を蓄える時間は十分にあっただんです。」

「内側に詳しいのも居ますしね……。」

「……敵地に乗り込む前には敵地のことを知っておかないといけませんから。」

護廷十三隊の上位の方は全て覚えしました。

さつき部屋に入って来た人は、二番隊副隊長兼隠密機動第二分隊警邏隊隊長。

「……えーっと……、あ、大前田さん。」

そう言つて、碎蜂が何も返さないのを見ると、一守は続けた。

「すべて、浦原さんに見せてもらった映像や、獅牙や夜一さんの話から得た情報です。」

「……碎蜂さんの話は、獅牙の身内つてこともあつて、結構聞かされましたし。」

そこで、確信したんですよ。」

獅牙と碎蜂さんは和解できると。」

「何の確信だ……。」

「闇雲な確信ではないですよ……。」

ただ、獅牙ならこつするだろう、碎蜂さんならこつするだろう、俺はどうなるだろう、

つていう考えがあつての確信です。」

また、一守は続けた。

「それを考えた上で、俺がどうしたら獅牙がどう行動するか。」

獅牙がどう行動することで、碎蜂さんは何を思うのか。」

「……延々と頭が回転してましたよ、本当に。」

「随分と頭が切れるな。」

「そりゃあどうも。」

「……まあ、石田やチャド、井上の方が、俺の数倍ほど頭が切れるとは思っんですけど。」

俺はあくまでも平和主義ですから。

一番安全な方向に導くために頭回転させてますし。」

「その為だけに、か。」

「……全く、呆れる。」

「呆れてくれて結構ですよ。」

「……それは、俺と碎蜂さんの思考の違いから来る物ですから。」

そう言つと、一守は腕の筋を伸ばす。

「避けられない戦い、っていうのはこの世に万に一つも無いですか
ら。」

俺は、争いを好みはしません。」

「そういう所が甘いと言っている。」

「……でしょうね。」

一守は、溜息をつきながらそう言った。

「けれど、俺は、俺の思うままに行動しているだけです。」

だから、碎蜂さんがどう思おうが、俺には関係ありませんので。」

そう言い終えると、両者の間に沈黙が走る。

それを打ち破ったのは、碎蜂だ。

「似ているのは姿だけ、か。」

「……一理ありますが。」

心底思いますよ、性格似てねえな、って。

それが当たり前なんでしょうが。」

そう言った後に、一守はおもむろに立ち上がった。

「それじゃあ、この辺で。」

失礼しました。」

一守は歩を進める。

碎蜂は何も言わずにそれを見た。

……これで、ようやく話に一段落がつく。

会話（後書き）

この二人の会話が恐ろしいほどに難しかった・・・；

えー・・・、一守、結構平和主義です。

それに対して、冷徹な碎蜂と来た。

考え方が真逆って言うていい程に違う為に、こつも時間の掛かる・・・；

最終的に、一守が半ば一方的に喋り続ける、と言うことになってしまいました；

もつと腕を上げないとなあ・・・。

では、感想等お待ちしております。

再び戦線離脱 「甘い考え」(前書き)

三十三話から、破面篇まで一気に飛びます。

再び戦線離脱 「甘い考え」

あれから少し。

一守はいつものように学校で過ごしていた。

破面がどうのでも皆出払って居るが、

一守はメンバーの中で唯一真面目に授業を受けている。

それはなぜか。

彼の左足を見れば分かるだろう。

「こんにちはー、浦原さん居るかー？」

いつものように、否、今回は明らかに様子が違った。

不慣れなように松葉杖を突いていたのだ。

「はいなー、って、どうしたんすか？その足。」

「これ？ああ、車にはねられた。」

「はあ？」

軽く言うが、内容は軽い物ではない。

「まあ、しばらく動けそうに無い。
安静にしとけて医者に言われた。」

「つまり、止むを得なく戦線を離脱すると?」

「おうよ。」

前のは無理やり行ける状態だったからいいけど、今回はそうはいかない。」

そう言っつて、一守は腰掛ける。

「まあ、アタシもアタシで、真砂さんをまた戦線から外そうと思っ
てましたし。」

「なんでまた。」

「心継者は、判明しているだけで貴方一人しか居ないんすよ?
希少だとして、敵に興味を持たれたらどうするんすか。」

一守は、納得したのか、静かに頷いた。

「後もう幾つか。」

・・・未知の脅威に対して、隊長格二人分の霊圧を持ち、斬魄刀
も二本携えていて、

尚且つそのどちらも正解に至っているというのは大きな力になる
でしょう。

ただ、問題が一つ。」

「なんだ?」

「・・・真砂さん。」

貴方の考え方は甘すぎる。」

帰ってきて言われんのかよ、と、一守はぼやく。

「貴方の言うように、避けられない戦いは無い。」

・・・しかし、倒すべき相手を目の前に、戦いもせずそれを避けるよ?。」

「・・・、それは・・・。」

「もともと、そんな性格の貴方だ。」

戦う力はあるのに、戦わない。」

・・・戦意の無い方は足手纏いなんですよ。」

「足手纏い、か・・・。」

それもそうだ、俺にはその言葉が一番あつてる。」

・・・けど、俺は俺の考えを貫くから。」

それを聞いて浦原は呆れたように、そうですか、と返した。

「そんじゃ、もう用事はねえから。」

んじゃ、また。」

そう言っておもむろに立ち上がると、慣れない松葉杖を突いて一守は歩き出した。

再び戦線離脱 「甘い考え」（後書き）

前回の更新からやたら日が・・・；スイマセン・・・。

・・・さて、足を骨折してしまった一守君。

私も骨折（鎖骨）したことはありますが、あれは堪ったもんじゃな
いです。

それに続きまして。

前の話とこの話で、結構一守の心髄（？）みたいなのを書けたかな
あと・・・；

・・・超平和主義です。

まあ、私も一守ほどでは無いですが平和主義ではありません；

・・・では。

感想等お待ちしております。

欠けた面子と心（前書き）

三十四話から数日経った所からです。

途中合気道の技が出てきますが、私自身は合気道を全く知らないため、

某サイトさんの紹介のページを見ただけに過ぎません。
ご了承を。

欠けた面子と心

「オツス、一守。」

「また一護居ねえのか？」

「まあな。」

「家とか訪ねてみたんだけど、身内でさえ何処にいったか分からないんだよ。」

「教室に入って、真っ先に啓吾にこう聞かれた。」

「この所、入ってすぐ、これしか聞いていない様な気さえする。」

「最近、変わったことは？と言われてれば、日番谷先遣隊とやらが来ただけだ。」

「それから少し経って一護を見かけなくなり、それからまた少し経った。」

「そついや、井上も来てないよな、学校。」

「あー・・・、そうだね。」

「どうしたんだろ？」

「さあ？俺はただの偶然に過ぎないと思うけど。」

「・・・っていうか、アイツ身内居ないからなー・・・。
情報を収集するにしても、出来っこない。」

「あ、石田とチャドもじゃねえ？」

「・・・夏休み明けの面子？」

「・・・ホントだ。」

それぞれが、いつもどおりに喋るが、否、いつもどおりではないのだ。

それぞれが、平然を装い、自分達が知っていることを隠しながら話している。

一護が何かを隠していること。

井上が何処に行ったのか。

石田と茶渡も、何処へ行ったのか。

一守は全てを聞かされ、啓吾や水色は、その一部を見たために何処と無く分かっていた。

だが、皆総じてそれを明かしはしない。

「・・・ちよつと俺、屋上行ってくる。」

「ええ?!なんでいきなり!

まだ始業まで20分以上あるとはいえ!」

「テンション高いんだよ、馬鹿。」

そう言って、ようやく慣れてきた松葉杖を突きながら、一守は教室を出た。

「・・・か・・・一守にまで・・・。」

「あーあ、浅野さん、相当馬鹿なんですわえ。」

「敬語はやめてえ〜!!!!!!」

屋上へ続く扉を開け放つ。

先には先客。

「……誰だ？あれ。」

「……有沢か、らしくねえな……。」

どうせ一護のことだろう、と、憶測を立てて一守は歩み出る。

「よお。」

「らしくねえなー、おい。」

返事は、無い。

「おい、聞いてんのかー？」

また、返事は無かった。

仕方ない、と、一守は思うと、ギブスの巻いてある左足を見る。
大丈夫だろうと悟ったのか、おもむろに右手に持っていた松葉杖を
手放した。

無残にも音を立てるが、振り向きもしない。

3、4 mは離れているのだが、この距離なら聞こえるはずだ。

「せーのーおでっー!」

一守はそう言っつて、強引に竜貴の手をとると、手を反して、手首と肘を極めて倒す。

そして、そのまま押さえ込んで極めた。

「真砂!何すんのよ!」

「何っつて?正面打ち一教表の応用だけど?」

「そんなことじゃなくて!」

「動くなっつて、足痛い。」

「じゃあなんでそんなことできんのよ!」

「自分で考える、ボケ。」

そう言っつて、一守は押さえつけていた竜貴を放し、右足を軸にして立ち上がった。

「意外だろっつけど、一応合気道六段だからな。」

場合によっては師範もできるんだから。」

「へえ、アンタそこまで巧かったんだ。」

合気道習っつてるっつていうのは聞いたことあるけど。」

竜貴は立ち上がり、ほこりを払いながらそう言っつた。

「どうせ一護のことなんだろう？浦原商店に入っていく所見たし。」

「あんな胡散臭い店、知ってたの？」

「あそこの主人と仲いいんだよ、これが。」

まあ、内側が、なのだが。

「まあ、あの人。」

今回の件の全てを知っていると云っても、過言じゃないくらいに知ってるはずだけど。」

「え……？」

そりゃあ驚くか、と、溜息をつく。一守は話し出した。

「けど、多分理由つけて言わないと思う。」

「……まあ、その理由を遠まわしに言われるのか、ストレートに言われるのかは！」

「……、運しただいな。」

突きつける感じで言われると相当グサツと来るし、と、一守は軽く流す。

「……じゃあ、アンタ知ってるの？」

「その辺は考える。」

「……完全に、全て知っている訳じゃない。」

「……一護達のこと……？」

「それはアイツ自身に言ってもらわないと困るんで。・・・黒い着物着て戦ってるアイツのことだろ？」

そう言つて、一守は手放したままの松葉杖に気付き、それを拾い上げる。

「本当に驚いたなー、あれ。

一護は故障だと思ってるらしいけどさ。

はつきり見えてるんだろ？これ。」

ポケットの中から取り出したのは、紛れも無い代行章。

一護の物と全く同じである。

「それ・・・、一護が持ってたのと同じヤツ？」

「そうだ。

・・・ただの土産じゃない。

靈感の無いヤツには全く見えないんだよなー、これ。」

軽く代行章を揺らすと、刹那、虚の襲来を知らせる音が鳴り響いた。

「あー・・・。

面倒臭い・・・。

・・・じゃあ、ちょっといろいろばねるとやばいんで。

また教室で。」

一守はひらひらと手を振ると、結構なスピードでその場を後にした。

欠けた面子と心（後書き）

なにか意味ありげに一守君。

竜貴に色々と一護達のことをはぐらかしました。

私からすればそこまで意味は無いのですが……；

そして心底心配なのは一守の折れた足……。

あの状況下で、よく竜貴締めたり、虚退治に行こうとしたりできる
なあ……。

書いたのは私であるというのに何か心配です；

早く治ることを祈ります。（治すのは私か；作者だし。

では感想等お待ちしております。

最後に。

合気道の技について、知っている方、居ませんか……？
正面打ち一教表、あっているかどうか不安なので……。

弟（前書き）

三十五話から少し経った所です。

弟

「はあ?! 守斗が!？」

授業中。

こんな状況になるのは久しぶりだ。

報告に来たクラスの担任である越智の言葉に、中学以来だった言葉を押し付けられる。

” 弟さんが倒れたって!”

一守は慌てて立て掛けていた松葉杖を手に取ると、同時に机に掛けてあったカバンも取り、急いで机の中のもの、上に広げていた教科書やらを突っ込んだ。

「一守ー、無理すんじゃないぞー。」

「分かつとうわ! ボケ!」

そう、なぜか関西弁で一守は返した。

「・・・あ。」

「今のは気にするな。」

そう言い残し、一守は慌てて教室を後にした。

「・・・関西弁・・・、だったな。」

「え？じゃあ一守、関西の出身？」

「いや、本人は東京生まれの東京育ちだって言ってたけど・・・？」

「じゃあ身内が？」

「・・・さあ。」

そんな啓吾と水色の会話を初めとした、様々な会話が飛び交った。

空座総合病院。

これほど大型の病院に担ぎ込まれたというのだし、わざわざ親が連絡を取るくらいだ。
相当やばいんだろう。

そんなことを考えながら、つい最近来たばかりの病院内を歩いた。

病室の中に入ると、ベッドの上に守斗が座っていた。
点滴やらいろいろ施されているが、どうやら回復したようだ。

「あー・・・、安心した。」

「父さんたちは？」

「仕事だつてさ。」

父さんは消火活動の真っ最中。
母さんとはんぼ返り。」

「そうか。」

「……まあ、よかった。」

「……、で？何処でどろい風に倒れたんだ？」

「商店街の辺りで買い物しようかと思って、歩いて行ったら途中でパツタリだ。」

意識飛んでたみたいだけど。」

「馬鹿か、お前。」

調子良いからって調子に乗るとすぐこつた。」

心配掛けてごめん、と、守斗は頭を下げる。

「兄貴、足大丈夫なのか？」

「多分。」

「……今日相当無理したんだけど。」

「例えば？」

「あー……。」

クラスメートの女子に正面打ち一教表の応用技使った。」

「兄貴の方が馬鹿だろ。」

「ってか相手が女子って。」

当然なのだろうが、守斗はかなり引いているようだった。

「大丈夫大丈夫。」

空手部に黒帯で入部したヤツだし。

日本で二番目に強い女子高生だし。」

「……逆に兄貴の方が心配だ……。」

「いや、中学までは一護のほうが強かったらしい。」

その一護を何回か技掛けて絞めたことあるからさ。」

「……別次元の話だ……。」

守斗はさらに引く。

「……えーっと、まあ、それじゃあついでに足見てもらってくるから。」

んじゃ。」

「予約入れたのか？」

「先生の車の中で携帯借りた。」

それに自分の診察券やらは自分で持つてるし、と一守は続けて言った。

「じゃ、お大事になー。」

「はいはい、どーも。」

守斗にそっけなく返されるよ、一守は病室を出た。

弟（後書き）

一守君、関西弁です。
ちよつと神戸よりの。

なんでこんな話を入れたかというところ、先の話で、一守が関西弁を使うので。

その欠片を見せた方がいいよな、と。

守斗を出したのは、彼が出番少ないから。
主人公の弟なのに。

因みに、私。

関西人です 要らん説明。

では、感想等お待ちしております。

思考と勸(前書き)

三十六話から少し経った所です。
病院に行った帰りくらいだと思います。

思考と勸

「あー!!」

「やってらんねーっ!!!!!!」

「……いや、店内で叫ばれても……、ねえ?」

「……お主が言いたいことはよく分かるが……。
流石にこの狭い部屋で馬鹿でかい声を出されても……のっ?」

「知るかっ!!」

そう言っで一守は後ろに倒れこむ形で横になった。

……ここは浦原商店……の居間だ。

目の前には卓袱台。

その上には広げられたノート。

「だつてさー……。」

啓吾とか水色とか薄々気付いてんだしさ……。
有沢なんて凄いことやってのけてたから。」

「……なんじゃ?それは。」

そう夜一に聞かれ、一守は体を起こす。

「いや。」

「一護も一護だけどさ。」

有沢のヤツ、切れちゃって。

それでその勢いのまま一護殴って、その衝撃で窓ガラスに一護が頭ぶつけて。

あの時心底びびった……。

だって俺、真下に居たんだからな？真下。」

「そんなことまであったんすか……。

……面倒臭い。」

「いやいや。

そーいう問題じゃなくて。」

突っ込みを返した一守は、持ちっ放しのシャープペンを回しだす。

「俺は一応、アイツらが今知りたいことは全部知ってるはずだ。

……有沢にもあんな風に言っただし。

けど、俺がここに座らされて延々と頭回転させてるのはそれとは違う目的、と。

……あー……、だるい。」

「しょうがないのじゃ。

……先ほどから手が進んでおらんぞ。」

「だからって……、なんで俺が。

浦原さんのほうが頭いいだろ。

俺なんかよりもっとまともな考え出せるって。」

そーう言っている最中も、ずっとペンを回しっ放しだ。

「……真砂さん……、貴方、碎蜂さんに呆れられたときなんて

言ったか覚えてます？」

「あー……、それは思考の違いから来る物だのどうの。
……何？」

「アタシも一応考えてみたんすけどね……。
思考が違っただけで答えは幾らでも変わるんで。」

「……じゃあ浦原さんの導き出した答えってなんなんだよ。」

「まあ、単に仮説にしか過ぎないんですが。

……恐らく、冬の決戦……。
アタシら二人と仮面の軍勢……。そして、一心さんも出るかも
しれません。」

何か、どこかで聞いたような名前に一守は首を傾げた。

「一心……。？……。あ……。……。あーっ！！

黒崎先生じゃねえかよ！」

「騒ぐな鬱陶しい。」

……。一応、伝えておいたはずじゃぞ。

敢えて名は伏せておいたが、力を取り戻した死神が近辺に居ると。

「

呆れたように夜一が言えば、一守は考えた。

「……。力を取り戻した、ってことは力を失った、って訳か。
……。なんか二人とも知ってそうなんだけど。」

「そのことは言えん。
自分で考える。」

「はいはい、分かった分かった。
自力でやりますよーだ、っと……。」

一守が黙りだしてから、延々と沈黙は続いた。

そこに聞こえるのは、ペンが紙を滑る音のみ。
時よりその音が止まったと思えば、一守は頭を抱えた。

「……あ。
なんか分かった。」

気の抜けた声で、一守は沈黙を突き破る。

「説明してみてください。」

浦原に言われ、一守は静かに頷く。

「この辺は勝手な想像。」

黒崎先生が、死神の力を失った理由を考えてみた。

「……まあ、何か、強力な技の代償として死神の力を失ったと思
う。」

「それで？」

「その話はとりあえず置いて欲しい。
・・・最悪の事態を想定して、護廷の面子、仮面の軍勢がやられ
たとする。」

「アンタ二人はよく分かんなかったけど。」

「なぜ、その事態を想定したのじゃ？」

「んー・・・、多分、藍染は崩玉をうまく使ってその上鏡花水
月のコンボ。」

「・・・凄いことになりかねる。」

「で、そうともなれば、手の施しようが無くなる。」

「こりゃだめだ、という具合に一守は溜息をついた。」

「そこで。」

「黒崎先生が一護がその強力な技を使ってアイツを倒すんじゃない
かなーと・・・。」

「一護の場合は、多分先生に教えてもらって、って感じが。」

「・・・、そんな時間無いだろうけど。」

「・・・まあ、どっちにしろどっちかが死神の力を失くす。」

「俺の頭じゃこの位しか、と、一守は続けた。」

「・・・にしても・・・、どのように崩玉を？」

「自分自身の死神と虚の境界を取り払ってもするんじゃないかあねえの？」

「疑問に、半ば疑問で返す。」

「・・・そうともなれば、いろいろ考えておかないとならないです。」

ねえ……。

「じゃな。」

「まあ、俺はそこまで考えたくないんでっ。
では。」

「守はカバンを持って、さっさと店を出て行く。」

「……さて、対策を練っておきますかねえ……。」

思考と勘（後書き）

さてさて。

原作を読んだ方、アニメを見た方。

共に一守の勘が少なからずとも当たっている事は分かると思います。

一守の設定上、洞察力やら観察力やら凄いです。

チャド曰く「それを生かしていきれていない」んですが。

では、感想等お待ちしております。

葛藤とKYなヤツのお出まし(前書き)

三十七話から少し経ってます。

半ば強引な所が出来てしまいました・・・。

葛藤とKYなヤツのお出まし

「……甘いだのどつって言われるの何回目だよ……。」

師範にさえ言われたことないのに、と言って、一守は屋上の冷えたタイルの上に転がった。

「……間違ってる、のか？」

「何が。」

少し前に締めた者の声。

確か、正面打ち一教表の応用技で締めた。

そんなことまで覚えているくらいに、それが誰だかはすぐに分かった。

「……有沢か……、って啓吾たちも？」

一護と仲の良い面子を見て、一守は起き上がる。

「……なあ、一守ってやっぱりなんか知ってるのか？」

「……、一護たちのこと。」

一番聞かれたくない質問だ、と一守は思う。

……これからどうなるかも、予想してしまったのに。

「悪いけど、俺、超平和主義なんだよ。」

仲良いヤツの身内にも、浦原商店の店主のヤツにも『甘い考えだ。』って言われる位。

「・・・争いを起こしたくは無いいし、それにお前らを巻き込みたくも無い。」

「率直に言われた・・・！」

「・・・足手纏いなんだよ・・・、俺もお前らも・・・！」

急に俯き、一守は声を絞った様に言った。

手は既に拳を作っている。

「・・・虐げられし者は、虐げられし者のやり方がある・・・。」

「・・・、俺たちは、アイツらを待つことしかできない・・・！」

「織姫や一護たちを、ただ何もせずに待ってるって言うの・・・？」

「・・・アタシたちは何も知らずに、ただひたすら待ってるって言うの!？」

「そうなんだって！」

言ってるだろ!お前らが知れば、お前らは戦いに巻き込まれることになる!

お前らが知れば・・・っ!傷付くことにもなり兼ねないっ・・・

「！」

その言葉に、三人は黙りこくる。

「・・・そんなにつらいのか?お前。」

飛んできたのは、ここに居る四人の誰でもない声だった。

少年の様な、というか、まるっきり少年の声だ。
まだどこかあどけなさが残る。

「……誰。」

振り返ってみれば、自分達と同じ制服を着た背の低い人物。
一守よりも低いようだった。

「さがら かすけ 艸楽 嘉介。」

悪いけど、人の話にすぐ首突っ込んでうんだよな、俺。
全部聞かせてもらったよーん」

「……馬鹿、空気読め。」

少年、嘉介はどうも空気を読むのが苦手というか、その空気を壊し
たくなる性質らしい。

「……悪いんだけどさ、俺も混ぜてくれない？」

「退屈なんだよ、教室に居ても。」

「乱入してきた、さっきまで顔も知らなかったお前なんかに関係な
い話だ。」

この話は止めにしよう、と一守は言い、ゆっくりと立ち上がり松葉
杖を突く。

足のギブスはもう取ってあった。

竜貴や啓吾、水色は諦めたようにして一守より速く階段へ向かった。

「……待てよ、真砂。」

「鬱陶しいぞ、・・・艸樂。
お前なんかに関係無いって!」

「・・・あるぜ？」

「これ、なーんだつと。」

嘉介はおもむろにポケットから何かを取り出す。
そして、下げ紐を揺らし、一守に見せびらかした。

・・・死神代行戦闘許可証。

嘉介が持つそれには、かなり傷がついていた。

葛藤とKYなヤツのお出まし（後書き）

初登場、嘉介君。

少々強引な登場の上に、KYというWパンチです。

後々の伏線に繋がるんですが、

正直、明らかに結構よくある能力を持っています。

どういった能力かはまた後々。

では感想等お待ちしております。

流魂界での過去（前書き）

三十八話の直後からです。

流魂界での過去

「俺は過去に死神代行をやった。

今は護廷に・・・、いや、入っていたって言った方が正しいか・・・。」

「・・・入っていた？」

その言葉は、明らかに護廷から抜けたことを表していた。

「離脱したんだよ、俺。」

「・・・、それこそお前なんかに関係ないけど・・・。」

ある人物が今、現世で生きているっていう情報を手に入れた・・・。」

「・・・誰だ？」

「俺が流魂界に居た時の知り合いの兄ちゃんだ。」

「・・・分かる訳ねえだろ。」

「死神か。」

「死神だ。」

「・・・霊圧は全く感じられないけど、この町に居ることは確かだ。」

死神、霊圧が全く感じられない、嘉介が「兄ちゃん」と言ったことから男であること。

この三つの分かったこと。

・・・自分の知っている人物に該当する物が居るという事だったが、あの人に流魂界の知り合いなんて、空鶴以外で居たのだろうか。

一守の中には、疑問しかなかった。

「・・・名前は？名前くらいなら知ってるかもしれないけど？」

「・・・どうせ、現世で生きてる死神代行なんかに分かる訳ねえだろうけど。」

・・・浦原、喜助。」

・・・予想が大当たりだった。

「俺は兄ちゃん探しに行く。」

「じゃ。」

嘉介は走って階段へ向かう。

「・・・仕方ない。」

・・・自主早退するか・・・。」

浦原商店。

この辺りをかなり知っている人でも、店主がどんな人かというのはまず知らないであろう。

嘉介がここに辿り着けないだろう、ということも薄々一守は感じていた。

「あ、どうもっス。」

「・・・今日は早いんスね。」

「早退してきた。」

「・・・アンタに用があつて。」

そう言つて、一守はおもむろに居間に入った。

「・・・浦原さんつて流魂界に知り合い居る？」

「・・・はい・・・？」

「空鶴さんくらいですが？」

矛盾していた。

嘉介が言ったことと辻褃がまるであつていないのだ。

「・・・けど、まだアタシが流魂界に居た頃つスカねえ・・・。

一緒に生活していた人なら居ますよ？」

まるで弟みたいだったのは覚えてるんスけど。」

「名前は？」

「確か、艸樂 嘉介、だつたと思います。」

「・・・アタシと鉄裁が引き取られたときに別れてしまつて・・・。
それから嘉介がどうなつたかは分かりませんね。」

「・・・やつと辻褃があう・・・。」

「守はそう言っつて、カバンの中から代行章を出し、浦原に見せる。」

「アイツ、護廷の死神だ……。」

けど、最近になつて浦原さんが現世に居ることを知つた。

……艸樂、離脱したらしいけど？」

「……離脱？」

……、にしても、なぜその代行章を出したんスか？」

「……アイツ、生前は死神代行やつてたんだつてさ。」

「……代行業を？あの小さかつた嘉介が？」

浦原は目を見張つた。

……本当に、相当小さかつたんだなあ……。

なんて、一守は考えてみたりする。

「証拠に、ボロボロになつた代行章見せてくれたんだし。」

「……嘉介が……、っスか。」

話からすると会つたんスか？嘉介に。」

「学校の屋上で。」

あんた探してるみたいだつたけど？

兄ちゃん探しに行く、つて言つてこの町のことなんか知つても無いのに探しに行った。」

それを聞き、何を思ったのか浦原は立ち上がる。

「守は、そうするであろうと分かりきっていた。血の繋がった弟が居る分、余計に。」

「……鉄裁、少し店を開けます。」

「……承知。」

「さつさと探してやってやったら？」

泣いて飛びついてくると思っけど。」

「……はい。」

浦原は小さく返事をして店から出て行った。

「……浦原さんにもそういう所はあるのか……。

……へえー。」

「そつは見えませぬか？」

「見えない。」

「父さんって感じしかしないし。」

流魂界での過去（後書き）

まあ、親しみを込めて「兄ちゃん」って呼んでた感じですかね、嘉介君。

実はそれとなく後々の話に関わってくる子なんですけど；

正直、嘉介君。

以外と複雑なキャラなので、難しい所が多々出てくると思うんですけど、後々ですが。

・・・考えただけで気が遠くなりそうです。

では感想等お待ちしております。

再会（前書き）

三十九話からしばらく経ったところです。
大分短い気がします；

再会

霊圧を追い、フラフラと浦原が歩いていると、刹那強い風が吹く。

「あ。」

いつも、目深に被っている帽子が飛ばされてしまったのだった。

「……こっちの方が嘉介も分かりやすいつスカねえ……。」

浦原は飛ばされた帽子に目もくれず、そのまま歩いていった。

「兄ちゃん……。」

何処に居るんだって……!」

嘉介は良く知っているわけでもない町を駆け回っていた。

何処にいるかなどの見当もつかず、当てもなく彷徨うのみだ。

「……帽子?」

呟いたとおり、嘉介の目の前には帽子が落ちていた。

緑と、白のストライプの変わった帽子。

こういうのを見ると放っておけない性質のせいか、嘉介はそれを手

に取った。

「……髪の毛……。」

「兄ちゃんと同じ色？」

もしかして、と、嘉介は思う。

先ほど吹いた強い風で飛ばされたのなら、まだ近くに居るかもしれない。

嘉介は帽子を握り締めて、また走り出した。

嘉介の霊圧が徐々に近づいてくる。

浦原はそれを感じ取った。

「……もう、探す必要は無さそうっすね……。」

少し離れた所を見れば、必死になって駆ける小さな少年の姿。その手には先ほど落としたままだった帽子。

「……帽子？」

「そうだ！これ、兄ちゃんのだろ！」

ぼうつとしていると、いつの間にか嘉介は目の前まで来ていた。

「……そうっすよ。」

ありがとう、嘉介。」

「別に！拾っただけだ！」

どうしたことが、嘉介の様子は可笑しい。
明らかに何かを誤魔化そうとしていた。

「……なに誤魔化してるんすか？」

……泣きたいんでしょ？本当は。」

「……誰が泣くかよ……！」

……誰が……！」

「昔はもつと素直で率直すぎるくらい率直だったじゃないっすか。」

「……う……、五月蠅い……！」

意地を張って嘉介はこんなことを言っではいるが、実際はもう涙目だった。

「素直に泣いた方が、多分スッキリしますよ。」

……ね？」

……嘉介は、声を抑えて泣き出した。

再会（後書き）

再会しましたねえ・・・。

いやあ、良かった良かった。

・・・にしても再会が早いなあ、とか思ったりはしますが。

えー、嘉介君。

結構子供っぽい子だと、何か直感で私は思っています；

最初は声を上げて泣かせようか、なんて思っていたりしてましたし。

では、感想等お待ちしております。

生前とか生前とか生前とか（前書き）

四十話からしばらく経った所です。

ようやく落ち着いていた頃合に、という感じだと思います。

生前とか生前とか生前とか

「で？浦原さん。」

「嘉介は戦線に出るのか？」

「……んー……。」

「止めときましようか、結構不安ですし。」

「まだ六席だったんですし。」

「えー！」

「なんでだよー！兄ちゃん！」

浦原商店の居間にて。

嘉介のブーイングが響く。

「それに色々調べたいことがあるんす。」

「嘉介の生前とか嘉介の生前とか嘉介の生前とか。」

「強調するな！」

「大事なことなので三回は言っとききました、って？」

「普通二回だろ。」

「はいな」

「なんでそんなに俺の生前の記憶が大事なんだよ！」

「覚えて無いって！俺！」

騒ぐ嘉介、ボケる浦原、半ば呆れた一守。
居間はかなり賑やかになってきた。

「まあ、覚えてなくて当然なんすけど。
アタシとて覚えていませんし。」

「・・・代行だったなら何故代行になったか。
力を失ったただの魂魄の状態で流魂界へ来た理由はなんなのか。
調べないと行けないんすよ。」

「モニターに突っ伏してそのまま寝るなよ。」

「分かってますって。」

お気楽に笑ってはいるが、本当に分かっているのだろうか？

「・・・まあ、そうっすねえ・・・。」

心継者である真砂さんの説明はしましたけど・・・。」

「まだ、内側の獅牙さんにはあつてないっすよね？嘉介。」

「え？うん。」

「ってか誰、獅牙って。」

「・・・おい。」

元護廷の二番隊の六席さーん。

仮に元だとはいえ、隊長さんの兄貴にそりゃあねえだろー？」

既に入れ替わり、獅牙は嘉介を脅す。

「ええ？！隊長の！？本当に?!」

「ああ。

本当だ。

あー……、そうだな。

梢綾って言うって、誰だか分かるか？」

「……は？」

「アイツの幼名だ、ボケエ。

碎蜂っていうのは号だ、号。

俺の獅牙っていうのも号。」

嘉介は、へえ、と声を上げる。

「じゃあ、それ知ってるくらいだし、本当に隊長の？」

「そう、兄貴。」

兄貴だからって畏まらなくてもいいから、と、獅牙は言う。

「どうせ死に損ないなんですもんね？」

「五月蠅い、喜助。」

確かに俺は死に損ないだけどさ。」

「……それでよく隊長に斬られずにすんだな。」

「俺だつて斬られそうで怖かつたって。」

獅牙がそう言った刹那、目の色が変わり、

斬らせなかったのは俺のおかげだ、と、ノリノリで一守が言う。

「それってどういう……?」

「浦原さんには甘すぎる考えだって言われたけど、俺、超平和主義なんだよ。」

「だから、俺が一番安全な方向へ導いた。」

「……自分で自覚したんスね……。」

「いや、だって向こうで碎蜂さんに散々言われて、こっちでも浦原さんに……。」

「……、そりゃあ自覚くらいするって。」

半ば諦めたように一守は言う。

「まあ、そうっスね。」

自覚してないとおかしいくらいに言いましたから。」

「……兄ちゃん……、やりすぎだろ。」

「いえいえ、あんなの序の口ですよ。」

黒崎さんから聞いたでしょ? 真砂さん。」

「え? ああ、あれ。」

「……想像しただけで背筋が……。」

「……そんなに兄ちゃん怖いのか?」

「らしいけど……?」

そう言った一守の顔は、その凄さを物語っていた。
・・・自分が体験した訳ではないのに。

「・・・その話は置いといてぞ。」

俺の生前とか生前とか生前とか調べなくていいの？兄ちゃん。」

「そうっすねえ・・・。」

他愛も無い話はこの辺にしときましようか。」

「そうか。」

んじゃ、また。」

「はいな。」

「じゃーなー。」

浦原や嘉介に見送られ、一守は店を後にする。

「さて、嘉介。」

覚えてる限りでいい。

僕が引き取られてから、どうしていた？」

「・・・兄ちゃんが何処にいるか、片っ端から聞いて回った・・・。」

「

生前とか生前とか生前とか（後書き）

最後の辺りですが、浦原さんって、
本気で話すときとかに口調が過去のみたくなるんじゃないかな、と
いう直感です。

最近直感で決めることが多いような；

タイトルは明らかにウケ狙いなので気にしないでください；

では、感想等お待ちしております。

魂の記憶（前書き）

四十一話から少し経った所です。

嘉介が今までの経緯を話し終えた辺りでしょうか。

魂の記憶

「……嘉介殿の生前の記録が出てまいりました。
店長。」

浦原が、ちょうど嘉介に生前のことを本当に覚えていまいか聞こう
としていた時だった。

「……五歳だったときには、既に死神に……？」

「はい。」

死神の力を受け渡した者は未だ不明。

……その後、別の死神に保護され、尸魂界に連行され、
正式に死神代行として認められたとのこと。」「

「……それから三年後に力を失うと同時に死亡、と。
幾らなんでも早すぎる……。」

「早くは無い。」

それが主の天命だったなら。」「

「ちよっ！川蝉かわせみ！」

いつの間にか嘉介の方に止まっていた小さな川蝉は、言葉からする
に嘉介の斬魄刀らしい。

「悪いが少し寝かせてやってくれんか？」

「承知。」

そう短く言って、鉄裁は白伏を使い嘉介を眠らせた。

「……主自身が記憶を失えど、魂はそれを覚えている。

そういうものだろう？ 浦原殿。」

「ええ、その通り。

というか、具象化は習得済みだったんですね、嘉介。」

「ああ。

まだ屈服までとはいかんがな。」

「……へえ。

……早速ですが、聞かせてくれませんかねえ。

嘉介の過去を。」

シンとした空気の中で、川蝉が静かに浦原の目の前へ歩み寄る。

「主は、生前とても霊力が強く、虚や死神など容易に見ていたのだ。

……それ故に、あの日、虚に襲われたのだがな。」

「……そこで、死神が？」

「その通りだ、主の兄。

現れた死神は既に傷を負っていた。

しかし、その状況下の中で、自身は死神を十は喰らったと言う虚と戦ったのだ。」

「……その死神は……？」

「戦闘に勝利し、虚こそ倒した物の、もう黄昏時であった。
・・・そこで、その死神は主に己の力全てを主に託したのだ。
お前はまだ生きろ、と。」

川蝉は、浦原が何も返してこないのを見ると、そのまま続けた。

「・・・それ以前に、主はもう鍵で扉を開いているのだ。
生前に身に付いた能力は今でも残っている。
・・・主の兄らは知っては居まいだろうが、
ここに来たのもその能力を使ってなのだから。」

いつか、自分が茶渡や井上に使った言葉と似たような言葉。

そこでようやく、嘉介がどのような経緯を踏んで来たかを悟った。

「主の持つ能力は”時空渡り”の一種。
すなわち、時を渡り、過去や未来へ行くことも。
空間を渡り、異次元へ行くことも可能だ。」

「・・・つまり嘉介はいろいろな世界を見てきたとでも？」

「・・・ああ。」

ここに来る前に居たのは未来。

・・・今から大凡二十五年後のことだ。

主はここへ来たとき、遡りすぎたと言っていたから、
恐らくもう少し未来に行く気だったのだろう。」

「・・・つまり、意識的にコントロールは出来ない、と？」

「いや、そうではない。

あれは主が傷を居っていたからだ。

・・・誰が付けた傷かはややこしくなるから言わんがな。」

そう言い、川蝉は飛翔した。

「恐らく主はこの後少し未来に行き、そこから先ほどの未来のもう少し未来へ行く気だろう。

・・・浦原殿。

主が何故、時を駆け、空間を駆け、動いているか分かるか？」

川蝉は滞空飛行から大きく羽ばたくと軽やかに翻し、そのまま浦原の肩へ下りる。

「・・・御主の為なのだ、主の兄。

主は幾度と無く未来の主に会ってきた。

・・・だが、初めてだったのだ、御主が主を受け入れ、こうして居られる事は。」

「・・・初めて、ですか・・・。

何を思ったんでしょうかね・・・、本当に。」

「後々分かるだろう。」

御主が何を思い、何を考えたのかは・・・。

過去の御主も、今の御主も、未来の御主も、全て御主なのだから。

「

川蝉は再び飛翔する。

しかし、今度は滞空飛行に移ることなく、そのまま嘉介の方へ向かった。

「起きろ、主。」

「さっさと起きるか。」

「痛っ！くちばしは反則だろ！」

「ちよっ！あだっ！！！」

くちばしで突付かれ、嘉介は眼を覚ます。
恐らく、機嫌の悪い寝起きなのだろうが。

「ったく、戻つてろ、川蝉。」

「戻るのは主が起きてからにしたかったのな。」

そう言い残し、川蝉は消え行く。

「・・・何、話してたんだ？川蝉と。」

「それは言えませんよ。」

「・・・アタシも、全てを知った訳じゃないって事っス。」

そう言つて、浦原はおもむろに立ち上がる。

「・・・行かなければならない所があるんでしょっ？」

「・・・おつよ。」

「・・・、嘉介。」

「・・・自分の心配もたまにはしててくださいよっ？」

「……うん。」

嘉介は短く返事をする、スッと立ち上がり、部屋を出る。

「……良いのか？」

「……はい。」

奥から現れたのは、黒猫の姿をした夜一だった。

「……全く、少しは兄貴らしいことをせんか。」

「……いえ。」

……真砂さん曰く、兄貴の柄じゃない、だそつですよ。
鉄裁に聞かされました……。」

「まあ、そつじゃのつ。」

嘉介は次に行く先のことを考えながら靴を履く。

「……兄ちゃん。」

静かな店内に、嘉介の声だけが響いた。

「……俺が、正さなきゃ、誰が正すってんだよ。
自分の心配なんざしてられっか。」

そう言い、嘉介は勢い良く立ち上がった。

魂の記憶（後書き）

結構よくある能力というのはまさに時空渡りのことです。

どついう訳か、こついうキャラが一人欲しかったんですね；
本当になぜか；

この後しばらくは嘉介君は出てきますが、パツタリ出てこなくなり
ます。

その後は出てくるのは物語の時軸で行くと、確か二十一年後。

なんだか一巻の扉絵の平子みたいになってる・・・；

では感想等お待ちしております。

決戦へ（前書き）

四十二話からガッツリ飛びます。
本当に、ガッツリ。

もうすぐ某黒幕殿が出てきます。
そのくらい飛んでいます。

決戦へ

一守だつて死神だ。

霊力はある。

心継者故に二人分。

つまり、この状況下でも意識はある訳だ。

動いている霊圧だろうが、今は倒れている霊力のあるヤツだろうが、まあ探れる。

今、唯一動いているのは竜貴の霊圧。

あの霊力が高くなった面子で一番霊力のある竜貴だからだったのだらう。

一守を除いて一番早く眼を覚ましたのは。

「……転送が終わってからしばらく経ったけど。

皆倒れてるな、これ。」

聞く者も、一守が口を開いたことを分かる者も居ないの分かかって一守は呟いた。

あくまでも、周りに、だが。

「……有沢のヤツ、町から出ようとか思ってるな、外の方へ向かって走ってるし。」

どうせ出れやしないのに。

そう思いながら一守は溜息混じりで言った。

「・・・あ。

起きたな、アフさん。

「・・・死神が霊力の高いだけの人間より眼え覚ますの遅いって・・・」

突っ込みどころ満載の車谷の霊圧を確認し、呟く。

「・・・俺も行動起こすかなあ・・・」

さてと・・・、誤魔化してるよ？蒼。」

久しぶり出す義魂丸を一気に飲み込むと、一守の魂魄は抜ける。

「はいはい、いつもどおり真砂一守を演じてれば良いんだろ。」

「頼んだぞ。」

「・・・怪我だけはするなよ？誰の体か・・・。」

「分かってるって。」

「気をつけていけよー。」

それだけ言って、蒼は一守そっくりに歩く。

癖という癖も全てコピーして。

蒼は浦原特性の改造魂魄であり、「演じる」ことを得意としているのだ。

誰にもばれない用に作ってくれと、一守が浦原に頼んだ結果である。

「……そとと。」

ここからじゃ向こうの様子なんて分からねえし。

……卍解の状態作るか……。」

『勝手にしろ。』

一護みたいに長く持つのか？暗空の卍解。』

獅牙のそれを聞き、多分、と短く返すと、一守は暗空を抜いた。

「………卍、解。」

しようれんあんくう
青蓮暗空。」

久しぶりの卍解。

一守は寒気を感じていた。

死覇装が変化したであろう黒いローブを纏い、二本の黒い大鎌を手にしている。

例えるならば、尸魂界を知らない人間がまず初めに想像するような死神……。

神話や宗教に出てくるような死神とでも言おう。

そんな姿の一守の周りは、

青黒く重い霊圧と、冬だというのに白く漂う冷気で囲まれていた。

『………寒くねえの？』

(まあ、それなりに・・・？
ってか、今初めて知ったけど、暗空って冰雪系？)

『・・・いや、違うだろ。』

闇ー・・・見たいな？』

(暗い所って寒いもんな・・・。
じゃなくて。

とりあえずその辺見て回ってたら誰かに会うだろ。
行くぞ。)

その一守の呼びかけに、獅牙は、勝手にしろ、と返した。

「まさか過去に戻るとはな・・・。

戦いに備えて、か？主。」

「当たり前だ、馬鹿。

前のままじゃ、絶対に敵わないし、掠り傷すら付けられない。」

「疲れていないのか？」

「大丈夫だ。

あの便利すぎる温泉のおかげで。」

時空を渡る能力で、嘉介は空座町に来ていた。

偽物の、だ。

皆が気付いても良さそうな物だが、生憎、靈圧を完全に遮断する外套を着ている。

そして、この距離ともなれば気配にすら気付かないだろう。

「・・・にしても運悪かったな、勘で飛んできたから。

もう戦い終わってるし・・・。

爺さんが言ってたことが本当なら、現世の本物の方に行ったのか、藍染のヤツ。」

「仕方あるまい。

・・・いくか？現世へ。」

「当たり前だ。」

そう言っつて、嘉介は川蝉に戻るように言い、その場から消えた。

決戦へ（後書き）

恐ろしく飛びました・・・。

本当に、これ以上長くすると話数がとんでもないことになるだろうという・・・。

この話が終わった後に続く話も長くなりそうですし、

では、感想等お待ちしております。

続・決戦へ(前書き)

四十二話から少し経った所です。

続・決戦へ

「……藍染か。」

「……誰だい？君は。」

「死神代行、真砂一守だ。」

すでに一守と藍染は対峙していた。

近くには、斬られたのか、倒れた市丸と、必死で駆けつけたのであろう松本が。

「……聞いたことが無い。」

黒崎一護以外の死神代行というのは。」

「俺以外にも、もう一人いるはずだ。」

「……正確には元だけだ。」

「その通りだ。」

元死神代行及び元護廷十三隊二番隊六席！艸楽嘉介！」

「……嘉介！来たのか！」

嘉介は上空から地上へ下り、一守の元へ向かった。

「……駆けつけたのは高が六席か。」

「何が高がだ、クソ藍染。」

「・・・実力は、戦って見ないと分かんねえだろ？」

「それは私と互角に渡り合えるものが言う言葉だ。」

「・・・そうか？」

「卍解！」

刹那、爆風が起こる。

舞い上がった土煙は相当な量だった。

「碧眼之川蝉！」
へきがんのかわせみ

風の中心から、巻き起こった爆風を相殺する爆風を出したのだろうか。

爆風は消し飛ばされ、翡翠色のような翼を纏い、眼を瞑った嘉介が現れた。

右手には黒い霊圧、左手には紅い霊圧を纏っている。

右手にはさらに、翡翠色の刀身の刀が。

息を整え、嘉介がおもむろに眼を開いた。

・・・眼の色が違った。

まるで、一守が獅牙と入れ替わったときのように。

黒から、翡翠へ。

「・・・卍解。」

そう呟いたのは、なぜか一守だった。
しかも驚きの声ではなく、明らかに開放の声。

「じゅうじいほうじゅうじ 獣帝王白獅子。」

一度に二つの斬魄刀の開放など、出来る訳が無い。
ましてや卍解など。

二人とも、そう思ったことだろう。

だが。

一守は成功させた。

現れた一守は、黒く、左が破れているロープを纏い、
左手には長い爪状の獣帝王白獅子が、右手には青蓮暗空が変化し刃
が二つ付いた大鎌が。

「……あ。

出来ちゃったよ、これ。」

「……何故斬魄刀を二本……。」

「それは言えないけど。

……とにかく戦闘能力は始解よりも、最大で百倍は上がった。
……十×十は百だからな。」

「百倍……、か。」

笑わせてくれる。」

「笑えないようにしてやるよ。

なあ、嘉介。」

「……おう。」

正直、嘉介は霊圧に潰されそうだった。
一守や、藍染の霊圧に。

立っていることは出来たが、戦えるかはどうか分からない。

「行くぞ……。」

……、瞬間！しゅんげん！」

あの、浦原との修行で習得した技だ。
己の刀に練りこんだ鬼道をこめる。

「たそがれのうたげ黄昏之宴、そのいち其之一。
あんしょうれつぱ暗青裂破！」

いつもの青黒い斬撃に、垣間見る練り上げた鬼道。

藍染は片手で止めたが、それが仇となる。

「……何……？」

「どうだ？暗青裂破。

……青蓮暗空、つまりは青蓮地獄の名を持つ死神。
……分かるか？」

藍染の手は徐々に凍りだし、ついには腕にまでそれは達していた。

「……ああ。」

だが、残念だったね。」

「それくらい分かってる。」

お前には遠く及ばないことくらい。

けど、たとえお前にとって雑魚でも、ちょっと位体力削れるだろ？

……こういうの、好きじゃないけど。」

「守がそう言い終わると、藍染は霊圧だけで暗青裂破を相殺する。」

「君は、そういう考えの持ち主か……。」

「そつだ、悪いか？超平和主義で。」

そついえばお前の部下にもいたろ？俺みたいな考えの。」

……俺からしたら、あれは度が過ぎすぎだけだな。」

「……何の真似だい？」

「さあ……？」

真似はしてないつもりだけど？

最もそつという意味じゃないんだろつけど。」

………嘉介。」

運の良いことに、嘉介は霊圧を遮断する外套を身に着けていたのだ。

それに、嘉介自身、元々隠密機動の死神だ。

気配を消すことくらい容易い。」

いきなり視界から消えられては見つけられないだろう。

藍染は、咄嗟に振り向き、刀を構えた。

だがその先には。

「残念でしたっ！！！！！」

「行つくぜーえっ！！！！！」

「たそがれどきのかざまい
黄昏時之風舞！」

「ひすいのかた
ほんろうのかり
翡翠ノ型、終極！
翻弄ノ狩！」

はったりだったのだ。

さきほどの呼びかけは。

一守は青蓮暗空と獣帝王白獅子を使い、闇と風による攻撃を巧みに
行い。

嘉介は藍染を翻弄する速さで、川蝉が狩をする様に的確に攻撃を当
てていく。

「少なからず・・・、効いたとは思っただけど？」

「・・・にしても便利だな・・・、兄ちゃんの作ったヤツ。」

「・・・浦原喜助のことか・・・。」

「そうだ。」

「・・・もうじき兄ちゃんも来るだろうな。」

「残念だがヤツはもうやった。」

そう言って、藍染は自身を傷を修正した。

・・・超速再生だ。

「へえー・・・。」

・・・けど、多分兄ちゃん無駄にしつこいだろつから。
最後の最後までいると思うよ？

・・・お前が負けるまでな。」

「随分と勝気だな。」

「まあ、俺のトリックを暴けない限りはな。」

そう言って、嘉介は消えていった。

「・・・笑わせてくれる。」

何をするのかは知らな」

刹那、藍染の話を遮り刀が振り下ろされる。

その翡翠色の刀身を見る限り、恐らく嘉介だ。

・・・だが、その嘉介自身はいない。

「・・・居ない・・・？」

「・・・あゝあゝ・・・、掛かったんじゃないの？」

「一回掛かるとそう簡単には抜け出せないよ？」

口調が打って変わった一守は、挑発するようにそう言った。

見ると、右の瞳だけが黄色く変わっている。

「嘉介の能力、勘違いすると厄介だし。

・・・なあ？」

「それは能力の本質が分かった俺らだけに分かることだし。

せいぜい気を付けろ、藍染。」

一人で二役をするようにして喋る一守を見、藍染は内心驚く。

一守と獅牙は魂がことなる故に、違う霊圧を持っている。

つまり、二人が同時に表へ出るともなれば、

二人の霊圧が交じり合うようにして流れ出るのだ。

・・・個人の霊圧の高さは、両者の霊圧を合わせた物だから、高さは変わっていないが。

それでも二種の霊圧が交じり合って一人の死神から放たれているのだから、

気味が悪くて仕方が無い。

「へへへ、びびってるびびってる。

・・・隙だらけだぜ？藍染。」

また、嘉介の刀が何処からとも無く藍染の背後に現れる。

「刀は握らなければ振れない。」

・・・刀を止めれば、何処にいるかくらい分かるだろう？」

咄嗟に藍染は素手で刀を受け止め、それを掴み、引き抜こうとする。

だが、それも束の間、嘉介の刀は消えた。

（・・・消えた？

・・・しかも眼を眩ませたのではなく、”その場から”
ということ、単なる眼晦ましでは無いということか・・・）

「考える暇なんてやってねえぞ、藍染。」

「私に考える暇などいらぬ。」

・・・もう理解した。」

「そうか、良くやるよ。」

・・・浦原さんでさえ仕組みは分からなかったのに。」

「喜助に理解できたのはトリックの正体だけだ。」

アイツがなんで現れたり消えたりしてるかは分かれども、
それを止めることは本人の意思でしか出来ないんだし。」

「・・・あの少年は空間を渡る能力を持っているのだろう？」

「残念。」

具体的なのは合わせて二つだ。

まあ、言つなればカミサマが決めた規則に逆らってる、って感じ
だな。」

「・・・君は、神の存在を信じるのか？」

「あくまでも例えなんだからさ、信じてるとでも？」

「……この、無神論者が大半を占めるこの国において。」

「……まあ、頑張りな、藍染。」

空間移動だけじゃ、今あるこの状況は成り立たない。」

また、嘉介の刀だけが現れる。

「私をあまり嘗めるな、小僧。」

「あーあ、切れちゃったな。」

どうしょ。」

今度は声が何処からとも無く聞こえ、刀が引かれた。

「まあ、そりゃそうだよな！」

お前の想像の中には、俺たちは存在しないんだし。

……俺の能力はお前に与えられた物じゃない。」

諦めたのか、嘉介は藍染の前に現れる。

「……崩玉の能力を理解したか。」

浦原喜助の弟と言っただけはある。」

「残念。」

血の繋がりはなんら無いし、俺が喜助を慕って兄ちゃんって言っ
てるだけだ。

生憎、俺は事故で死んだ一人っ子の魂魄なんで。」

「何故生前の記憶を……？」

「俺自身の記憶は無くとも、魂はちゃんと記憶してるモンで……それがなんでかっていうのは教えてやんねえけど。」

そう言い、嘉介は大きく息を吐くと、卍解を解き刀を鞘に収める。

「良いのか？敵を目の前にして刀を納めるなど。」

「別に？構わないけど。」

「つてか、俺ら引いたほうが良さそうだし。」

「……一守、卍解解け。」

「……はいはい。」

一守は呆れたように卍解を解き、刀を納める。

それと同時に獅牙も内側へと姿を消した。

「俺らは足止めしただけに過ぎないし。」

「これ以上、町の奴らに危害を与えてくれるのは御免だ。」

「んじゃ、嘉介の言うとおりここは引くか……。」

「やっと戦いから出れる……。」

「まあ、俺たちの勝利は約束されたようなモンだ。」

「どう足掻いても勝ち目は無いだろうな、あいつの想いには負けるだろ。」

そう言って、一守と嘉介が適当に建物の屋上に上がったときだった。

突然として、一護が現れたのだ。

続・決戦へ（後書き）

自分の文才の無さとネーミングセンスの無さに痛感した話でした；
且、クソ長いと。

・・・本当にバトルシーンは苦手です；
もっと腕上げなきゃなあ、とか思ったり。

では感想等お待ちしております。

決戦終了後（前書き）

一番大事なところはどうしたんだ、ってな話ですが、
決戦終了後まで飛びます。
すみません。

決戦終了後

「……ありや……？」

もう皆帰路に……？」

「行ったら？」

「……嘉介は？」

「俺はもう行く。」

俺からしたら兄ちゃんにはすぐに会うことになるんだし、言うこととは無いから。

……道を正せるのは、俺しか居ない。」

別れの一言でも言えよ、と、一守に言われるが、嘉介はそのまま消えていってしまった。

仕方なく、一守はそのまま瞬歩で駆けつける。

「……あ、真砂さんじゃないっすか。」

……、足の方は？」

「獅牙が勝手に治していあがった。」

……それより、一護は？」

「黒崎さんなら先ほど詰所に運ばれました。」

……簡潔に言うと、死神の力を失ったって所っす。目覚めるまでには大分掛かるでしょう。」

そうか、と、一守は呟く。

「アイツのことだし、どうせ死神の力を取り戻すだろ。
・・・正直、これから先コイツがどうなっていくか・・・。
分かってて本当に怖い。」

「・・・そういえば、嘉介はどうしたんスか？」

浦原は故意になのか、話をそらした。

「アイツなら、もう未来に行った。」

”道を正せるのは俺しか居ない”って言ってな。」

「・・・誰の。」

「さあ？そんなの自分で考えろってんだ。」

・・・ってか、一護の体。」

「あ、体を探さないといけないんですけどっけ・・・。」

普通ならコンの霊圧で分かるのだが、なぜかそれを感じず、探すことが出来ない。

「なぜかコンの霊圧を感じないが、この派手な頭だ。
すぐに見つかるだろう。」

「まあそうだな・・・。」

ルキアが言ったのに対し、それに恋次も賛同した。

「阿散井さんも十分派手な頭じゃないですか。髪型もそうだし、・・・赤って。」

「守は半ば”自覚しろよ”と言うかのように言う。」

「五月蠅え！」

「だって、先遣隊で来たときにクラスの皆にドン引きされてたじゃないですか。」

現世じゃまず見かけないんですから、赤なんて。」

「守が先ほどから敬語オンリーなのは訳がある。」

「護は尸魂界でのこともあり、恋次と親しくなったが、

「守は殆ど単独で行動していたに等しかったため、特に親しくはなっていない。」

さらに、親しくない者や初対面の者に対して、

「守が敬語を使う為にこんな風になっているのだ。」

同年代の場合、そうは行かないらしいが。」

「尸魂界でもお前と同じ髪の色をしている者は見た覚えが無い。」

「・・・派手か。」

「まあ、派手すぎるって言っても過言じゃないですね。」

「・・・ってか話それてる。」

ノリに乗って、髪の色のことを話していたが、実際それどころでは

ない。

「……ム。」

早く帰ろう……。」

「おう。」

そう言って、一守は、行くぞ、と声をかける。

「私はしばらく現世に残るか……。」

「んじゃ、そう伝えとく。」

「すまん、恋次。」

「真砂、本当に足は大丈夫なのか？」

「え？大丈夫大丈夫。」

獅牙が勝手に治してた。」

「……さて、これからどうするっすかねえ……。」

「……黒崎君……大丈夫かな……。」

「……あ。」

大丈夫っすよ。

……彼ならね。」

「……、一守の言った意味が少なからず分かる……。」

皆が歩き出すと同時に、様々な会話が飛び交った。

戦いの後の一息も、いいものではない。

決戦終了後（後書き）

ようやくこの篇も終了です。

・・・なんかもうグダグダになってきたような気があ・・・。
次の篇から一気に状況が変わってくるんじゃないかな、と。

では感想等お待ちしております。

死（前書き）

タイトルがどこかシリアスですが、気にしないでくださいな。
ようやく新篇突入、一話目です。

死

「……天気良いなあ……。
……って、今日稽古の日じゃねえかよ。」

あれから数週間。

一護は未だに目覚めていなかった。

「あ！もう時間じゃねえかよおっ！！！！！」

時計を見、ようやく窮地であることに気付いた一守は慌てふためく。

「えーっと……、道着は入れてあるから……。
やばい！間に合わねえ！」

そう言っつて、鞆を引つ手繰る様に取りつて一守は急いで階段を下り、
すぐさま玄関で靴を履く。

「稽古に行くの？行ってらっしゃい。
気をつけてねー。」

「おう！行ってきますー！」

一守は勢い良く立ち上がると、玄関の戸を乱暴に開ける。

「間に合わねえーっ！！！！！」

珍しく、一守は叫びながら走っていった。

「……一応ずつと無遅刻なのに……！」

無我夢中で走っている中、小さく一守は呟いた。

稽古場となっている道場は、空座本町駅から一駅行った所にある。

電車が何本も出ているわけではないし、

次の電車が来るまでは最低でも数分待たなければいけない。

つまりは乗り過ぎすと確実に遅刻するのだ。

それ故に、一守はいつもと違う道を走っていた。

俗に言う近道だ。

「間に合え……！」

そんなことを言いながら、一守は走り抜けた。

一守が走っていると、ようやくいつもの道へ続く十字路の前まで来た。

”もう少し”

そんなことを思いながら走っていたのだろう。
だが。

右からはトラック。
つまり自分は飛び出し。
そしてオチは確実。

確実に轢かれる、一守はそう感じた。
そう思った瞬間に感じた重い衝撃は一守を吹っ飛ばす。

「・・・あれ。」

魂が・・・って、死んだか、死んだのか？俺。」

気付けば回りには野次やらパトカーやら、そんなのが色々来ている。
服装はもう大分慣れた死覇装。

魂と肉体との連結は時として強烈ではあるぐらいに凄いはずだが、
霊力とはすなわち戦闘力や生命力。
なので、生命力の強い魂魄だけが残ったのだろう。

実際、撥ねられた方の体と同じくらいに傷はあった。

「死んだなあ。」

最近撥ねられたりしてたからその最終的なやつだろ・・・。」
・・・浦原さんの所行くか・・・。」

なんなんだ。

この、死んだのにあっさり過ぎる展開は。

一守はそんなことを思いながらも、その場から掻き消えた。

「……交通事故、つか……？」

「一応な。」

稽古場に行こうとしたら、右のほうからトラックが突っ込んで来た。」

よくそんなに平然としてられますね、と、浦原は呟くが、そんな事は気にしない。

寧ろ、獅牙に治させた腕のほうが気になるようだった。

「……で。」

まあ、一護が眼、覚ますまでこっちに居ようとは思っ

その後は向こうに行こうと思うんだけど。」

「まあ、お好きに為さって下さいな。」

……恐らく、護廷側は貴方を求めるとは思いますがね。」

「……なあ、浦原さん。」

……自分の葬式見るって、どんなんだろ。」

突拍子も無い一守の呟きに、浦原は啞然とした。

「……さあ？」

見たいのなら、見に行けばいいんじゃないっすか？」

「……なんか嫌だしなあ……。」

だって、守斗のヤツさ。
少なからず霊力はあるんだし。」

「……弟さんですか？」

「まあな。」

病気がちなヤツで。」

もう終わったことだし見られても良いんだけど、と、一守はそのまま続けた。

「……とにかく、黒崎さんが眼を覚ますまでの間。」

どうするんスカ……？」

「あ……、家には帰れないし……。」

ルキアってどうしてんの。」

「さあ……、黒崎さんの所に居るんじゃないんスカね。」

「へえ。」

じゃあ、俺も行ってみよ。」

「あ！ちよつと！真砂さん！」

浦原の引きとめる言葉には耳も貸さず、一守は消えていった。

死（後書き）

ドパーンと。

撥ねられてしまった一守君、オチは確実。

人間として死にました・・・；

あくまでも人間として、なので心配なさらず。

というか、肉体と魂魄の繋がりがって、なんか分かりにくいです；

では、感想等お待ちしております。

偶然（前書き）

前話からほんの少し。
一守が向かった先は、ってやつです。

偶然

「お邪魔しまーっす、っと。
久しぶり。」

開けてあった窓から入り、そのまま部屋に居たルキアに一守は声をかけた。

「一守！無事だったのか！」

「・・・事故のことか？」

まあ、人間としては死んだけど、死神としては生きてる。

・・・人間として、一護に会うことはもう無いってことだ。」

そう言っつて、一守は窓のさんから飛び降りた。

「・・・そうか・・・。」

「・・・コイツのことだし、どうせまた死神の力を取り戻してお前に会いに来るだろ。」

そう言っつと突拍子も無く、一守は白獅子と暗空に手を置いた。

「偶然に偶然が重なって俺らここに居る訳だし。
気まぐれだな、いろいろと。」

「・・・貴様が今日死んだのは偶然と言えるのか？」

「いや、あのだな、
偶然が幾つにも重なって運命とか天命とか必然とかさ。
そういうの起こってるだろ。」

誰でも行き当たりばったりだ、と、一守は続けていった。

「確かにこやつのことだ、そのうちこっちにやってくるかもしれないな。」

「……な？」

まあ、あれだ、諦めること諦める。

……それがなんか……成り果て、っていうか。
俺がそうだし。」

「成り果てか。」

よくそんなことが言えるな、自分で。」

「自虐的とも言っただよ、馬鹿。
じゃ、俺、先生に許し貰ってくる。」

そう言って、一守は部屋から出て行った。

「って訳で!」

「……やっぱりか。」

事細かに説明しなくてもだな……。

……一応知ってたんだけど。」

「・・・誰經由。」

「別に？」

俺はただ気付いただけだし、一護のこともそつだ。」

一守はそれを聞き、啞然として口を開いた。

「まあ、泊めるくらいならしてやるよ。」

「一人も二人も一緒だつてよく言うだろ？」

「・・・それはありがたいんだけど・・・。
義骸とかどうするんだよつて話に・・・。
しかも死んだの今日・・・。」

「・・・どうにかなるだろ、それは。」

適当に流した一心に、またも一守は口を開く。

「ま、頑張りな。」

「・・・先生・・・。」

「ありが・・・、それ・・・。」

「ウチの家族は死神の存在はそれなりに分かっている。
それに夏梨なんてはつきり見えてるみたいだ。
・・・難しいけど、できるだろ。
一護の何倍も頭が切れるんだ。」

「・・・そんなに頭切れないつて。」

一守はそう言って大きく溜息をつくと、部屋を出た。

「先生に了承は得てきたけど……。」

「……俺、死んだばかりってなってるしなあ……。
どうしたもんかな。」

「というか……。」

向こうに行つてからはどうするのだ？

必要な知識もあることだし、霊力も隊長格のそれと同等と見ても
いいほどだから、

恐らくそのまま隊長か副隊長に起用されるだろうがな。」

「……俺としてはもうちょっと勉強しときたいんだけどなあ……。
。」

「……、なあ、今からでも霊術院つて入れんのか？」

「……総隊長の許しを得れば大丈夫だろう。」

へえ、と素っ気無く一守は返すと、勝手に一護の勉強机の前に置いてある椅子に腰掛けた。

「鬼道とかさ、一護もそうだったけど、まるで出来ないし。」

「獅牙に教われればよかるう。」

「それもなあ……、なんか、自分でそういうのやりたいんだよ。」

「……一護ほど霊力の操作下手じゃないし。いけると思うけど。」

「……それもそうだな。」

少し笑いを含んだかのように言ったが、ルキアの表情はすぐにもとの表情へ戻った。

「……、お前さ、ここ最近ずっとこうして待ってた訳？」

「……まあ、な。」

時より誰かが来たりはしたが……。」

「……たまには息抜きしろよ？」

向こう帰ってみるとかさ。」

「……、いや、私は一護が眼を覚ますまで待つ。」

一守はその言葉の中に何かを感じたのか、すぐにその手の話をするのは止めようと思った。

「そうか。」

「……俺、ちょっと寄りたい所あるから行ってくる。」

「何処へ行くかまでは問わぬ。」

「……貴様も、思い残すことくらいあるだろう。」

ルキアの言葉に、一守は静かに頷く。

そして、部屋の窓から勢い良く飛び出していった。

偶然（後書き）

結構悩まされた話です。

訂正前、もっと臭いこと言ってたんですよ、一守君；

次の話では久しぶりにあの人が出てきたりします。

では、感想等お待ちしております。

黒いマグとペンと（前書き）

久しぶりにあの人が。
今後には少しは繋がります、一応。

黒いマグとペンと

午後七時頃。

多くの喫茶店がこの時間帯に閉店すると同時に、フードコートにあるあの店も、店じまいをするところだった。

一守は、ただ一人でその光景を眺めていた。

周りの霊力を持たない人間には見えない訳だから、こうして突っ立つていても問題は無い。

・・・というか、この時間帯はこの辺りに人気は無い。

多くの店がすでに店を閉めているために、見えるのは奥の方の喫茶店の光だけ。

それに対して、後ろはやけに眩しく感じられる。

「・・・店の近くまで行ってみるか・・・。」

誰にも聞こえないであろう事を分かった上で、一守は呟き、瞬歩で傍まで向かう。

傍から見ると、店じまいをしているマスターの姿が良く見えた。

「・・・あ。」

一守君。

道着のまま来るなんて珍しいね。

・・・もうすぐ店を閉めるんだけど・・・、寄って行くかい？」

マスターの視線は明らかに一守の方を向いていた。

見えてること自体が驚きだったが、勘違いしている事が幸いだっただろうやら見えてはいるが、区別はついていないらしい。

「……あ……、おう。」

一守は敢えて問い詰めず、慌てて返事を返した。

「もう店を閉めるところだったからね……。
何も出せなくて申し訳ないよ。」

「別にいい。
ちょっと来てみたかっただけだし。」

「……そうかい。
あ、そうだった。
受け取って欲しい物があるんだっただよ。
少し待っててくれるかい？」

そう言っつて、マスターは奥のほうへ入っていった。

「……なんか悟ってんのかよ……、あの人。」

一守は、小さく呟いた。

「何か言っただかい？」

「い、いや、何も……。」

それほど時間は掛かっておらず、すぐにマスターは出てきた。

「……なんだそれ？」

「これ？」

「……弟が要らないからって押し付けてきたんだけど、僕も使わなくて。」

「用は俺に押し付けようってか。」

その黒いマグカップ。」

「その通りだよ。」

マスターはそう言うと、カウンターに黒いマグカップを置いた。

「まあ、割と良い品らしいんだけどね。」

使われることもないし、一守君なら使ってくれるんじゃないかな、
って。」

「へえ……。」

ちよつど良いや。」

俺も俺でこれくらいの大きさのヤツ欲しかったし。」

ありがとな……、って、なんか取るとか……。」

「ある訳無いよ。」

ただであげるって。」

「……それじゃあ申し訳ないのはこつちだ。」

じゃあ、これ。」

比になんないと思うけど。」

そう言って、一守が懐から取り出したのは一本のシャーペン。

「一守君にとって、描く物っていうのは大切なんじゃないのかい？」

「まあ、それもそうだけど。」

それ、一応メモ用に使ってるやつだし。」

「・・・そうかい。」

じゃあ、わかったよ。

交換、っていうことでいいんだね？」

「ああ、それでいい。」

「・・・じゃあ、公証成立だね。」

そう言ってマスターが微笑むのにつられて、一守も少し笑った。

黒いマグとペンと（後書き）

短いですが、正直。

という訳でまあ、今回は書き溜めといた分を一気に更新しようかなあ、と。

大分溜まっていることによつやく気付きましたorz

では感想等お待ちしております。

疑問と行動（前書き）

前話の出来事で疑問を抱いた一守君は、浦原商店に……。最後のほう、若干伏線みたいな感じですが。一応、ですが。

疑問と行動

もう真っ暗になった浦原商店前で、ガラガラと引き戸を開ける音が響いた。

「こんにちは……、っと。」

浦原さん居るかー？」

「はいはい。」

「ちよつと待っててくださいな。」

何か作業でもしていたのかは分からないが、奥から物音が聞こえてくる。

しばらくして、バタバタと慌しい足音が聞こえた。

「お待たせしましたね……。」

「なんの用事です？」

「……まあ、どうでもいい話なんだけどさ。」

「普通の人間と魂魄の姿の区別が付かないなんて、いい年した大人がそんなことあるのか？」

「……はい……？」

「一護が小学生の時、はつきり見えすぎて見分けが付かなかったらしいんだけど……。」

「いい大人が……。」

だから気になって。」

一守はマスターと交換したマグカップを見ながら言う。

「・・・知り合いなんスか？」

「まあ、知り合いつていうより、いい相談相手、みたいなの？」

「・・・そんな格好をしているのに何故間違えられたんですかね・・・？」

「あの人、俺が合気道やってるの知ってたし。」

”道着のまま来るなんて珍しいね” って言われて。」

区別付いてないだろ？と、一守は投げかけるように言った。

「・・・けれど、その真砂さんの知り合いの方は何かを悟ったのかも知れませんが、

貴方が人間として死んだのは今日の午前中。

ですから、聞いていたのかもしれませんが・・・。

だからでしょうね、その頂き物は。」

「まあ、俺も貰っただけじゃ悪いから交換って事で、残してきたんだけどな。

ペン一本とこれとじゃ全然違うんだろうけど、

あのマスターの捕らえ方だから。」

そう言って、一守は少し微笑んだ。

「・・・そういえば、真砂さん。」

さつきからマスターって呼んでますけど……。
本名は分かるんですか？」

「なんでまた。」

「いえいえ。」

念のためですよ。

しばらく死神が手を貸せないような状況になるでしょうからね。」

「……多分、柎むすぶ 優利ゆうりだったと思う。

初めて店に入ったときに聞いたつきり、一回も聞いてないから曖昧あいまいなだけけど。」

そうですか、と、浦原は短く返す。

「そろそろ帰らなくていいんスか？」

「……あ。」

そうだな……、今何時。」

「八時前ですが……？」

「……黒崎家は晩飯早いからな……。」

……、残ってるといいけど……。」

一守は不安げにそう言うと、急いで店を出て行った。

「……聞いてましたか？」

「当たり前じゃ。」

最初から最後まで、一寸たりとも聞き逃しておらん。」

浦原が声をかけると、奥のほうから出てきたのは猫の姿の夜一だった。

「やはりあの流儀ですからね……。」

見つかっていないのか、尸魂界が黙認しているのか。」

「……さあ。」

じゃが、一守から自身以外の霊圧を感じることは無かった。

ヤツの霊圧操作の腕は凄いらしい。

呼吸をするに等しいのじゃろうな、常に消しているという事とは
「の。」

「初めて会ったときも気付きませんでしたし。」

「……、そういえば。」

浦原は何か思い立ったのか、ゆっくりと立ち上がる。

「どづしたのじゃ?」

「……いえ。」

ただ、少し分かってきた気がしまして。

……蒼純さんの件、覚えてますよね……?」

「……そうか……!」

「……、行くのか?」

「ええ、まあ。」

夜一さんも来ます?」

ああ、と、短く夜一は返すと、浦原の肩に飛び乗った。

疑問と行動（後書き）

蒼純さん、そう、白哉のお父さんです。

キャラブックには載ってましたけど・・・；

何気に最後のほう重要な感じなんです、結構。
よく考えてみてくださいな。

では感想等お待ちしております。

出発（前書き）

若干展開が急です・・・orz

自分の力量不足です、すみません。

本当に、この辺りからがつつがっ進んでいく・・・はずです。

出発

「……やっぱり俺、いったん向こう行くかなあ……。」

「一護が眼を覚ますまで待たんのか？」

「眼を覚ます頃合になったら戻ってくるし……。
それなら、まあ、なんていうか、大丈夫だろ。」

「もし行くことを決めているのなら、何時頃いくのだ？」

「明日の晩くらい。」

「向こうに持ち込みたいものとかあるし。」

「そうか。」

「……急だな、それは。」

結局、一守が帰ったのは夕食後。

結果飯は当たらない羽目になったが、よく考えてみれば義骸をもっていないのだ。

始めから飯は食えないことは決定していた。

一護の部屋に戻ってみると、そこにやはりルキアが居た訳で、こうして話している。

「……で、やっぱり正規の門通ったほうがいいよな？」

「浦原さんの所行くより。」

「まあ、そつだろつな。」

「・・・適当に恋次でもこちらによこすとしよつ。
本当に、明日の晩で良いのだな？」

「それでいいって。」

「言ってるんだろ。」

「・・・思い残すことは無いのかと聞いておるのだ。」

「向こう行かつて決めたんだから。」

「・・・ねえよ、そんなの。」

そつか、と、短く返すと、ルキアは伝令神機をいじり始めた。

「じゃ、向こうに持っていく物まとめてくるな。」

「分かった。」

あまり持って行き過ぎるな。

妙なことが起きたと騒ぎ立てられるぞ。」

一守は、分かっている、と返し、部屋の窓を開けて、そこから出て行った。

「後は・・・、これと・・・。」

暗い部屋の中で、月明かりだけを頼りに一守は色々と箱の中に詰め込む。

今まで使ってきた画材や、資料、大切にしているものに至るまで、丁寧に入れていった。

「……よし、終わり、っと。」

後は一護のところに置きっ放しのマグカップだけか……。」

一守は箱を締めながら言うと、一つ、溜息を付いた。

「……、向こうで俺のやりたいことって出来るのか……？」

……死神の業務は、整を魂送して尸魂界へ導いたり、虚から現世の人間を護ったり、

静霊廷の守護をしたり、それ以外は書類整理をしたり。

とまあ、随分と役割は多く、隊長格などかなり多忙である。

一守がそんな上にいきなり就くとは決まった訳ではないが、

ルキア曰く、隊長か副隊長に即起用されるだろう、ということだ。

それで無くとも、様々なことに縛られるのは分かっている。

「……漫画描くなんて出来やしないんだろうな……。」

……、趣味程度にしか出来ない、か……。」

いままで本気で打ち込んできたこともあったが、向こうへ行っただけならはそうは行かない。

漫画の為に時間を割くことはかなり難しくなるはずだ。

体力はそれなりがあるが、それでも厳しいだろう。

「まあ、仕方ないか。」

もう決めたことだし、さっさと戻るか……。」

そう言っつて、一守は箱を肩に担いだ。

翌日。

「……本当に良いんだな？」

「良いですよ。」

二度と戻れないわけじゃないですし。

……覚悟は、十分です。」

「分かった。」

……解錠。」

「……このことは後で皆に伝えておく。
気を付けるのだぞ。」

「おう。」

「お帰りなさいませ、阿散井副隊長。」

「おう。」

「……そちらの方は？」

「死神代行、真砂 一守です。」

「そうでしたか。」

本物の穿界門は走ることも無く、拘流が止められた断界の中を歩いていったため、
落ち着いてここまで来ることが出来た。

「……で、阿散井さん。」

まずは一番隊の隊舎まで行くんですけどよね？」

「まあ、そんな所だ。」

「……あのだな、……敬語止めてくれねえか？」

これから護廷に入るんなら絡みも多くなるだろうしさ。」

「あー……。」

「んじゃ、恋次で。」

「順応早えな……。」

一守は、おかげさまで、と短く言いつと同時に、現世から持ってきた箱を担ぎなおした。

「お前……、それ何が入ってたんだ？」

結構でかいし重かったけど……。」

「え？画材とか。」

「……画材……？」

「そ。

それなりに絵は描けるけど。」

以外だな、と恋次が返したのは、一守があの子の兄の心継者だからだろう。

「獅牙の絵は壊滅的だけだな。」

設計図描くのは病的に巧いらしいって、浦原さんが言ったことなだけで。」

「繋がりあんのか？」

「だって、浦原さんに色々教えたのが獅牙らしいし。」

まあ、実際は獅牙のほうが年は下らしいけど。」

屋敷から引つ張り出てきた本一緒に読んでたらしい。」

「全部”らしい”って……。」

まあ仕方ないことなだろうけどな、と、恋次は笑って続けた。

「とにかく、先急いだ方が良いと思うんだけど……？」

「……あ。」

もうすぐ隊首会だ……。

急がねえと間に合わねえな……。」

「もしかして総隊長と俺だけじゃなくて……？」

「あ、言ってなかったか。」

隊首会で色々伝えるらしい。」

「先に言っとけーえ！」

そう叫びながら、一守は勢いよく走り出した。

「あ！ちょっと待て！おい！」

出発（後書き）

この小説のタイトルにもなっている一守君の目標なんですが・・・。
一応、どうなるか、っていうのは決定済みなんです。

滯霊廷に向かった後、っていうのは結構溜めてるので・・・；

では、感想等お待ちしております。

突然の決定（前書き）

本当に、本当に急です。

いきなりそれはないだろ、みたいなかんじです。

すみません・・・；；；

突然の決定

「……間に合った……。」

「……いきなり走るなよ……。」

「……あ。」

揃ってる……。」

「……さっさと入ったほうが……よくな……？」

「だな。」

そう言って、一守は目の前の大きな扉を押し開けた。

「遅れてすみません……？」

中を見ると、特に皆並んではおらず、適当に喋っている感じだ。

「大丈夫、山爺はまだ来ていないよ。」

よっぽど急いで来たみたいだけど……、大丈夫かい？」

「……あー……急いで損した……。」

「けどお前、揃ってるとか言ったじゃねえか。」

「多分、割と近くに総隊長居るんだろ。」

「居るって錯覚しただけだ。」

「その通りみたいだ。
来たぞ。」

浮竹の呼びかけに、皆一様に列をなす。

「え？俺どうすりゃいいの。」

「ここで立ってたら大丈夫だろ。」

大体そうだしな、こういう時って。」

そうか、と、一守は納得すると、
恋次と共に入ってきてから、あまり動いていない定位置化した所
とにかく居ることにした。

「僕から伝えることはそれだけじゃが、本人の意思を確認の上で皆
に聞きたいことがある。」

色々と長ったらしい経緯を説明した後、総隊長は何か先が読めそう
なことを言った。

「元死神代行、真砂 一守を隊長として登用したい。」

その瞬間、一斉に一守の方へ視線が飛んできた気がした。

「なんで・・・、俺。」

「経験こそ浅いものの、その特異な心継者としての能力は、今後戦線において大いに力を発揮するじゃろうと思つてな。」

「……ならば、具体的にどのようなことが出来るのかネ？」

「……なあ、恋次……。」

これつて見せろつてパターン？」

「さつさとやれ、馬鹿。」

恋次に冷たくあしらわれた一守は、溜息をついて刀を抜いた。

「まあ、一番分かりやすいので、卍解に卍解を重ねる、つて所です。

……卍解。」

今回は霊圧を故意に押さえたせいか、あの青黒い霊圧は幾分かマシだ。

「青蓮暗空。」

次に、獅牙の斬魄刀である白獅子を抜く。

「正直、この斬魄刀は内側のものであって、持ち主は俺じゃないので。

コントロールが効き難いので、少し防ぐなりしてください。

……卍解。」

皆、そんなことが出来るのか、と、それぞれ色々な表情が浮かんでいた。

「獣帝王白獅子……。」

しかし、あのとき一度やったのだ。
出来ないことは無かった。

「・・・ほう？なかなか面白いじゃないかネ。」

「ただ、戦闘力が二十五倍から百倍上がるのに比例して、霊力の消費も結構凄いです。

・・・初めてこれを試したときは結構火事場でしたから・・・。」

「そうそう。」

藍染と戦ってたんだよな！。」

「五月蠅い獅牙。

だまれ。」

獅牙は素っ気無く、はいはい、と返事を返した。

・・・一守の右の瞳はやはり黄色い。

「ついでに、これやると俺の右半分が獅牙の意識になります。

・・・眼、右だけ黄色いはずなんです。」

「・・・霊圧も混じって・・・？」

「そうです。

気味悪いですけど。」

そう言って、一守は卍解を一気に解いた。

「後は、獅牙と俺との意識を入れ替えて、人によって戦い方変えた

り……。

体の使い方が違うんで。」

「例えばどついう風にじゃ？」

「まあ、これは白打の話なんですけど……。

俺は合気道何年もやってて、六段まで取ってる訳ですから、
大体相手の力を使ったりするのは得意。

獅牙は元隠密機動ですから、やっぱりそついう戦い方をします。」

速さからして違いますし、と、続けて一守は付け足した。

「……他に何かあるか。」

「まあ、これについては特に無いです。」

「そつか。」

「……御主はどつなのじゃ？」

「覚悟は出来てますよ。」

獅牙とあつたときから。」

「……分かつた。」

では皆の意見を聞こつか。」

総隊長がそつ言つた瞬間、真つ先に口を開いたのは卯ノ花だつた。

「私は良いと思いますよ？」

今この状態において、戦力は不可欠ですから。」

「でもなあ……」

「……いきなり隊長を務めるとなると慣れない分、かなり大変なはずだし、経験も無い。」

「まずは席官として就くのが一番だと思う。」

「即戦力が欲しいというならそう言うわけでもないが……。」

「僕は賛成だね。」

「一守君はちゃんと自分の考えを押し通す子だ。」

「ちゃんと纏め上げられると思うよ?」

「俺は賛成だ。」

「戦力が増えるに越したことはない。」

「穴を埋めることも出来るしな。」

「僕は賛成だ。」

「白村がそう言ったところで、一気に静まり返った。」

「まだ賛否を述べていないのは、曲者三人と碎蜂だ。」

「白哉が何も言わないときは、大体どうでもいいということだが。」

「構わん。」

「構わないヨ。」

「……心継者……、実に興味深いではないかネ。」

「……けつ、んなもん強けりゃいいだけだろ。」

「……決まりじゃの。」

「……、長次郎。」

総隊長が呼ぶと、すぐに雀部は来た。

「……羽織……？」

「そうじゃ。」

急な話とはなるが、御主には九番隊の隊長を務めてもらう。」

雀部は一守の方へ歩み寄ると、新しく、綺麗な隊首羽織を一守に受け渡した。

「……あ……、ありがとうございます……！」

突然の決定（後書き）

山爺も言っとなります。

「急な話とはなるが」・・・と。

本当に急すぎる、と言つのがこの篇の難点。

時折、書いてて意味が分からなくなったり・・・；

では、感想等お待ちしております。

副隊長（前書き）

俗に言う、先入観？ってやつです。

副隊長

「で、まあ、俺はお前の案内を任せられた訳だけど。」

「別にいいだろ。」

「知らないんだし。」

「まあな……、って、あ。」

「檜佐木さん！」

突然、恋次が声を張り上げるのには驚いたが、とりあえず放っておくことにした。

「おう、阿散井！」

「どうした？」

「……って、隣の方は？」

隊首羽織を羽織っているせいだろう。
変に畏まられる。

「……へえ……。」

「そういうことか。」

「それで呼んだ訳。」

「一守は檜佐木を見ながら、何回か頷きながらそう言う。」

「いや、だからなんですか。」

「どつもどつも、どついう。」

一守は檜佐木に背を向けた。

つまり、羽織の「九」の染め抜かれた文字がようやく見えるわけだ。

「……、新隊長……？」

そうだと、短く返すと、一守は向き直った。

「まあ、昨日今日決まった話だから全然知らなくて当たり前だしさ。

俺も今日こつちに来ていきなりって言っつていい具合に羽織渡されたから。」

「今日……？」

「そうです。」

コイツ元死神代行だったんすけど、現世で死んでこつちに来ることになったらしいです。」

「えーっと。」

真砂 一守だ。

宜しくな。」

「はい。」

檜佐木です。

こちらこそ宜しくお願ひします。」

「……ん？」

一守は、檜佐木のその言葉に眉をしかめる。

「苗字だけじゃなくてさ、名前は。」

「あ、檜佐木 修兵です。」

「んじゃ、修兵で。」

別に俺のこと一守でいいし。

恋次なんか最初俺の方が敬語だったから、

敬語止めるってこっち着たとき言われたぐらいだし。」

「ですが……。」

「それじゃ、仕事ん時は隊長、仕事無いときは一守。

これでいいだろ。」

修兵、公私混同しなさそうだし。」

じゃあ行くぞ、と、強制的にそう決めて、一守は歩き出した。

「行きますよ、檜佐木さん。」

「……まあ、アイツの年も分かったほうがいいんじゃないっすか？
分かると思いますけど、一護と年一緒すから。」

一守のほうがアイツの何倍も冷静なんすけど。」

「……おい。」

しゅーへー、れーんじー、道分かんないんだけどー。」

「分かった！今行く！」

「……檜佐木さんも。」

「あーちよつと待て！おい！」

どろして、初対面だといふのにいつも慌しいんだか。

副隊長（後書き）

そうです、慌しい人等です、本当に；

一守君も年が年だから上下関係とか

嫌だったり慣れてなかったりするんじゃないかな、という・・・；

ちなみに一守君、運動部ではなく、文化部の出身。

一応、中学で美術部の設定だった気が・・・。

高校では帰宅部にしてます、一応。

では感想等お待ちしております。

話して・はしゃいで・消えて（前書き）

前話のその後。
隊舎散策です。

話して・はしゃいで・消えて

「そついや、俺の荷物どうなったんだ？
見当たらないから気になってたんだけど。」

「それなら雀部さんが部屋に運んだはずだ。
同時に色々運んでみたいだけ。」

「……、凄いな、あの人。
行動すんごい速い。」

「まあ、雀部さんは長いこと副隊長やってるからな。
俺たちが死神になるより前からだ。」

「それだけ長いことやって隊長には上がってないのかよ……。」
「多分、総隊長の下に就いて居たいんだろうな。」

九番隊の廊下で、三人が喋りながら歩く。
途中、隊員にすれ違うことが多く、少し気まずい為に一守は羽織を
脱いでいた。

「……つと。」
話にも出てきた一守の部屋がここだ。
最低限必要なものしか置いてないから、足りなくなったら好きに
置けばいい。」

「……あ、荷物。」

てか、この部屋の本棚結構でかいな。」

「おい・・・、荷物整理より、執務室とか編集室とか。職場見たほうがいいんじゃないか？」

「分かってるって・・・。」

修兵、どっちのほうが近いんだ？」

「編集室のほうが近い。」

「・・・まあ、羽織置いといたほうが無難だと思うんだけど。」

「あ、サンキユ、修兵。」

全然気付かなかった。」

そうやって一守は羽織をたたむと、机の上に置いた。

「そうだ。」

俺が隊長務める事になりましたーみたいなことはぐらかしたりするなよ？

隊員居るけど頑張ってたためで行けよ？

恋次はなんか元々ためだったけど。」

「・・・分かった。」

「・・・頑張る・・・。」

一守は、編集室に入るやいなや、眼を輝かせながら言った。

「おー！……！
すごーっ！……！」

「……あのだな。
そんなにはしゃがれても……。」

「いいじゃないっすか。
この類のことは眼え輝かせて言ったり見たり聞いたりするやつっすし。」

「……みたいな事一護が言ってたんですよ。」
とにかく、まあ、向いてそう（？）な人物が隊長に来てくれてよかった訳である。

「編集長ー！
凄い問い詰められるんですけどーっ！……！」

「……羽目外してるな、あれ。」

「まあ、頑張ってください……、檜佐木さん……。」

「……分かった……。
おーい！一守！何やってんだ！」

「なんだー！しゅーへー！」

編集をしている隊員は、

一守が檜佐木の問いかけに反応した瞬間に別の場所に移った。

「……ったく。」

次行くぞ！」

「ちょっと待ってっ！おい！」

「……お前がそんなことやってるから……。
行くぜ？」

「……おつ。」

「ここが執務室だ。」

置いてある文献は勝手に使っいいい。」

檜佐木は引き戸を開けながら言う。

「……へえ、で、そっいや俺の仕事何時から。」

「……今日。」

気になったのか、一守はさり気無く聞くと、さり気無く返される、

「嘘だろー……。」

「まあ、あれだな、集会で隊員集めて話くらいしといた方がいい。」

「よし、分かった。」

最初修兵が喋って、俺が後から出てくる。
いいだろ？」

そついい終えると、一守は何処かへ消えていってしまった。

「あーちよつとー！おーい！」

「……なんだ？羽織取りに行っただけだ。」

「……なんだよそれ……。」

五秒もしないうちに戻ってきた一守は羽織を羽織ながら言った。

「今から集会開けるか？」

「まあ、もうすぐ予定の時間だからな。」

朝晩二回ずつだから、まあ、急ぎで呼び出しても今の時間なら大丈夫だけど。」

「分かった。んじゃ、先に集会所行つとくな。」

「控え室分かるな？」

「おーう。」

早く来いよー、しゅーへー。」

そう言つて、一守は手を振りながら消えていった。

話して・はしゃいで・消えて（後書き）

羽目を外しまくった一守君です。

勢いがごつい・・・（笑）

なんか、この篇書くのすっごい面白い。

この調子で楽しんで書けたらなあ。

では感想等お待ちしております。

反論と友（前書き）

途中から無理に一人称になってます。

基本三人称なので・・・。

というか最近時間に追われてきて雑に・・・。

どうしよう・・・；；；

反論と友

「さてと。」

明日の予定だの、そのほか色々と話していた檜佐木が、ようやく話が変わりそうな台詞を切り出した。

「あの謀反からしばらく経った訳だが、

未だに隊長格が三人足りないのは知っているとおりだ。

この九番隊も、隊長が居ない。

つい最近決まったらしいが、今日からこの九番隊に、新隊長が就くことになった。」

檜佐木がそう切り出したことで、周りは一気にざわめくことになった。

・・・そりゃあそうだろうが。

ざわめきだした隊員たちを黙らせようと、檜佐木が口を開こうとした瞬間、

控え室の引き戸が開いた。

「はいストッパー、ちよーっと黙れ。

・・・な？」

「・・・隊長。

責めて呼んでから出てきてください・・・。」

檜佐木がそう言うと、またもざわざわと五月蠅くなってくる。

目の前に居るのは日番谷ほどではないが、
ぱっと見たところでは、少年というのが一番事が早い。
きつと日番谷のときもこうだったのだらうと一守はどこかで察した。

「なんだ？こんな餓鬼に瀟靈廷通信の編集が出来るのかってか？」

「その通りだ！てかなんで文句無いんですか！副隊長！」

・・・なんか雰囲氣的に三席あたりだらうな。

なんて考えている暇は無いだらうに、そんなことが一守の頭の中を
過ぎる。

「・・・いかに面白い雑誌を作るか、それが編集者の仕事だ。
面白い記事は即採用、とかそういうのは残念ながらよく分か
つてる。」

まあ、俺は、いかに編集者に受けるかを考えて漫画描いてた身だ。
そのほかの分野においてもどうというのが読者に受けるかは分かっ
てる。」

「言っじゃねえか！」

「ついでに餓鬼じゃない。」

九番隊隊長、真砂 一守だ。」

一守は少し口角を上げてそう言った。

「幾ら意義があろうたってもう決まった事だし。」

「これから宜しくな、皆。」

「なあ……、修兵。」

「仕事今日からとか言いながら全然やることないんだけど。」

「隊員たちがやってくれたんで。」

「そろそろ部屋に戻ったほうが……。」

「修兵はどうすんの？」

「飲み……？」

「……なんで分かるんすか……。」

「ちよいと小耳に挟んで。」

「ついでに俺は酒飲めねえから。」

大人は大人で行ってこい、と、一守は手を振って見送る。

「では、失礼します。」

引き戸がスツと開かれて、檜佐木は外へ出て行った。

と、入れ違いに誰か入ってくるようだ。

「失礼します、真砂隊長。」

「……なんだ？」

「……へえ、俺と外見年齢は同じくらいだな。」

実際もつと生きてるんだろっけど。

こんなヤツもいるのか、と、一守は考えに浸る。

「あのー……、御時間、頂けますでしょうか……？」

（頼む、敬語止めてくれえ……。）

よっぽどなれないためか、一守はつい内側に呟いた。
小さく溜息が聞こえた気がしたが気にしない。

「いいけど……？」

「とりあえず場所移すか？」

「いえ。」

「手間をかけて貰う訳には……。」

「んじゃ、とりあえずそこ座れよ。」

「はい。」

「何も出せなくてごめんな？」

「ホント来たばっかりだし何も無くて。」

「いえ。」

「そんなこと無いです。」

話していて分かった。

どうやらコイツ、根っからの真面目らしい。

同じ年頃だからもう少し話してるうちに砕けてくると俺は思ったんだけど。

「で、なんで来たんだ？」

「いや……、まあ、僕、流魂界の出身で。

何年か前に死んでこっちへ来てすぐ死神になったんですけど、

同じ年頃の人なんてそう居る訳じゃないし……。」

「幾つで死んだか覚えてるか？」

「……恐らくは、十三で。」

……わあ、俺より死んだの早い。

中学上がってすぐ、って所か。

「……霊術院を一年足らずで卒業した天才だなんて言われてた事もあるんですけど、

僕はそんなに凄くはないですから。」

へえ、じゃあ結構名が知れ渡って……、って。

こいつの名前知らないな……。

「あ。

そついや名前聞いてないな……。」

「僕ですか？」

望木 成弥と申します。」

「まあ、俺も改めて自己紹介するかな・・・。
真砂 一守だ。」

「・・・成弥でいいか？」

「えっ！」

「そんな、僕を？」

「・・・びびらないでほしいとか思ってもなあ。」

「そんな気にすることじゃねえだろ。」

修兵だって、ほら、修兵って呼んでるもん、俺。」

「そんなに気にするかなあ・・・、本当に。
本当に根っから真面目だな、成弥。」

「別に俺のことも一守でいいけど？
てか恋次に至っては常にタメだけど。」

「そんなこと出来ませんよ。」

「失礼すぎます。」

よし、こっちもそれなりの理由つけよう。
うん、頑張ろ。」

また獅牙が溜息つきあがったけど気にしない。

「いや、ほら。」

俺だって成弥と似たようなもんだ。

同じくらいのヤツなんてそうそう居ないし。」

だからさ、な、友達になろうじゃん。」

あ。

啞然とさせたね、うん。

・・・獅牙の声も筒抜け。

『は？アホかお前。』ってさ。

「でも・・・。」

「戸惑うことがあるか？

ほとんど年とか変わらないし。

こっちに友達っていう友達居ないし。

それに俺、同年代とか、年上に敬語使われるの嫌だし。」

「・・・分かりま・・・、じゃない。

分かった。

じゃあ、俺ら友達って事で。」

わあ、成弥一気に口調変わったな。

それでも根は真面目だろうけど。

「おつよ。」

けど、今はとにかく嬉しいから気にしないでおくかな。

やっとなんかぎこちないのが無くなりそうだ。

反論と友（後書き）

一人称、本当に自分には向いてない気がします。

・・・というか、久しぶりにこの長さで書いたんじゃないかなあ、と。

ではでは感想等お待ちしております。

それぞれの過去と大騒ぎ（前書き）

これだけは言つときます。

・・・最後、成弥君がやけに調子に乗ります。

前話の続きです。

それぞれの過去と大騒ぎ

「・・・そうだな・・・、あれだ、うん。

言ってみれば、俺は死神の大半に知られてないような奴だし・・・

。なんで今日急に話が決まったか言つといた方がいいよな・・・？」

「まあ、結構反感買ってるはずだ。

集会のときの滝棹たきとう三席の様子からして分かったと思っけど。」

「・・・へえ・・・、アイツ滝棹たきとうっていうのか。

下の名前は？」

「確か楼李ろうじだったはずだ。

上級貴族の出身で、流魂界での死神を嫌う人だ。

お兄さんは、それこそ毎日のように流魂界の子供たちと遊んでたらしいけど。」

へえ、と、一守は言つと、一息ついてから言つた。

えらく対照的だ。

「・・・普通に考えれば有り得ない訳だけどな。

俺、生前の記憶ってヤツははっきり覚えてる。」

「・・・流魂界の出身か？」

「いや、違う。」

「・・・ついでに言つと、俺が死んだのは昨日の昼頃。」

合気道の稽古に行く途中に交通事故で、どーん、だ。」

成弥はしばらく考え、口を開く。

「最初から・・・死神だった・・・？」

「まあ、そんなもん。」

一応、元死神代行って所だ。

・・・厳密に言くと代行じゃなかったんだけど。」

「どういう意味だ？それって。」

「俺が他の死神とは違う所一個見つけたら、それが理由に繋がる。」

一守は本棚の方を指差すと、成弥のほうを見、ほら、と、呟いた。
暗空と白獅子が揃えて並べられている。

「・・・斬魄刀が二本・・・。」

嘘だ、というような顔をしているのがよく分かった。

聞いた話、市丸の次に就任した隊長も斬魄刀を二本持っていたかの
ようであったが、

摸爻刀というものだったらしく、当の本人は自害している。

「そう。」

俺の中には、もう一人、別な死神が居る。」

「・・・そんなことがあるのか？」

「・・・俺がここにこうしている、ってことは、あるってことだろ。なんか難しい話だったけど、俺の内側に居るヤツの生まれ代わりが俺で、

内側に居るヤツの魂魄が更正されるときに、欠片として残ったらしい。

で、その欠片が覚醒すると同時に、俺の魂魄は肉体から離れた・・・

みたいけど。」

「・・・へえ。」

でも、それがつまり死んだ訳じゃないだろ？」

「まあ、その後肉体に戻って、しばらくは人間として暮らしてたけど・・・。」

・・・ほら、ルキアの処刑騒動知ってるだろ？」

それと同時に起きた旅禍騒動も。」

それなら瀟霊廷中が知ってる、と、成弥は少し呆れたように言う。相当困らせたらしい。

「そのときに、旅禍として俺も入ってきて、そこで碎蜂さんと戦った。」

「じゃあ、碎蜂隊長と戦いはしたものの、止めは刺そうしなかったのは一守、か。」

「そうだ。」

・・・霊圧で分かったのか？」

成弥は、その問に頷いて答えた。

「そうか……。」

んで、その後、一応現世で人間として生きてるんだから、死神代行と似たようなもんだろ、みたいな感じで名目上は死神代行になった。」

「……そういえばさ。」

内側のヤツってずっと言ってるけど、誰なんだ？それ。」

「え？」

まあ、碎蜂さん止めた張本人だな。

碎蜂の兄貴の獅牙だ。」

「本気で言ってるのか……？」

「ホントだけど？」

一守は至って笑顔で返す。

大体今まで驚かれてきているために、今回も流したのだろう。

「で、成弥って、流魂界出身だったよな？」

……どんなだったんだ？

嫌なら言わなくてもいいけど。」

「……俺、北流魂界八十地区の更木出身で。」

すぐに外れの山まで逃げて、難は逃れたけど虚が多いの何の。

まあ、それで瞬歩身に着けてたり、斬魄刀の声聞くようになったり。」

苦勞話のように、自らの過去を成弥は話す。

・・・実際、苦勞話以上なのだろうが。

「そこで檜佐木副隊長にあつて、死神になれって言われて、ここま
で連れて来られたんだ。」

「それで試験受けたら難無く通つて、そのまま一年経たないうちに
卒業、みたいな。」

「そついや、今地位つてどの位なんだ？」

「三席。」

「滝棹三席と地位は一緒だけど、向こうのほうが先輩だから・・・。」

「その答えに、一守は、へえ、と素つ氣無く返す。」

「厳密に言えば、俺の方が少し上らしい。」

「一応副官補佐だから。」

「相当憎い眼で見られるだろ。」

「まあな。」

成弥は苦笑して返す。

「厄介なものも居たもんだな・・・。」

「けど、そりゃあ仕事で巻き返しゃあいいだけだ。」

「そつか。」

「お前の腕、見てみたいもんだ。」

「そりゃ明日まで楽しみに取っとけよ。
自信はあるんだ、任しとけてんだ。」

じゃあ楽しみにしてる、と、成弥は笑うと立ち上がった。

「そろそろ寝てた方が身のためだと思う。」

「……結構朝早いぞ?」

「残念。」

睡眠時間は三時間あれば十分だ。」

「だから年の割にそんなにちっさいんだろ、ばーか。」

「ってんめええ!」

「守に怒鳴られるも、そんな事はめっぼう気にしない。」

「……実際、成弥のぼうが背は幾分か高かった。」

「じゃーな」

早く寝ろよー」

「何ノリノリなんだよ!」

「はっはーん」

「守弄るのオモシロー!」

「おい!成弥!」

知るか、とでも言うように、成弥はその場からかき消えていった。
知る人ぞ知る、十番隊の隊長、副隊長の騒ぎのようである。

「・・・何してるんですか？隊長。
物凄く騒いでましたけど。」

通りかかったのは隊員。

様子からしてやり取りは聞かれてはいない。

「あ、いや、なんでもない。

気にすんな。」

そういって、一守は部屋を出て行った。

それぞれの過去と大騒ぎ（後書き）

んー。。。。

ことが起きるまでの話があれば、なんていうか面倒臭いです；

・・・そんなこと言っちゃあだめなんですけど；

さて、まだまだこの話は続くっ！

時軸からして二十年以上！（え

ここで一発、気合入れなおします！

では、感想等お待ちしております。

隊長と副隊長（前書き）

前話の翌日からです。

若干人気ランキング確か一位のあの人が出てきます。

ちなみに、タイトルは率直にそういう意味ではないので；

隊長と副隊長

「……………ん〜……………このやり方なんかしたいんだよねあ……………」

「守は十番隊副隊長である、松本を前にしてそう呟いた。

「どうしたんです？真砂隊長。」

「ほら、こういう風なやり方だから締め切りぎりぎりになる人が出てくる。」

「……………アンタみたいに。」

「さも迷惑とでも言うように、守は言う。」

「作者ごとに編集者就いたほうが絶対いいよな……………」

「それじゃあ締め切り追わされるじゃないですか。」

「それが目的だ。」

「守はずっと腕を組んだままである。」

「……………場所は、十番隊執務室だった。」

「松本、さっさと終わらせる。」

「……………悪いな、真砂。」

「迷惑掛けちまって……………」

「いいですよ、別に。」

急がせなかった俺たちにも落ち度はありますから。」

「……ったく。」

お前も隊長、……対等だ。

俺のことはなんとでも呼べ。」

「あ、そんなに嫌か、敬語。」

「隊長ってあれですもんね。」

ほら」

「それ以上は言わないほうが身の為だとは思っ。」

それより早く手え動かせ。」

「守は溜息をつきながらそう言っ。」

「考えてみる、松本。」

瀨靈廷通信を発行する上での最高責任者である編集長が来て原稿催促してるんだ。

「……早くしろ。」

「もう心配しなくていいです！」

出来ましたよ！ほら！」

「はいどーも。」

確かに受け取った。」

そう言っって受け取ると、守は原稿を確認する。

「・・・まあまあだな、うん。
本当にこれでいいな？」

「いいですよ。」

真砂隊長は早く隊舎に戻って仕事してください。」

「いや、これも仕事なんだけど。」

じゃ、と、短く一守は言うど、その場から消えていった。

「あ！隊長！松本副隊長の原稿もらえましたか？」

編集室に入るやいなや、隊員の声がよく響く。

「まあなんとか。」

これで全部か？」

「はい。」

あとは企画の掲載場所を決めるだけなんですが・・・。」

「盛り上がりそうか？」

「見出しは空座町の決戦実録ですからね・・・。」

その裏側を、というような感じで、

隊長、副隊長のフリートークを掲載する予定ですから、見る読者は多いかと。」

「二つくらいに分けれるか？」

「あ、はい。」

「わかった、じゃあ、最初の半分を実録の直後へ。後の半分をセンターへ、そう伝えてくれ。」

はい、と、隊員は返事をする、慌てて滝棹の元へ向かった。しばらくして、滝棹が一守のほうを見たが、そういうのは気にしない。

「編集長、編集長。」

小さく声が飛んできたと思えば、呼んでいたのは成弥だった。

「なんだ？」

一守が振り向くと、成弥は手招きし、早く来てください、と、小声で言う。

急いで行ってみれば、もう少し近づいてください、と、また小声で言った。

他の誰かに見せたくないものでもあるのだろうか。

「毎回新隊長、副隊長が就かれた時は瀨霊廷通信で取り上げてるんです。」

ほら、こつという風に。」

成弥が取り出したのは、恋次が就任したときの物と思われる瀨霊廷通信だった。

「つまり、俺を取り上げようってか？」

「はい、一応早い段階で決めているので。
後は取材を重ねて、来月あたりに。」

「・・・分かった。」

取材来的时候は言ってくれ。」

その答えに、はい、と、成弥は嬉しそうに答えた。

隊長と副隊長（後書き）

きつと、一守君は現世でのシステムを参考にして
頑張っていくんでしょうねえ・・・（遠い目

瀨靈廷と現世じゃあそういう考えの違いって大きいと思うんです；
だから滝棹に一発反論させた、と・・・。
そういう訳でして。

では、感想等お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8905q/>

漫画家志望、そして死神。

2011年8月10日18時37分発行